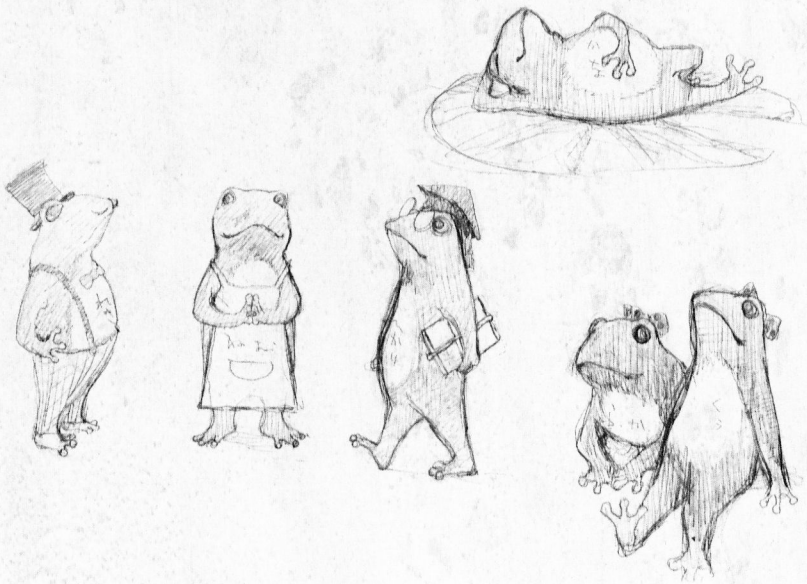
灰羽連盟

脚本集 第五巻

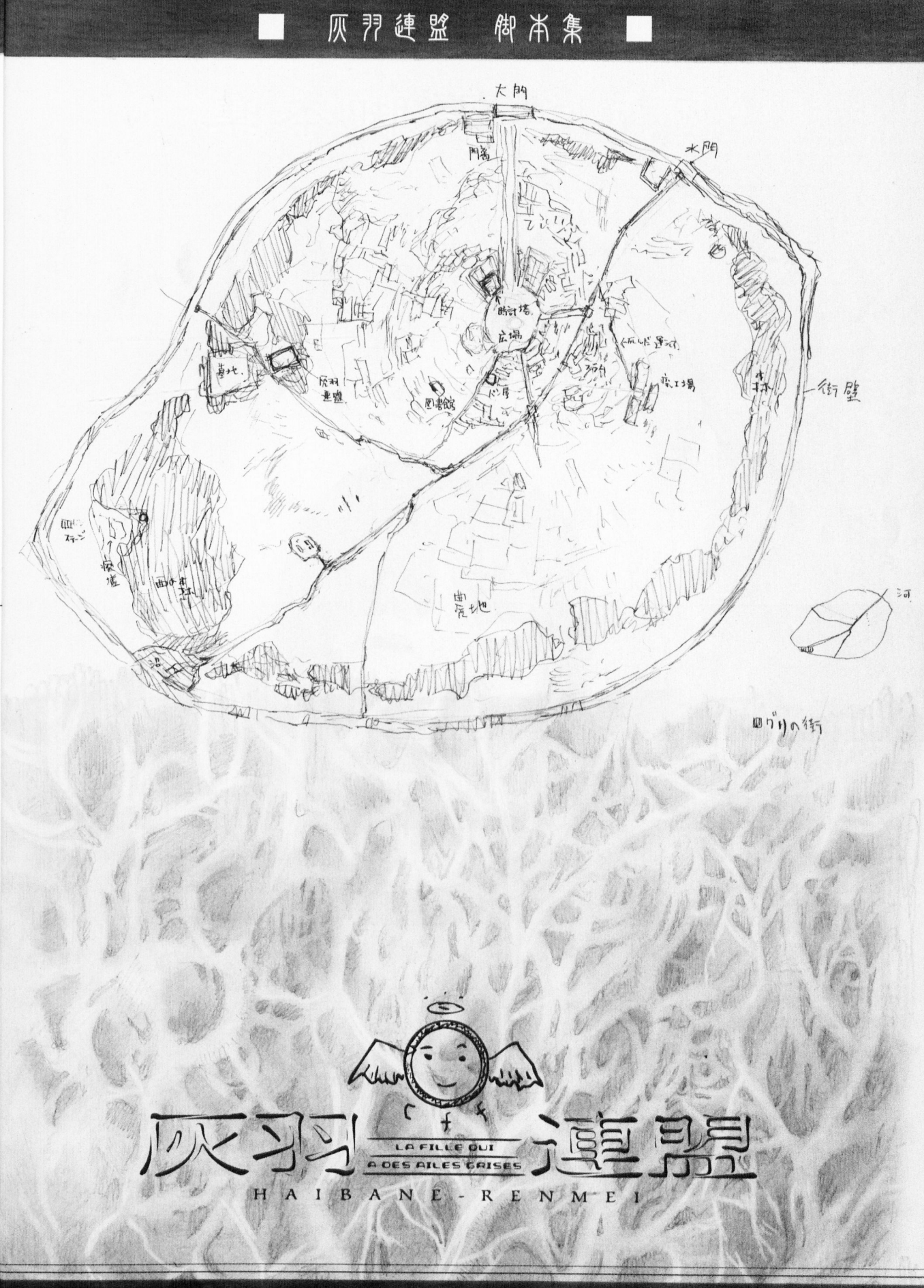
第六話、第七話収録



安倍吉俊

灰羽連盟脚本集

第伍卷


大門
門番
水門
時計塔
広場
墓地
灰羽連盟
図書館
工場
街壁
ステージ
洞窟
河
曲がりの街
HAIBANE-RENMEI

灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第06話　夏の終わり・雨・喪失

第5稿（2002.07.08）

▲初稿では、『ラッカの引っ越し・西の森・喪失』というタイトルだった。直してよかったと思っている。

○登場人物

ラッカ
ネム
レキ
ヒカリ
クウ
カナ

●サブタイトル

●地図

つたない手描きの地図。オールドホームの全体図。北第一棟（北棟2棟の中庭に面した方）に東から順に中ほどまで、部屋の部分に赤ペンのX印が並んでいる。所々に『物置き』とか『水道あり』とか『使えそうなタンス』とか書き込みがある。リアルタイムに、赤いX印がひとつ書き加えられる。

●北第一棟

X印のついた点を実際に歩いているラッカ。ドアを開けて、部屋の中をのぞき込もうとするが、立ちのぼったホコリに巻き込まれ、慌ててドアを閉める。持っていた地図でばたばたと周囲を扇ぎながら

ラッカ「こりゃ（けほっけほっ）だめだ～」

●中庭

中庭のポンプ井戸の前。ラッカがポンプのレバーに体重をかけぐっと引くと、水が不規則な水量で噴き出す。その水で顔を洗うラッカ。ぶるぶると、手と首を振る。水道脇に置いておいた地図を手に取り

ラッカ「北棟は全滅かあ……（地図の北第一棟、第二棟にXをつける）ここがレキの部屋、ヒカリとネムは東棟だっけ……

……っくしゅん！」

ラッカ、くしゃみをし、寒そうに身をすくめる。見上げると、暗く重そうな雲がゆっくりと近づいており、空を汚れた雪のような色に塗り替えつつある。

ラッカ、ふと、ゲストルームのベランダにクウがいるのに気づく。クウも空を見上げている（クウは3話以降いつもかぶっていた帽子を付けていないが、見る側にその

▲灰羽のシナリオのつくりは、朝から始まって時系列順に物語が進み、夜終わるという、オーソドックスというか何のひねりもない組み立てになっている話数が多い事に気づき、今回も朝から始まるので、ちょっと変わった出だしにしようかなと思い、地図のアップから始まるようにした。あまり意味はなかった。

▲初稿では無かったシーン。せっかく井戸とポンプを設定したので使いたくて入れてしまった。本編ではシナリオが長過ぎたために顔を洗うシーンはカットされた。

▲北第二棟の西の端は崩れてしまっている。本当は北第二棟の端まで行って、崩れた床下から階下を除き込むシーンとかを入れたかった。

▲読み返して見ると、僕の文章は空と雲の描写がやたら多い。

事を意識させる必要はない）。
クウ、目を閉じ、ゆっくり息を吸う。ほんのかすかな空気の変化を、感じ取ろうとするかのように。
ラッカ「クウ！」
クウ、はっと目を開く。中庭のラッカに気づき、元気に手を振る。
クウ「おっはよー。そんなとこでなにやってんのー？」
ラッカ「クウこそ、どうしたの？こんなに早く」
クウ、にひひ、といたずらっぽく笑う。

●ゲストルーム

姿見（キッチン入り口脇）の前で、冬服（設定参照）に袖を通すラッカ。姿見にかけてあった布をもって、にこにこしているクウ。
ラッカ「わあ……」
クウ「よかった。ラッカにちょうどの大きさで」
ラッカ「いいの？もらっちゃって」
クウ「うん。クウには大き過ぎるし、もうすぐ、冬が来るから……」
ラッカ、姿見から視線を外し
ラッカ「冬？この間まであんなにあったかかったのに？」
クウ「ここの冬はね、突然来るの。だから最初の年はみんな風邪引くんだ。ラッカも気をつけてね」
ラッカ「うん。ありがとう」
クウ「空気が教えてくれるよ。うーんと深呼吸して、鼻がつんとしたら、それが冬の始まり」
ラッカ「へえ……クウは物知りだね」
クウ、ちょっと照れくさそうに
クウ「そうだ、これ、なに？」
クウ、ベッドの端に座り、ベッドの上に置かれていた地図を両手にとって眺める。
ラッカ「うん、そろそろ自分の部屋を探そうかなって」
クウ、きょとんとする。

▲姿見も、置くだけ置いて出番がなかったので、使いどころがあってよかった。ずっと布がかかっていたので、このシーンがなかったら鏡だと気づかれなかったかもしれない。

▲この話数のクウのセリフは、呼吸をするみたいに言葉がするすると浮かんで、ほとんど迷う事がなかった。

■ラッカ冬服。同人誌『オールドホームの灰羽達』第二巻の表紙をベースに設定。

ラッカ「ここはみんなの部屋だから。……居心地がよすぎて、ここにいると楽する癖がついちゃいそうで」
クウ「えらーい。ラッカももう一人前だね」
ラッカ、笑って
ラッカ「いい先輩のおかげ」
クウ「……へへへ」
クウ、照れて両手に持った地図で顔を隠す。足がぱたぱたとゆれている。ラッカ、姿見の前に戻り、裾丈を見たりしている。クウ、地図からひょこっと顔を出し
クウ「いい部屋、みつかった?」
ラッカ「うーん……。みんなホコリだらけで、いい部屋なのかどうか……」
クウ、なにか思いついたらしく、ぱっと笑顔になって、ペンでなにやら地図に書き込んでいる。それが済むと立ち上がり
クウ「わたし、もう行くね」
ラッカ「もうすぐ朝ご飯だよ」
クウ「うん、でも今日はいろいろやる事あるんだ」
クウ、たたた、と駆けてゆく。
クウの姿が戸口の暗がりに消える一瞬前、暗がりに浮かんでいた光輪の光が、ふと翳ったように見える。
ラッカ「クウ?」
独り言のように、呟いてしまうラッカ。だがクウの姿はもうない。

●ゲストルーム、キッチン

コンロの前のレキ。エプロン姿。
レキ「クウが?(ぽこんとタマゴを割ってフライパンに落とす)なんだよ、クウが食べたいって言うからホットケーキにしたのに」
ラッカ、食器を出しながら
ラッカ「なんか、やる事があるんだって」

▲足をばたばた、というのはベッドの柵部分に腰掛けている、という想定だったが、ラッカが姿見の前にいると考えるとちょっと距離がありすぎ。本編ではきちんと会話ができる位置関係に直されている。

▲『灰羽せいかつ日誌』の方でもちょっとネタにしましたが、卵を食材にしていいのかはちょっと悩みました。まあ卵が使えないとほとんどの料理が否になってしまうのでよしとしましたが。

レキ「どうすっかなー。クウの分」
　ヒカリ、のれんをくぐってキッチンに入ってくる。
ヒカリ「つくっといてあげましょ。匂いにつられて帰ってくるわよ」
　レキ、笑って
レキ「それもそうか」
　突然、部屋の外からごぉん、と鐘の音。顔を見合わせる3人。

●ゲストルーム、ベランダ

　怪訝そうな顔でベランダに出てくる、レキ、ラッカ、ネム、ヒカリ。レキはフライパンを持ったまま、ネムもティーポットを持っている。
　時計塔の窓から派手な身振りで何かを叫んでいるカナ。
カナ「……！！……！（声は聞こえるが内容が聞き取れない、という程度）」
　カナ、窓から身を乗り出して、上を指さす。
ネム「……？」
　ベランダの4人、上を見上げる。上には時計塔の文字盤。時刻はちょうど8時。屋上の鐘の脇の滑車がきりきりと動いており、ふたたび鐘がごぉぉん、と鳴る。驚く4人。
ヒカリ「……すごぉい」
ラッカ「ほんとに直したんだ」
　時計塔の窓べりでガッツポーズのカナ。
　鐘はゆっくりとしたペースでごぉぉん、ごぉぉん、と鳴り続ける。感心する一同。
レキ「これで誰かさんの寝坊も治るじゃん」
ネム「む」
ラッカ「お祝いしなきゃ」
ヒカリ「賛成！」
レキ「おーい！こっち来なよー！みんながカナの栄誉を讃えてやるってさ！」

●ゲストルーム

▲初稿ではカナの『できたーーーー！』という叫びがきっかけで、みんながぞろぞろベランダに出てくる。声が届く距離ではないかもしれないと言うことと、尺が足りなくて、短く詰める意味で変えたのだと思う。

ドアを開け、機械油で汚れたツナギを着たカナが意気揚々と入ってくる。

カナ「イェーイ！英雄様の凱旋だぜ……あれ？」

4人、キッチンのテーブルにゲンナリした顔で座っている。

カナ「なんだよ！その辛気臭い顔は！感動がないぞ感動が！」

窓の外からは、まだ鐘の音が続いている。ネム、ゲンナリ顔で、鐘の鳴った数を数える。

ネム「……にーじゅいーち……にーじゅにー……」

ラッカ、苦笑いしながら

ラッカ「あ……あのさ、これ、いつまで、鳴るのかな……なんて」

カナ「ん？ああ、ブレーカー落とせば止まるけど、そーすっと、時計も止まっちまうからなあ」

ヒカリ「そ、それ、意味ない……」

レキ「アホかー！！とっとと止めに行け！！」

カナ「ああ？来いって言ったり行けって言ったり、なんだよ！いいだろ、こんぐらい景気よく鳴った方がばっちり目が覚めて」

レキ「寝られねえよ！」

カナ「あーあーはいはい！もう、試運転だよシウンテン！本番はこれからだっての……」

カナ、ふてくされてぶつぶついいながら出て行く。

レキ「日曜の朝っぱらからこれだもんな」

ネム「……疲れた」

ネム、机に突っ伏す。

ラッカ、カナをフォローするように

ラッカ「あ、私、手伝ってくる」

●オールドホームの時計塔。機械室

鳴り続ける鐘。カナ、壁のレバーをばちんと落とす。部屋の裸電球も消え、薄暗くなる部屋。

ラッカ「わっ」

▲初稿ではもっと連続して音が鳴るはずだったので、数字が多い。

▲漫才みたいになってしまった。

カナ「待ってな」

カナ、机の引き出しから懐中電灯をとり出す。かちり、と明かりがつく。ぎぎぎ、と歯車のきしる音がして、階上から響いていた鐘の音が止まる。

機械室の床には寝袋や、食器が散乱していて、すっかりカナの私室と化している。

ラッカ「……止まった」

カナ、窓際の古机の椅子を引っ張り出し、どさっと腰を下ろす。

カナ「やれやれ。ま、楽しみがちょっと先に延びただけさ」

ラッカ「……残念だったね」

カナ「べっつに。鐘が鳴らなかったなら失敗だけど、山ほど鳴ったんだから、むしろ大成功じゃん」

ラッカ「……はは」

カナ「さて、と。せっかく来てもらったけど、手伝ってもらう事はないなあ。服、汚しちゃ悪いし。それ、クウんだろ?」

ラッカ「あ、うん」

カナ「ラッカにあげたってことは、クウもとうとう諦めたか」

ラッカ「何の話?」

カナ「いや、それ、クウがここに来て、最初に買った服なんだ。子供扱いが嫌で、無理してみんなと同じ丈の服を買ってさ、結局着れないまんま」

ラッカ「……いいのかな、もらっちゃって」

カナ「クウはもう背伸びしなくて良くなったんだよ、きっと」

ラッカ「えっ?」

●オールドホーム、東棟4階、廊下

散らかった通路を、ゴミをよけながら歩くラッカ。角材が通路をまたぐように倒れていたりして、なかなか大変である。それをよけながら、ぼんやりとカナのセリフを回想するラッカ。

カナ（回想）「昔のクウは、とにかくみんなのマネしたがってさ」

▲僕も、小学校に上がり立ての頃、初めてドライバを手に入れて、まず手近にあった時計を分解した。元に戻せなくなりそうで、途中で戻してしまったけど、今までは一分の隙もなくかっちりと造られているものだと思っていたスイッチや基盤などが、案外単純でずさんなつくりになっているのを見て『ああ、人がつくっているんだなあ』と変な感心のしかたをしたのを憶えている。それでも、機会の秘密を知ったような気持ちになって、そういう職業に憧れたりもした。

今ではすっかり不器用人間で、ノートパソコンの吾の換装をしたりすると、ギャグではなくネジが2、3個余ったり足りなかったりする。どこで間違えたのか……。

ラッカ（回想）「へえ……」
カナ（回想）「レキのスクーターいじって電柱にぶつけたり、ヒカリの眼鏡かけて、目ぇ回して階段から落ちたり、昔は手のかかるチビだったけど、チビはチビなりに大人になったのかもなあ……」
椅子にもたれて、感慨深げなカナ。

回想終わり。
ラッカ「私も頑張んなきゃ」
ラッカ、ドアの前に立つ。こほんと咳払いして
ラッカ「せぇーのぉ」
ラッカ、ドアノブを、ぐっとひねる。が、ドアは蝶番がはずれてそのままバタンと向こう側に倒れてしまう。
ラッカ「わあぁぁ！」
飛びずさり、ため息をつくラッカ。気を取り直して地図を広げる。ふと、西館4階に落描きを見つける。クウの似顔絵と『クウのおすすめ』という拙い文字。
ラッカ、近くの階段を駆け降り、踊り場の窓から中庭を見る（廊下の窓からは外は見えません）。中庭を挟んだ向かいの棟に指示された部屋が見えるが、外観からは何も分からない。
ラッカ、もう一度地図を見る。
ラッカ「現在地がここで……」
ラッカ、現在地を指で押さえる。そのまま地図上の中庭を指ですーっと横断し、クウの似顔絵の位置に指を置く。
ラッカ「ここ……かぁ」

●オールドホーム、西館4階

地図を片手のラッカ。
ラッカ「えーと、ここかな？」
ラッカ、恐る恐るという感じでドアノブをひねり、またドアが倒れてしまわないように、そーっと押す。だが、予想に反してドアは滑らかに開く。中を覗くラッカ。そ

7

▲最初、うっかり廊下から外を見る、書きそうになった。廊下から外が見えるようにするかについて、初期の段階で美術監督といろいろ相談していたのと、このシナリオの前後で建物の見取り図を何度も確認していたので、階段の踊り場までいかないと外が見えない事に気づいた。

の表情がぱっと明るくなる。
ラッカ「わあ……」

●オールドホーム、西館4階、繭の部屋。

きれい、とは言わないまでも、積もったホコリなどが掃き清められ、さっぱりとした室内。内装は簡素だが、水道もある。
ラッカ、辺りを見回しながら、部屋の中ほどまで歩く。
ラッカ、無意識のうちに胸に手を当てて、目を閉じている。
ラッカ「なんでだろう……なんか懐かしいような……」
クウ「それはね、ここがラッカの生まれた場所だから」
ラッカ、振り返る。戸口にクウが立っている。肩から鞄と小さな水筒を下げている。
ラッカ「生まれた……場所？」
クウ「繭の部屋。ラッカが今立ってる場所に、でーっかい繭があったんだよ」
そこに繭があるかのように、視線をあげるクウ。つられてラッカも天井を見上げる。
ラッカ「……うん。少しだけ憶えてる。ほんの少しだけ……」
クウ「クウも少しだけ憶えてた。だから、そこを自分の部屋にしたんだ。ラッカはどう？気に入った？」
ラッカ、ほほ笑み
ラッカ「うん。……そうだ、どこ行ってたの？クウのためにホットケーキつくったのにってレキが怒ってたよ」
クウ「えへへ」
クウ、鞄から半月型の紙包みをとり出し、ラッカに差し出す。
クウ「レキに頼んで、お弁当にしてもらった。ラッカの分も」
ラッカ「あ、ありがとう。そっか、私も朝ご飯食べそこねてた」
レキ「レキが怒ってたよ～」
ラッカ、笑う。クウ、窓際に寄る。窓は少しだけ開いている。見上げると、太陽がゆっくりと雲に隠れて、部屋

8

▲最初、比較的きれいな……と書こうとして、そういえば繭のせいで床がボロボロだ、と気づいた（誰かに指摘されたのかも）。結局、マットを敷いてフォローすることにした。

▲半月型というのは、ホットケーキを半分に切って、間に何かを挟んでサンドウィッチのようにしているから。まあどうでもいい事ですが。

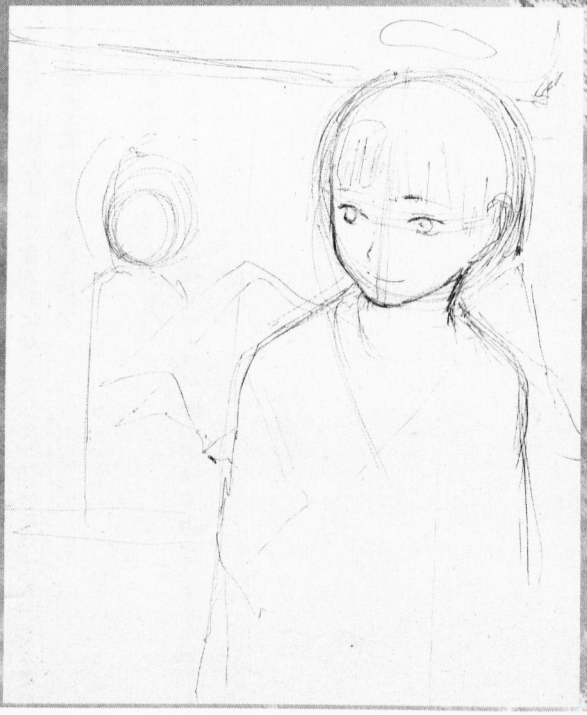
の床に落ちていた二人の影を、ぼんやりした薄闇の中にまぎれさせてしまう。
光があった時は気づかなかったが、薄闇の中ではクウの光輪は少しだけ薄暗い。クウの後ろ姿からは感情が伺えない。さっきまでの親密な空気はどこへ行ったのだろう。
ラッカは漠とした不安に駆られる。窓に映るクウの表情をうかがおうとするが、窓は曇っていて、何も映してはくれない。
不意に、クウが口を開く。クウ自身が選び、発している言葉には違いないのだが、声の質から幼さが消えている。
クウ「心の中に、コップがあるの。奇麗で、透き通った、コップ」
クウはゆっくりと手を上げ、指先で上から下に窓ガラスをなぞる。
クウ「そこに、小さな雫（しずく）が落ちてくるの。ぽつ……ぽつ……って。毎日、ちょっとずつ。それでね、今日、あたしのコップがいっぱいになったような、そんな気がしたんだ」
ラッカ「……クウ」
胸の内で次第に大きくなる、不安とも畏れとも違う感情に耐えかねて、ラッカはクウの名を呼ぶ。振り向いたクウは微笑んでいる。いつも通りのクウ。だが、どこか老成したような、静かな笑顔。クウの肩に触れようと差し上げた手が止まる。
クウ「ラッカも、あたしに雫をくれたんだよ」
クウ片手を差し伸べ、ラッカの、迷い、行き場を失った指先を自分の指先で軽く握る。ガラスに触れていたクウの指先は冷たく湿っている。
クウ「だから、ありがと」
クウ、走り去る。
ラッカは、その指先に残った感触を表す言葉を見つけられぬまま、呆然とたたずんでいる。畏れでも、不安でもない痛み。――――喪失。

●空

9

▲シナリオというより、小説のような書き方になってしまっている。でも、こう書かないと伝えたい事をうまく伝える事ができなかった。

▲同じ文字を何度も書きつづけていると、たとえば『山』という字を書きつづけていると、だんだんそれが意味を成さない記号のように見えてきたりする事があるけど、絵でも同じような事がある。アフレコの立ち会いの時、このシーンでラッカの指先を握るクウの手の仕草が、もうちょっと指の先に触れるだけ、というような説明をしようとして、メモ帳に手を描き始めたらはまってしまい、メモ帳一冊手の落描きでて埋まってしまった。



■DVD3巻ジャケット。A3のケント紙いっぱいにいきなり描き始めたおかげで、構図で大変な苦労をしてしまった。もっときちんとあたりを取ってから引き伸ばしてトレスすれば良かった。こういう構図の絵を描く時、3Dモデリングのソフトが使えたらいいなあと思う。単純な面取だけでいいから、部屋と人の背と同じ高さの直方体でモデルを作れれば、実際にそれを絵の当たりに使わなくても、だいたいの入り方くらいは分かるので便利でないかと思う。
　という話を何年も前からしていて、Shadeとか六角大王なんかを買ってはあるのだけど、一向に使えるようにならない。

暗い色の雲が、驚くような速さで流れている。空は低い。
遠くで幽かに雷鳴が聞こえる。

●ゲストルーム、ベランダ

ベランダに出したテーブルと椅子にビニールのシートを、かぶせているレキ。遠い雷鳴に、大げさに首をすくめて見せ、空を見上げる。

レキ「荒れてきたなあ」

●ゲストルーム

レキがベランダから戻ると、戸口に所在なげにラッカが立ち尽くしている。今にも消えてしまいそうな、不安げな顔。そんな時いつもそうであるように、レキは微笑んで見せる。安心しろ、というサイン。

レキ「どうやらひと雨きそうだよ。せっかくの日曜なのにね」
ラッカ「……うん」
レキ「そういや、ラッカ、引っ越すんだって？クウが言ってたよ」
ラッカ、うつむいていた顔を上げ
ラッカ「クウ……ほかに何か言ってた？」
レキ「ん……別に。そうだ。キッチン片づけてくれたの、ラッカ？」
ラッカ「ううん」
レキ「あれぇ？んじゃ誰だ？」
ラッカ「……クウ」
誰に言うともない呟き。
レキ「クウ？ふーん。にしちゃあ、割れたお皿がなかったけどな」
冗談めかす。ラッカは無反応に俯いている。レキ、軽く肩を落とし
レキ「座りなよ。今お茶入れる」
ラッカ「レキ」
キッチンに消えようとするレキを、思わず呼び止めてしまうラッカ。自分の視界から誰かが消えてしまうのがた

▲レキがビニールシートを掛けているシーンは本編では省略。5話あたりから、どうしても詰め切れなくて、コンテや編集時に切ってもらう形になってしまった。作画したのに切らざるを得なかった部分もあり、申し訳なかった。今、冷静に見返せばこういう物語に直接関わってこない細かい描写は僕が判断して落とせるのだが、書いていた時は物語があまりに鮮明に頭に浮かんでしまっていて、動かすのが難しかった。それだけ集中して書けているのだけど、同時に冷静にもなれなければいけない。絵を描く時にいつも心がけている事だが、なかなか難しい。6話は、5話に続いてエンディングをカットしてもらって何とかしのいだけど、スタッフロールが小さくなったり、エンディングテーマが流せなかったりと、反省点は多い。

まらなく不安なのだ。
レキ、ちょっと狼狽し
レキ「……なに？」
ラッカ「……うううん、なんでもない」

●ゲストルーム。若干時間経過

温かそうな湯気を立てているコーヒーカップが二つ。雷鳴が近づいている。
レキ「こういう天気の時はさ、誰でも憂鬱になるもんだよ。良くない事が起きるんじゃないかって、勝手にくよくよしたり」
ラッカ「……そうなのかな？」
レキ「一人部屋が不安だったら、まだここにいてもいいんだよ」
ラッカ、カップを両手で包むようにして
ラッカ「ううん、それは平気。……ねえ、どうしてこの街には壁があるの？」
レキ「どうしてって……。そうだな。多分、ここは守られている場所なんだよ」
ラッカ「守られてる……って、何から？」
レキ「良くない事のすべてから。あるいは……私たちが知るべきではないすべてから……」
ラッカ「それは……」
突然、窓の外で激しい雷光。一瞬おいて窓を震わすような落雷。
ラッカ「きゃっ！」
悲鳴を上げるラッカ。レキも首をすくめる。部屋の明かりが激しく瞬き、消える。落雷がおさまった後も、互いに口を開く事ができない。ラッカ、のろのろと身を起こし
ラッカ「停電……？」
レキ「近くに落ちた。待ってて、ライトがどこかに……」
レキ、部屋の隅の戸棚を漁る。
薄暗い部屋。ベランダに続くドアから灰色の鈍い光が差し込んでいる。その窓ガラスに鋭い掻き傷のように雨滴

▲この話数は、ほとんど完全にアドリブで書いている。もちろん全体の構成はあるのだけど、この話数内で、後半の展開のために意識して前半に伏線を撒く、という事をしてはいない。伏線という意図がなかったのに、どうしてここで落雷のシーンを書いたのか今ではさっぱり分からない。物語が自分の手を離れて、キャラクターが勝手に喋り、勝手に事件が起きてゆく感じ。突然雷が落ち、停電になって、僕自身も『このあとどうなるんだろう？』と思いながら書いていた。

が走る。ざあっという雨音。ラッカ、怯えながらもベランダに駆け寄る。激しい雨が、ベランダの石畳をあっと言う間に黒く染めてゆく。不意に一話のカラスが飛来し、ベランダの手すりに止まる。ラッカを見て一声鳴き、素早く飛び去る。ラッカ、壁に顔を寄せるようにして、外を伺うが、ベランダからでは中庭しか臨めない。ラッカ、踵を返して部屋の外へ。レキ、驚いて

レキ「ラッカ、どこへ――――」

●オールドホーム、西館2階と3階の間の階段踊り場

ドアを開け、廊下を挟んだ向かいの階段を駆け登るラッカ。踊り場の窓の前。窓は汚れと雨滴で曇っている。枯れた鉢植えを押しのけ、錆びた窓を強引に押しあけると、窓縁の鉢植えが突風で跳ね飛ばされる。ラッカ、叩くような雨滴に一瞬怯むが、身を乗り出し、外を伺う。

雲脚があまりに速すぎて、オールドホームの西の、くすんだ色の背の低い草の海が、雨滴を浴びて艶やかな色に変じていくのがはっきりと見える。先程のカラスが、雨雲の突端と先を争うように飛び去ってゆく。その先、西の森の途切れる辺りに、ほんの幽かに、細い、一筋の光。雷ではない。雲はまだそこまで達してはいない。

なによりその光は地上から空へと伸びたかに見える。眼を細めるラッカ。だが、その真偽を確かめる間もなく、雷雲がすべてを覆い隠してしまう。

風雨に森が震え、ようやく森に達した一羽に呼応するかのように、木々の間からカラスが一斉に飛び立つ。

レキ「ラッカ……」

いつの間にか、ライトを片手に、レキが心配そうに立っている。

ラッカ「西の森に、鳥が……」

レキ「ああ、カラスもびっくりしたろうな」

ラッカ「……何かを知らせようとしてたみたい」

レキ「窓、閉めるよ。ずぶ濡れだ」

▲記憶が曖昧だが、今読み返して『一話の』は『一羽の』の誤植ではないかと思った。しかし、1稿から5稿まで直されていないところを見ると、これは当時僕が意図してここにいる鳥は一話の鳥である、と書いたのかもしれない。意味としては間違いではないのだが、ラッカがこの鳥を見てもそうとは分からないはずなので、なぜこう書いたのか分からない。ただの鳥ではなく、特別な感じがするように描写して欲しい、という意味とも取れるが、それならそう書くべきで、自分で書いた文章なのに首をひねってしまった……と、ここまで書いて、意図して『一話の』と書いたのをかすかに思い出した。でもちょっと不親切な書き方だったなと思う。

▲この時のラッカの仕草や、窓を開けた時、わっと雨音が大きくなる様子、雨に濡れた風の匂いや冷たさ、落ちた鉢の割れる音などが、実際にあった事のように頭によみがえる。本編では前後の流れや、尺の関係で省かれてしまって残念。

▲鳥、鳥、カラス、と表記が統一されていない。鳥と呼ぶかカラスと呼ぶかに関してはある程度意図があるのだけど、所々区分けが曖昧なところがある。申し訳ないです。

ラッカ「レキ……」
　レキ、建て付けの悪い窓をがたがたと閉めながら
レキ「部屋にいて。私、チビ共を見てこないと」
　立ち去るレキ。取り残されるラッカ。

●ゲストルーム前の廊下。30分経過

　雨は降り続いている。薄暗い階段を、ライトの光がふらふらと上がってくる。レキ、片手にライトを持ち、もう片方の手に持ったタオルで髪を拭きながら、ゲストルームに入る。
レキ「いやはや、泣く子はいるわ、はしゃぐ子はいるわ。まいったよ……」
　ラッカの他に、ネムとヒカリが部屋の中で所在なげにしている。
ラッカ「レキ」
レキ「あれ、カナとクウは？」
ヒカリ「カナは地下の発電機を見に行ってる。クウは……」
ネム「いないの。いつもならこういう時、真っ先にここに来るのに」
ヒカリ「街に行ったのかな、とも思ったけど……」
レキ「雨宿りできてればいいけど、道の途中だったら悲惨だなあ」
　ラッカ、いたたまれない、といった風に
ラッカ「私、見てくる」
レキ「見てくるって、どこ……」
　レキの脇をすり抜け、走って出て行くラッカ。ぽかんとするレキ。
ネム「ラッカ、どうしたの？」
レキ「わからん。朝からずっと今日の天気みたいでさ」
ヒカリ「私、……分かるような気がするな。今日の空を見てると何だか、じっとしていられなくなるの……」
　ネム、ヒカリをなだめるように
ネム「確かに嫌な天気だけど、夏と冬の間はいつもこうだよ。季節の変わり目は、気持ちも落ち着かなくなるもんよ」
ヒカリ「そっか……そうかもね」

■光柱、設定。メインの光柱から、柔らかい糸のような細い光の束がほどけて広がってゆく感じをイメージしていたが、本編ではちょっと固くなってしまった。

少し無理して笑顔をつくるヒカリ。レキ、それを見て少し安心する。

レキ「私はラッカを見てくる。カナが戻ったら部屋にいるように言って。みんながバラバラに動くと、収拾がつかない」

ネム「分かった」

レキ、タオルをぽんとネムに渡し

レキ「やれやれ、やっと乾いたと思ったら……」

と、ぼやきながら出て行く。ヒカリ、気を取り直すようにぱん、と手を打ち合わせ

ヒカリ「そうだ、お風呂沸かしておこう。クウがずぶ濡れで帰ってきた時のために」

ネム、頷く。

●オールドホーム、正面アーチ門

アーチの下で、呆然と外を窺うラッカ。

叩きつけるような雨で道が煙って、灰色の磨りガラス越しのような景色。河の水量が増しているのだろう、どおどおという水音が雨音に混じっている。ときどき空のどこかが爆ぜるように光り、ラッカはその度に身を縮める。

レキ「ラッカ！」

レキ、傘を手に走ってくる。突風に煽られ、ほうほうの体でアーチの下にたどり着く。

レキ「ひゃ、傘は駄目だね。カッパを探さないと」

ラッカ「……」

レキ、ラッカの隣に並び、橋の向こうの畦道を見る。煙草を採り出して、一本くわえ

レキ「良かった。無茶して飛び出したら風邪っぴきが二人になっちゃう。大丈夫だよ。どこかで雨宿りしてるって」

レキ、煙草に火をつけようとするが、湿気っていてなかなかつかない。

ラッカ「クウは……街に行ったんじゃないと思う」

レキ、ライターと格闘する手を止め、ラッカを見る。

ラッカ「クウはレキに、お弁当つくってって言ったんでしょ？」

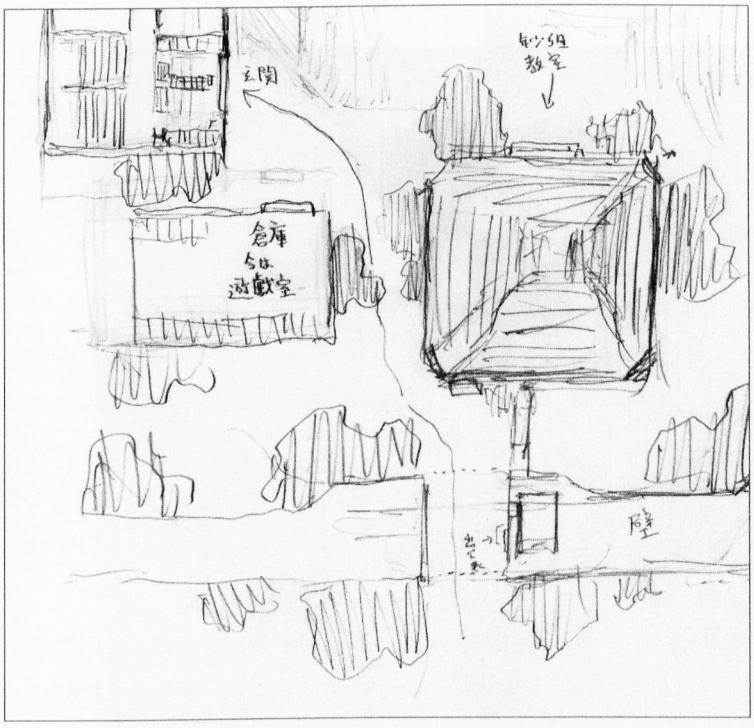
▲磨りガラスは『すりガラス』です。自分でも一瞬読めなかった。

▲レキが努めて明るく振る舞おうとしているのは、裏によくない予感があるため。

▲カッパという単語を、カッパという妖怪がいない世界で使っていいものか……などと考え始めるときりがなくなるので、割り切ってます。

レキ「ああ、うん……」
ラッカ「水筒も持ってた。あれは、クウなりの旅支度だったんだ……」
レキ「旅？旅って……どこへ？」
ラッカ「……たぶん……西の森」
レキ「まさか。あそこは壁の力が一番強いんだ。クウも西の森が危険な事は知ってる。だから……」
カナ「西の森に？クウが！？」
　はっとふりかえるレキとラッカ。カナ、ばつが悪そうに
カナ「立ち聞きしたわけじゃないぜ。発電機のヒューズが飛んでたから、時計塔のやつを使おうと思って……。それより」
レキ「ああ、……かもしれないって話。クウの帰りが遅いから」
カナ「でも、もしホントだとしたら、それって……」
レキ「カナ！まだ決まったわけじゃない」
ラッカ「なんの……話？」
カナ「ラッカ、西の森なんて行った事ないだろ。なんで西の森だって思ったんだ？」
ラッカ「……雨が降り出した時、西の森で鳥達が騒いだの。何かを知らせるみたいに」
レキ「それは雨のせいだよ」
ラッカ「それで……西の森に光が見えたの」
　レキとカナ、顔を見合わせる。
カナ「……雷だろ」
ラッカ「ううん、森から、空に向けて光が伸びていくのが見えたの」
　息を飲むレキ。ラッカの肩をつかみ、揺さぶる。
レキ「見たの？それは確か？！間違いない？」
　ラッカ、レキの真剣な口調に戸惑い
ラッカ「多分……でも、すぐに雲に隠れちゃったから……」
カナ「嘘だ！」
ラッカ「……カナ？」
カナ「アタシは絶対信じない！信じないからな！！」
　カナ、ラッカを責めるようにそう言い放ち、走り去る。
　呆然とするラッカ。レキ、静かに
レキ「信じたくなかったけど……クウは、本当に行ってしまった

▲カナが向かった地下の発電機は、南棟の隣の倉庫の地下にあるという設定。倉庫自体が作中に出てこないので、説明のしようがないのですが……。



■一応、図解。1巻に全体図を載せていますが、こんな風になっています。

のかもしれない」
ラッカ「えっ？」
レキ「灰羽はね、巣立ちの日が来ると、壁を越えるんだ」

●　ゲストルーム

クローゼットを漁るカナ。必死の形相。
ヒカリ「レキがここで待ってろって……。どうしたのよ、カナ」
カナ、取り出したレインコートを羽織りながら
カナ「クウは西の森にいる。今なら追いつけるかも」
ネム「どういう事？」
カナ「巣立ちの日が来たんだ」

●オールドホーム、1階玄関

レインコートを着込み、懐中電灯を持ったカナが階段を下りてきたところ。ゲストルームに戻ろうとしたレキ、ラッカと鉢合わせる。
カナ「どいて！」
レキ「駄目だ！陽が落ちてからは危険だ！」
カナ「だったらなおさらクウを一人にしておけないだろ」
レキ「巣立ちの日が来た灰羽には導きがある」
カナ「レキは知ってるのかもしれないけど、アタシらにはそんなのただの言い伝えなんだよ」
ヒカリとネム、駆け降りてくる。レキがカナを引き止めているのを見てほっとするネム。
レキ「カナ、行ったって何もしてやれない」
カナ「分かってるよ！……でも、会うだけでいい！顔を見るだけでも。レキはクウにさよならも言えないで平気なのかよ？！」
ヒカリ「レキ、……私、クウが行っちゃうって本当？……なんで？……間に合うなら、私もクウに会いたい」
レキ「私だってそうだよ。でも、目印もなくあの森に入ったって、絶対抜けられやしない！」
ラッカ「目印があればいいの？」

▲これもまた、伏線として考えてはいなかった。レキのカナの対立がどう収束するのか分からないまま書きつづけていたら、ラッカが突然叫んだので、僕がまずびっくりしてしまった。結果的に非常にうまく話が展開してくれた。

レキ「ラッカ？」
ラッカ「カナ！時計塔の鐘！！」
カナ「えっ？」
ラッカ「鐘を鳴らして！時計塔の発電機は動くんでしょ？鳴らせるよね！？ずっと鳴らし続けられるんだよね！？」
カナ「そうか！」
カナ、時計塔に向かって走る。
レキ「ラッカ……」
ラッカ「レキお願い！このまま何もしなかったら、私きっと後悔するから！」
レキ、逡巡する。
ネム「で、レインコートはあと3人分？4人分？」
レキ「……分かったよ。みんなで行こう。でも約束して、壁には絶対近寄らないって」

●西の森。夕刻

遠くで、鐘の音が鳴り続いている。雨はやや弱まったが、陽が傾き、空はさらに暗くなっている。
お揃いのレインコートの5人。羽袋のついたコート姿は、やや滑稽にもみえる。
鬱蒼とした森の中をゆく5人。森は深く、木々の切れ目から空はほとんど見えない。
森をゆく一行の絵にレキとラッカの会話をかぶせる。

レキ（モノローグ。以下『』はモノローグ）『西の森の奥に、古い遺跡の跡地があって、巣立ちの日が来た灰羽は、そこに導かれて壁を越えるって言われている。巣立ちの日は、誰にいつ訪れるか分からないんだ。……ただ、ある日ふっと居なくなってしまう。何故そんな事が起きるのか、理由は誰も知らない……』
ラッカ『誰も？』
レキ『巣立ってゆく灰羽は、決してその事を話さない。それに昔、繭が生まれない年が続いたせいで、巣立ちの日自体が、もう

▲記憶が曖昧だが、シナリオでは羽袋のついたレインコートを考えていたようだ。本編ではランドセルのように背中が大きく膨らんだデザインになっている。僕がデザインまで手が回らなくて、監督かコンテの人に設定してもらった。羽袋型にしなかったのは、羽袋は「話のネタ」なのでここでは羽袋っぽいデザインは避けようという話だったろうか？あるいはここに書いたように、羽袋つきレインコートは間抜けに見えるからだろうか。着るのが大変だからかもしれない。

何年もなかったんだ。……そう。何年もなかった……。だから、いつか誰かとこんな形で別れるかもしれないってことを、忘れかけてたのかもしれない……』

カナ「レキ！こっちだ！こっちに道がある」

カナ、草むらをかきわけると、その先に細い道がある。舗装はされていないが、うねった木の根や低く密集した枝が、ちょうどトンネルのような空間をつくり出している。

レキ「鐘の音を背にして進むんだ。迷わなければ、壁に近づきすぎる事もないはず」

●ステージのある平原

トンネルを抜けると、草原が広がっており、遥か前方に壁がある。その中間くらいの位置に、古い遺跡の階段部分だけが生き残ったような建造物がある。針のように細い、丈の低い草で出来た草原から突き出すように、石柱が不規則に並んでいる。

雨はいつの間にか上がっている。陽はすでに落ち、晴れた夜空に、三日月が昇っている。カナ、レインコートのフードを毟るようにはねのけ、叫ぶ。

カナ「クウーーーーっ！」

ラッカ、ステージの上に、光る何かを見つける。月の光を反射してかすかに輝く何か。

ラッカ、ステージに向かって走る。

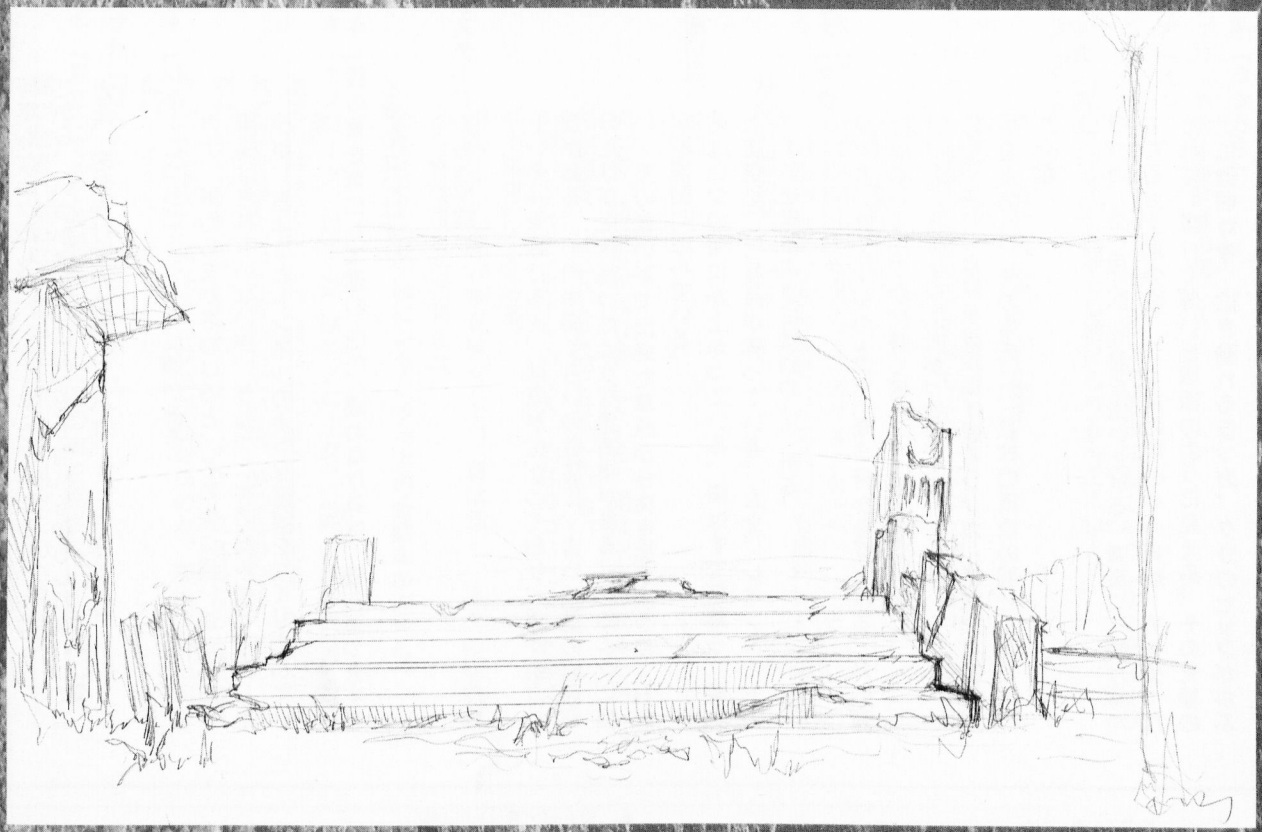
息を切らし、階段を数段駆け登るラッカ。絶望的な顔で、足を止める。その足元に、数枚の灰色の羽と、光を失った光輪。

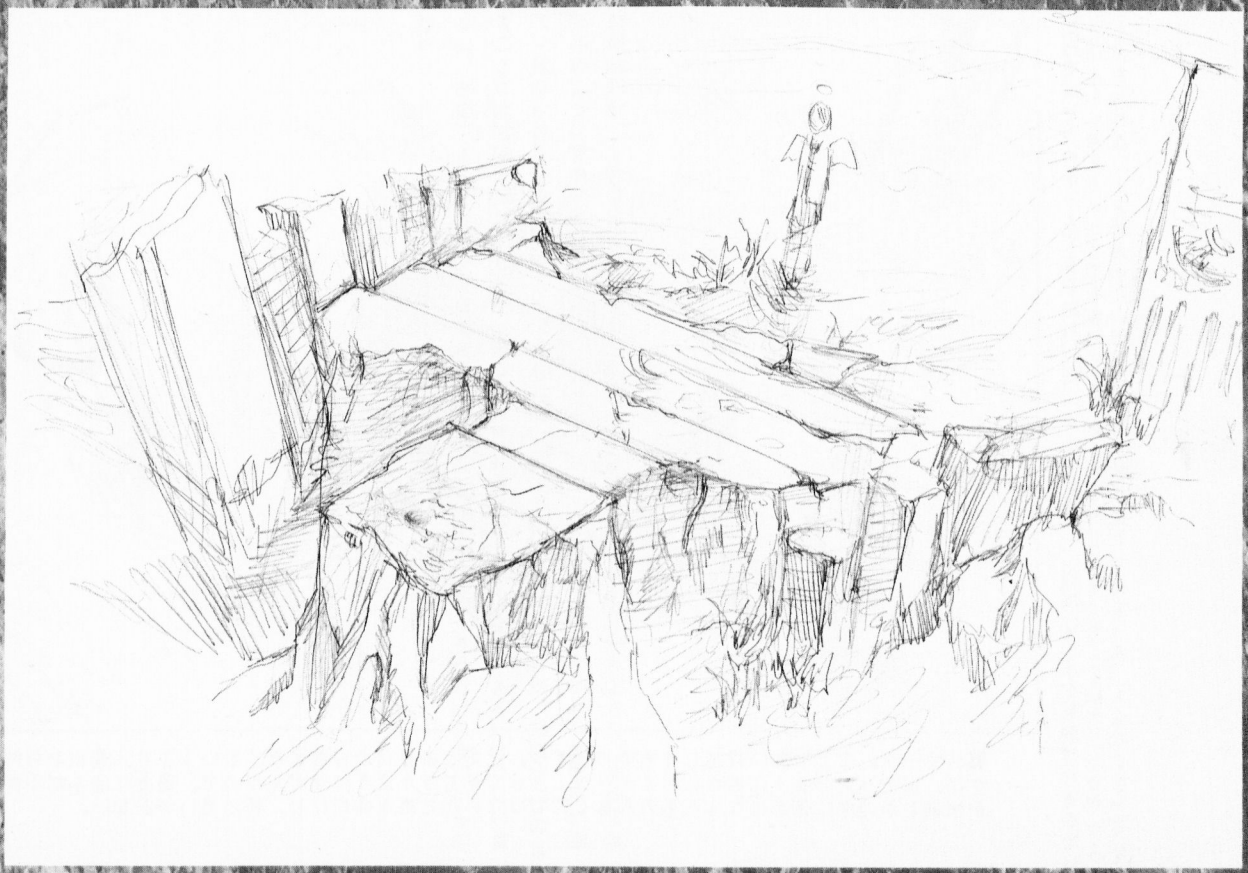
ラッカ「ああ……」

ラッカ、身を屈め、光輪を拾い上げる。背後に、駆け寄ってくるカナ達の姿。ラッカの手の中の光輪。光を失ったそれは、煤けた薄い金属板のように見える。その光輪の上に透明な雫。泣き崩れるラッカ。クウのセリフがかぶ

■ステージ。ごく初期に設定したもののひとつ。設定上必要だから考えた、というより、最初から頭の中に、当たり前のように存在したイメージ。まるで見てきたように浮かんだので、過去に読んだ小説とか映画とかの中に原形になったものがあるのではないかと思うのだけど、特に思いつかない。

▲COG.00ではラッカが一人で森を訪れ、叫ぶシーンがある。当時はそんな展開になるのではないかとぼんやり考えていた。でも書いてみたらこうなってしまった。7話でラッカが一人でステージを訪れるシーンがあったのだが、何度も構成をやり直すうち、入らなくなってしまった。





さる。

クウ『ラッカも私に雫をくれたんだよ。……だから、ありがと』

ラッカ、目を閉じ、天を仰ぐ。

ラッカ『クウ……』

暗転。

●礼拝堂への道

さく、さく、と固い草を踏んで、五つの影が森を歩いている。遠くではまだ、低い鐘の音が、ゆるやかに、規則正しく鳴り続けている。苦悶する蛇のように絡み合って伸びた木の根を踏み越えて、一行は森の中に再び分け入ってゆく。雨は止んだが、風が吹くたびに梢の振りまく飛沫が髪を濡らし、結局5人は再びフードを目深にかぶっている。物思いに沈むラッカのアップ。

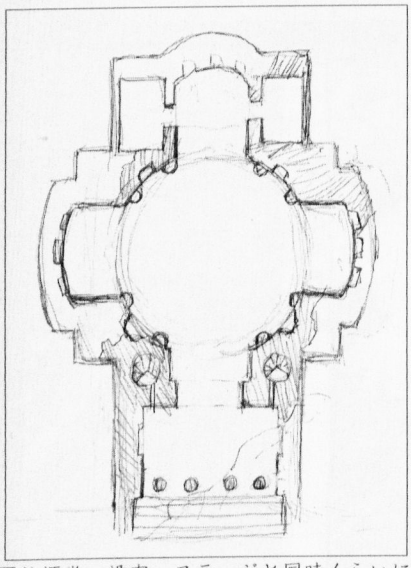
●礼拝堂

半ば朽ちかけた礼拝堂。神像が置かれていたと思われる台座はすでに崩壊していて、かつて如何なる神が祭られていたのか今となっては知るよしもない。ドーム状の天蓋も、半分以上崩落していて、そこから淡い月の光が降り注いでいる。

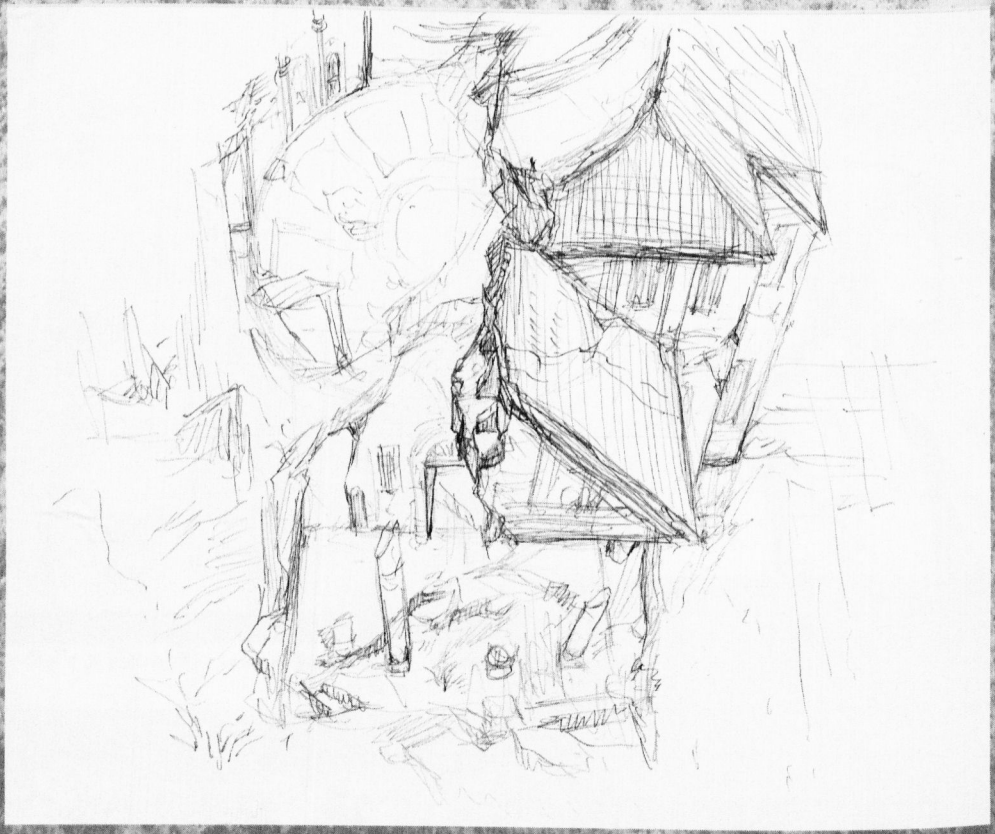
その、崩れた天蓋から覗ける虚空に向かって、一同は静かな祈りを捧げる。長い祈りを終えて、ラッカはふと顔を上げる。傍らに立つレキは、祈るでもなく、ただ力なく空を見上げている。かすかに唇が動き、レキは呟きを漏らす。

レキ「みんな、私を置いていっちゃうんだな……」

原稿用紙200字詰め77枚



■礼拝堂、設定。ステージと同時くらいに描いたと思う（調べたら、ステージが2002/05/07、礼拝堂が2002/05/18に提出している）。ステージと違って、こちらは難儀した。イメージはあったのだが、ある程度建物として嘘のない物でなければ、という気持ちもあって、色々調べているうちにずるずると時間を食ってしまった。特定の教会の様式になり過ぎず、しかし宗教的であり、しかも壊れているので、その壊れ方も考えながら描こうとしたらうまく手が動いてくれなかった。こういう時は、見取り図を描いて、壊れていない状態の正面図と側面図くらいはつくった方が逆に早いのかもしれない。結局見取り図だけつくって何とか仕上げた。



■入口付近。屋根が今にも崩れそう……。入口が大きいので縮尺が分かりづらいが、そこそこ大きな建物

■アニメ誌用の版権物のラフ。6話のラストシーンの想定。ラッカは2種、レキは3種類描いた。

灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第07話　傷痕・病・冬の到来

第7稿（2002.08.04）

▲初稿では、この話数のタイトルが『鳥』で、7話後半でラッカは森に入り、井戸の底で鳥の死骸を見つける展開だった。そのバージョンでは、罪憑きと言う言葉は出てきたが、羽が黒くなるという設定はなく、巣立ちの日によって仲間を失った事に対する喪失感を乗り越える事ができず、心を病んでしまう者、を漠然と罪憑きと呼んでいた。その状態の説明が曖昧である事と、相対的に、クウの巣立ちを短期間で乗り越えてゆく仲間たちの心の状態を『灰羽は壁によって悲しみから護られている』と説明していて、それがひどく冷淡に見える事がネックとなり、何度も話を練り直す事になった。

最初に心に浮かんだものを繋いで物語を構成してゆく、という当初の計画は、この話数に限ってはうまく機能していない。他の話数も改稿はあったが、それは30分に収めるための微調整で、この話数のように物語の縦軸に変更が加わったのは初めての事だと思う。

初稿の脱稿日が2002.07.02で決定稿が2002.08.04であるから、まる1ヶ月、改稿してメインスタッフで会議をしてボツになり再構成、という作業を繰り返した。この時は、このまま物語が破綻してしまうのではないかという恐怖感があって、精神的に結構まいってしまい、そのせいで2稿から4稿くらいまで、物語自体も鬱々とした展開になってしまっている。

2稿と3稿は同じく『鳥』というタイトルだが、ラッカの前に『ツミ』という名の、ラッカによく似た白い幽鬼のような存在が現れ、ラッカに罪悪感を植え込み、心を閉ざさせてラッカを『罪憑き』と言う名の呪われた存在にしようとする。だがラッカは鳥によって護られ、井戸の底で自分のみた夢を思い出す。その事によって、ラッカはツミ憑きではなくなり、井戸の底の暗闇の中で、ラッカは命を失いつつあるツミと対面する。ツミの本当の姿は、白いイタチのような生物で、血にまみれ、ラッカの手の中で息を引き取る。

4稿のタイトルは『罪の在処（ありか）』。この話数ではラッカの鏡像ではなく、独立した『ツミ』という名の、ラッカにだけ見える少女の姿をしている。ツミは亡霊のようにラッカにつきまとい、翻弄する。ツミはラッカに罪悪感を吹き込み、悪夢を見せ、ラッカの心の負荷を喰って成長してゆく。ラッカは仲間から心を閉ざし、クウの部屋に鍵をかけて閉じこもってしまう。この話数は、『ツミ』というキャラクターが明確で、ラッカが罪悪感によって、灰羽というある種、祝福された存在である事に耐えられなくなってゆく心理状態は分かりやすかったものの、クウの喪失感より、その喪失感がきっかけで現れたツミという少女の存在や、ツミが見せる悪夢の印象が強くなってしまった事で、物語の主軸がブレてしまった。何より暗過ぎた。

○登場人物

ラッカ
ネム
レキ
ヒカリ
カナ

クラモリ（回想）
14歳のレキ（回想）
14歳のネム（回想）

寮母（声なし）
灰羽の子供たち（声なし）

ヒョコ
カフェのマスター

ここで上田さんから、罪憑きという心の状態を視覚化するのに『ツミ』というキャラクターを使うのをやめ、たとえば羽が黒くなるとかにしたらどうか？という提案があった。実のところ、僕も全く同じことを考えていて、その設定で軽く構成して、ある程度の手応えを感じていたものの、4稿までの膨大な労力と、ツミというキャラクター（デザインもできていた）に思い入れがあって、切り捨てる踏ん切りがつかずに身動きができなくなっていたところで、上田さんの提案でやっと気持ちの整理がついた。

5稿でやっとタイトルが『傷痕・病・冬の到来』になる。クウが巣立って行った事に対する喪失感がきっかけでラッカの羽が黒くなるという設定で書き始めたら、突然レキの過去と、クラモリというキャラクターが頭に浮かんだ。物語としては、これで破綻なくラストまで走り切れる、という手応えがあったものの、突然生み出されたクラモリに関する描写と、クラモリがいた頃のレキとネムの物語などが13話に収まるかが不安だった。しかも、当初の予定では7話で井戸と鳥の死骸のエピソードが入る予定が8話にずれてしまい、周囲からも心配されたが、クラモリというキャラクターが浮かんだ時の手応えを逃がしたくなくて、腹を括って書き進める事にした。この話数の改稿でスケジュールが一ヶ月近く遅れて、迷う時間がなかったからできた決断かもしれない。

●サブタイトル

●ラッカの部屋（旧繭の部屋）

薄暗い部屋。風で窓がかたかたと揺れている。灰色の空。部屋の片隅には、古びたソファがあり、ラッカが毛布にくるまり、身を縮めるようにして眠っている。部屋は広くはないが、家具らしい家具もなく、不自然に広く見える。どこか殺伐とした空気。

うっすらと目を開けるラッカ。そのまま起き上がるでもなく、放心している。風は寒々しく窓を揺らし続けている。毛布からのろのろと手を出し、指先をじっと見つめる。

ラッカ「クウ……」

●回想。西の森

遠くで鐘の音が鳴っている。レインコートを羽織った4つの人影が、森を抜けたところ。夕闇が夜に変わる頃。雨は止んでいる。フードをとり、振り返るカナ。森の入り口で、森を去る事が出来ず、泣きながら立ち尽くしているラッカ。

カナ「ラッカ……」

ネム、ラッカに歩み寄る。

ネム「ラッカ。いつまでも泣いてたら、クウだって安心して旅立てないよ」

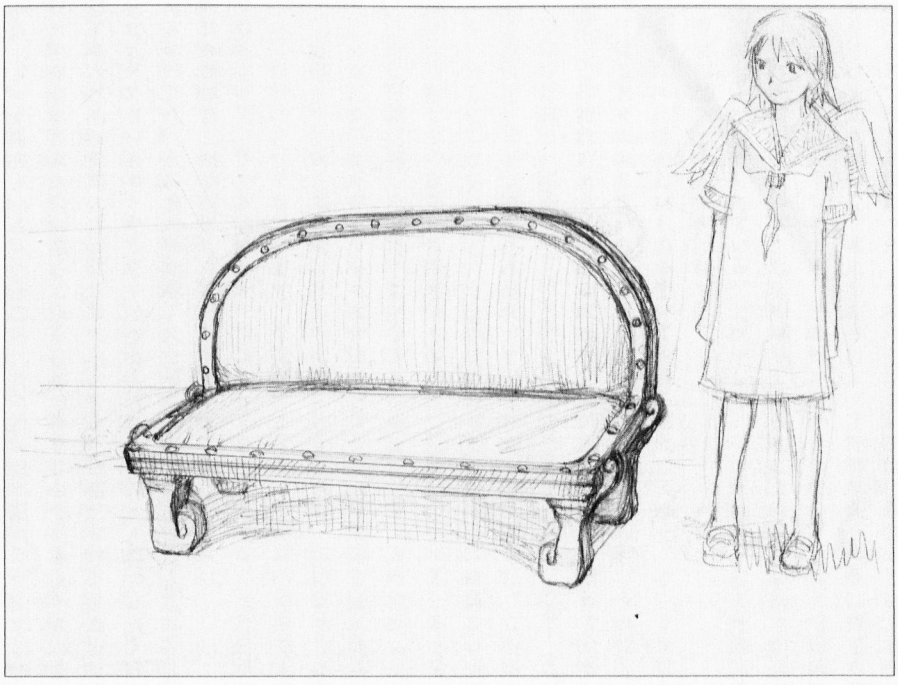
ラッカ「……うん。……でも……でも」

くしゃくしゃに顔を歪めるラッカ。その頬を新しい涙が伝ってゆく。

ヒカリ「ラッカ、きっとまた会えるよ。そう信じよう。クウは私達より少し、先に行っただけなんだって」

ラッカ、答える事が出来ず、ただ頷く。レキ、ラッカの手を取り、

レキ「行こう」



■ラッカの部屋のソファ。助監督から『これって背もたれが斜めになっているのはそういうデザインなの？』と真顔で聞かれてしまった。パースが狂ってるだけです！……いま見返すとひどいですね。

歩き出す一行。前方にはオールドホームの暗いシルエット。鐘は鳴り続いている。

カナ、空を見上げて

カナ「クウにも届いてるかな……」

ヒカリ「届いてるよ、きっと。クウにもこの鐘が標になってくれますように……」

鐘の音、次第に大きくなる。

●ラッカの部屋

窓の外でも、いつの間にか時計塔の鐘が鳴り出している。

澱（よど）んだ空気を振り払うようなその音色に、次第に我に返り、気怠そうに身を起こすラッカ。

ラッカ「……いたた」

ソファの上で、背中を丸める。ずり落ちる毛布の下から羽が顔を出し、力なくひとつ羽ばたく。羽が1枚抜けて、ソファの上に落ちる。黒い斑紋のある羽。ラッカはそれに気付かない。

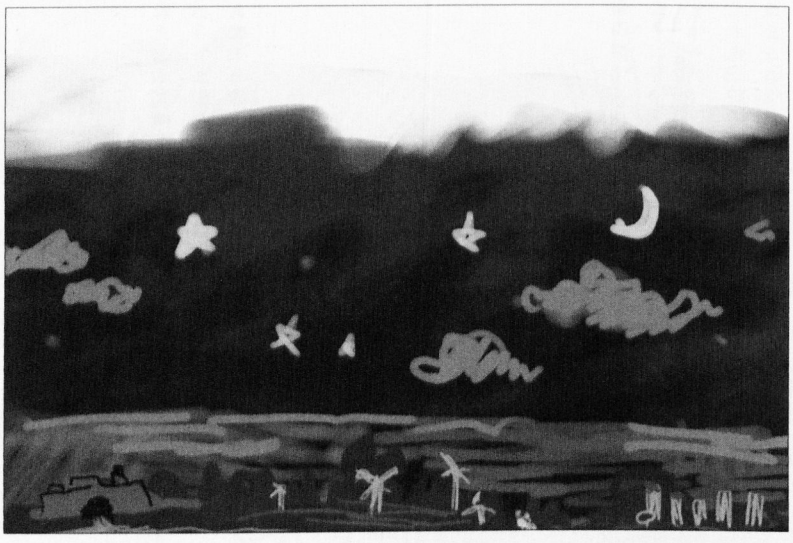
ラッカ「……ベッド、捜さなきゃ」

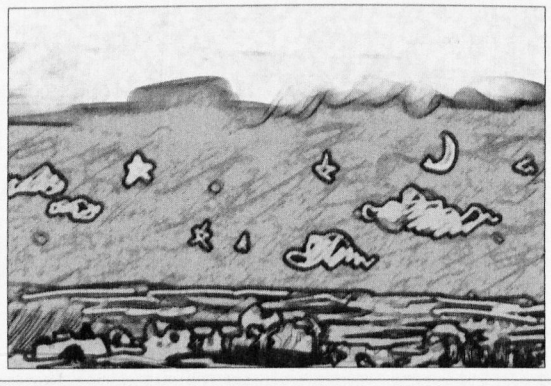
立ち上がり、窓辺に行くラッカ。空を見る。重く湿った雲を割って、帯のような光がちらほらと差し始めている。窓を少しだけ開き、息を吸うラッカ。肺を刺す冷気に、眼を細める。

ラッカ「冬がきたよ、クウ――――――」

窓の下を見下ろすと、ヒカリとカナが連れだって中庭を横断して西館に歩いてくるところ。時計塔を指さし、得意満面のカナ。眩しそうにそれを見上げるヒカリ。ラッカのいる4階の窓からでは話す声は聞こえないが、その仕草は明るく楽しげに見える。

南棟から、寮母と子供たちが中庭に出てくる。胸をどんと叩いて自慢するカナ。ぱちぱちと拍手する子供たち。ひとりの子供が何かを言い、かくっとコケるカナ。両手の指で鬼のツノをつくり、子供たちを追いかける。きゃっきゃとはしゃいで逃げる子供。ころころと笑うヒカリ。





■クウの部屋の前の廊下の落描き。街と風の丘とオールドホーム。

いつもと変わらない、朝の風景。だが、それを見下ろすラッカの表情は悲しげに歪む。涙があふれそうになり、慌てて首を振る。

ラッカ「泣いちゃ、だめなんだ……」

●クウの部屋の前

オールドホーム西館1階廊下。壁に子供っぽい落描きがいくつもある。天井の蛍光灯が切れかけているらしく、明滅を繰り返している。とあるドアの前で立ち止まるラッカ。ドアの脇には木片にクレヨンで描かれた『クウ』という手描きの表札。拙い文字。

ラッカ、左右を一瞥し、人が居ないのを確認してそっとドアを開ける。

●クウの部屋。

ラッカが部屋に入ってくる。後ろ手にドアを閉め、そのままドアにもたれる。ドアの脇には、箒と塵取りが置かれている。静かに、クウの部屋を見回すラッカ。きれいに整えられている。古びて縫い目のほつれかかったネコのぬいぐるみの載った小さなベッド。小さな机。棚や床にはどこからか拾ってきたガラクタが積み上がっている。ブリキのじょうろ、その隣にはいくつかの緑色のきれいなガラス瓶が、背の高い順に並んでいる、窓際にはクレヨンと小石で描かれた池があり、陶器でできた蛙の人形が窓縁のまわりで団欒（だんらん）している。部屋の隅には、同じくクレヨンでウィンクした顔に書き換えられている石膏の首像に、クウがいつもつけていた帽子がかぶせられている。ラッカ、漠然とその空間に向かって話しかける。

ラッカ「おはよう、クウ」

ラッカ、箒を手に取り、数歩踏み出す。近くの机に何気なく手を置くと、机にわずかに埃の層ができている事が

■クウの部屋。色々なところから拾ったりもらってきたりしたものがあり、とにかく雑多な印象。

分かる。悲しみに眉を歪めるラッカ。深く息を吸い、何とか笑顔をつくろうと努力する。

ラッカ「――――あれから、もう、ひと月も経つんだね」

掃除をしながら、少し俯き加減で誰もいない空間に向けて明るく話しかけるラッカ。どこか痛々しい光景。

ラッカ「グリの街にも、とうとう冬がきたよ。でも、クウが教えてくれたから、風邪はひかなかった。……クウは元気？壁の外は、どんな世界が広がってるのかな……。グリの街みたいに、いい人ばっかりだといいね。……オールドホームのみんなは、みんな元気にやってるよ。私は……」

不意に言葉に詰まるラッカ。

ラッカ「私は……」

ゆっくりと肩の力が抜けてゆく。うなだれるラッカ。床に、ぽつ、と涙の雫が落ちる。堰を切ったように涙が溢れだし、ラッカは両手で顔を覆う。モップがラッカの手を離れ、からんと音を立てて床に倒れる。

ラッカ「ごめん……私、みんなみたいにクウを祝ってあげられない……。だって……私、もっとクウと一緒にいたかったもの……。一緒に買い物したり、ご飯を食べたり、たくさん話がしたかった。クウに教えてもらいたい事、まだいっぱいあったのに――――」

立ち尽くすラッカ。言葉を返すものは、ない。

いつの間にか雲は去り、光の燦々と差す窓辺にラッカが歩いてくる。足元から光が這い上がる。窓縁の蛙の人形を見る。親指大だが精巧な造り。

シルクハットに髭のある父親蛙が池の縁で得意げに2本足でふんぞりかえっている。よく見ると、背中に『レキ』と描かれている。近くにマッチ箱と小石でできた家があり、エプロンを付けた母親蛙が立っている。エプロンに『ネム』と描かれている。眼鏡をかけて学者の帽子をかぶったヒカリ、水仙の葉の上で居眠りをしているカナ。そして、池のほとりの小石に寄り添って座っている2匹の小さな蛙。背中には『クウ』と『ラッカ』。

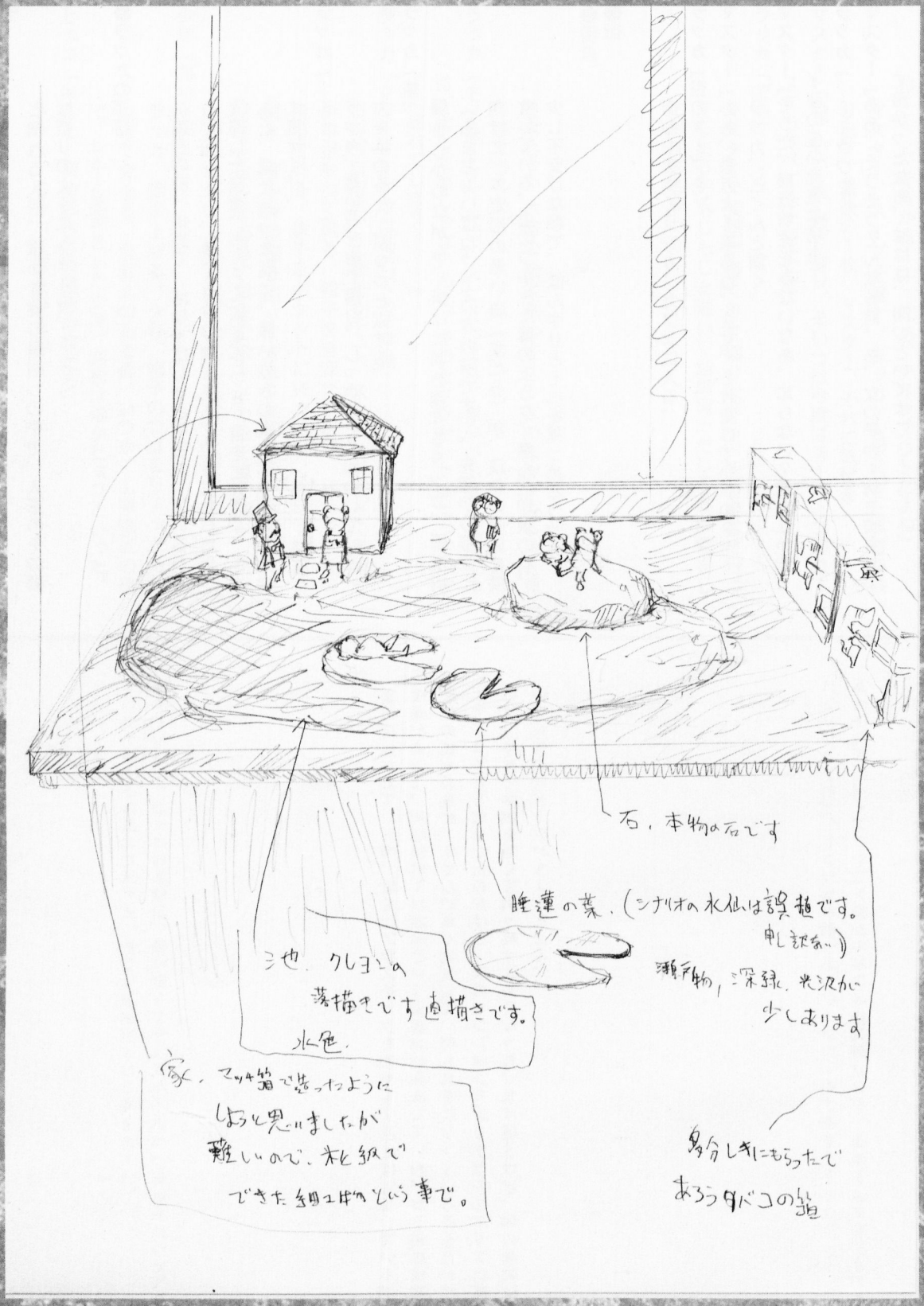
ラッカ、自分の名前の描かれた蛙を指でつつく。ことん、

4

▲悲しみから抜けられないラッカの心理状態について、1稿から4稿までのバージョンでは、ラッカにつきまとい、ラッカを落ち込ませるツミというキャラクターが居たために説明がしやすかったが、このバージョンではラッカ自身の描写で説明しなければならず、唐突にならないように苦労した。とはいえ、2話と3話の間か、3話と4話の間に、一話、まるまるクウが主役の話が入れられればな、とも思った。

▲カエルの人形は何となく気に入っている。設定を描き直しているのは、最初の設定を提出したら、上田さんが『なんかちょっと違う』と言いだしたため。どうも頭の中にこれだ！というカエルの置物像があるらしいのだが、それがどういうものなのか結局よく分からなかった。

■上が最初の設定画。下が直したもの。あまり変わっていない。上田さんは、どっかの土産屋か民芸品かなんかでいい感じの置物を見たらしいのだけど、そんなの分かるわけない。



■37ページ、睡蓮を水仙と書き間違えてますね。恥ずかしい。

と倒れる人形。暖かな昼の陽射しの中で、人形のその姿は祈りのようにも見える。

●ラッカの部屋

洗面台の前。水道で、ぱしゃぱしゃと手を洗っているラッカ。顔を上げ、鏡で自分の顔を見る。泣きはらした目。憔悴した表情。小さくため息をつき、目をこする。ふと、鏡に映った羽に、黒い染みのようなものがあるのに気付く。

ラッカ「……」

ラッカ、黒い羽を指で摘む。しっかりとくっついている。力を込めると、ぷつっと抜ける。

ラッカ「痛っ」

顔をしかめながら、抜けた羽を調べるラッカ。雨覆羽（あまおおいばね。上の方の羽です）。先端から根元に向けて、不定形の黒い斑（まだら）が、灰色の領域を侵食している。虫につかれた葉のような、病んだ印象の羽。少し不安げな顔で、ぼんやりとそれを見つめるラッカ。

●街

街の中を歩くラッカ。カフェに入る。

ラッカ「豆のスープを」

マスター「ああ、最近よく来るね。注文、それだけでいいの？」

ラッカ、こくんと頷く。

マスター「そうだ。最近坊主をみないなあ。知らない？君よりかチョイ背の低い元気な坊主」

ラッカ「……クウ」

マスター「ああ、そうそうそんな名前。あ、女の子か！坊主坊主言って悪かったなあ。ははは、謝っといてよ」

ラッカ「クウは……もう、行ってしまったんです」

マスター「え……？じゃあ、もういないの？」

またこくんと頷くラッカ。マスター、ラッカに背を向け、

▲荻窪に住んでいた頃、近くにプラスチックを燃やして灰をばらまいているゴミ処理場があって、周辺地域で杉並病という公害病が発生していた。ゴミ処理場近くの民家の植木の葉が、ほとんど白く変色して、形も異常になっているのを見かけたりしてぎょっとしたりしたのだけど、僕のマンションもぎりぎりそのエリアに建っていて、半年で体調を崩して引っ越すはめになった。色は違うけど、羽の黒変はその時見た葉のイメージがちょっとある。

太い竹を水平に割ってつくった器に、鍋から大きな匙（さじ）でスープを入れる。

マスター「へえ……。ああ、灰羽ってのは、そういうもんらしいね……。そうかあ……。あ、テイクアウトだよね」

マスター、スープを渡す。ラッカ、もぞもぞと手帳を取り出す。最後の1枚。マスター、それに気付き

マスター「あ、いいよ。奢り奢り。そいつは今度ぱぁーっとフルコースでも食べに来た時にね」

ラッカ「でも……」

マスター、笑顔で軽く手を振りながら、他の接客に行ってしまう。もじもじと迷い、結局慌ただしくお辞儀をして走り去るラッカ。

●街角

並木の下。木陰の柵に座ってスープのカップをじっと見下ろすラッカ。

ラッカ（モノローグ）『街の人にとっては、クウがいなくなったのは、大した事じゃないんだ。きっとクウがいた事だって、すぐに忘れてしまう……』

ラッカ「クウ……クウはそれでも、平気……？」

ゴロゴロゴロ、と音を立てて、スケートボードに乗った少年がやって来る。帽子を目深にかぶり、リュックを背負っている。両手をポケットに突っ込み、片足で路面を蹴り、ラッカの脇を通りすぎようとするが、ラッカに気付き、足を止める。爪先でボードの端を強く踏み、跳ね上がったボードをぱしっと片手で受け止める。

少年「おい」

ラッカ、顔を上げる。少年、帽子のつばをちょっと持ち上げて見せる。見覚えのある顔。いつか、工場地区の橋で、レキと喧嘩をした少年。名前は確かヒョコといった。

ヒョコ「あんた、南地区のボロ屋敷の奴だろ」

ラッカ、ちょっと眉をひそめ

6

▲水平に、というのは、直立した竹を水平に切った状態、と言う意味だった。ちょうどコップのようになっているつもりだったのだけど、わざわざ水平、と書いたのがかえって誤解されて、竹を寝かせて、水平に切った状態の器になってしまった。でもそのほうがおしゃれで印象的で、全然良かった。ううむ。

▲テイクアウトって、すごく意味不明の和製英語なので、劇中でも日常でもてきたら使いたくないんだけど、うまい日本語が思いつかない。持ち帰り？ううむ。

▲そういえば、ヒョコの名前は、髪が短くてテニスボールかヒヨコみたいなアタマ、というのがそもそもの元ネタだった。そこから氷湖という字をあてた。

ラッカ「……オールドホーム」
ヒョコ「ああ、わりぃ。でも、あんたらだって、うちの事ガラクタ工場とか言うだろ。あ、俺、東地区の……」
　ヒョコ、片手で帽子を押さえ、もう片方の手で顎の所で結んでいる紐をほどく。帽子を持ち上げるとぴょこんと光輪が顔を出す。すばやく帽子を戻すヒョコ。
ラッカ「……ヒョコ、さん」
ヒョコ「氷湖だよヒョーコ！氷に湖！何で知ってんだよ！……まあいいや、あのさ、ひと月くらい前の嵐の日にさ、西の森が光ったの知ってるか？」
　ラッカ、反射的に身を固くする。ヒョコ、そんなラッカの様子にはお構いなしに
ヒョコ「仲間が言うにはさ、灰羽が壁を越える時そういうのがあるんだって。でさ、うちらの仲間はみんないるし、ボ……いや、オールドホームの誰かじゃねえのって話になってさ……」
　ヒョコ、何故か赤くなり、周囲をキョロキョロと見回す。ずいっと顔を近づけ、小声で
ヒョコ「もしかして……レキか？」
　ラッカ、一拍間を置いて、左右に首を振る。ヒョコ、安堵した顔で背を反らせる。
ヒョコ「なぁんだ……（ぼそっと）よかった」
　ヒョコ、またちょっと赤くなり、周囲を気にする。
ヒョコ「あ、俺が聞いたって誰にも……」
　ぱしゃっ、という音、ヒョコ、はっとしてラッカを見る。スープの器が地面に落ち、飛び散ったスープがラッカの足とスカートの裾を汚している。ラッカ、小刻みに震えて、ヒョコを睨んでいる。怒りと悲しみが綯交ぜ（ないまぜ）になった表情。
ラッカ「……いいわけないでしょう。友達がいなくなったのに……」
　じわっと、ラッカの目に涙が浮かぶ。狼狽するヒョコ。
ヒョコ「あっおい」
　駆け去るラッカ。呆然とそれを見送るヒョコ。

▲言ってない。レキは言っていたのかもしれない。

●オールドホーム、正門アーチ

陽が傾きかけている。橋を渡り、とぼとぼと歩いてくるラッカ。アーチをくぐる。何気なく出欠表の札をひっくり返そうとして、クウの札が無くなっている事に気付く。ぴくりと指がとまる。クウを思い出させるすべてのものに、傷ついてしまうラッカ。

不意にカラスの鳴き声。見上げると、近くの木に数羽のカラスが留まり、ラッカを見て鳴いている。ラッカと目が合うと鳴き止み、鋭い瞳で暫しラッカを凝視し、強く枝を蹴って飛び去る。

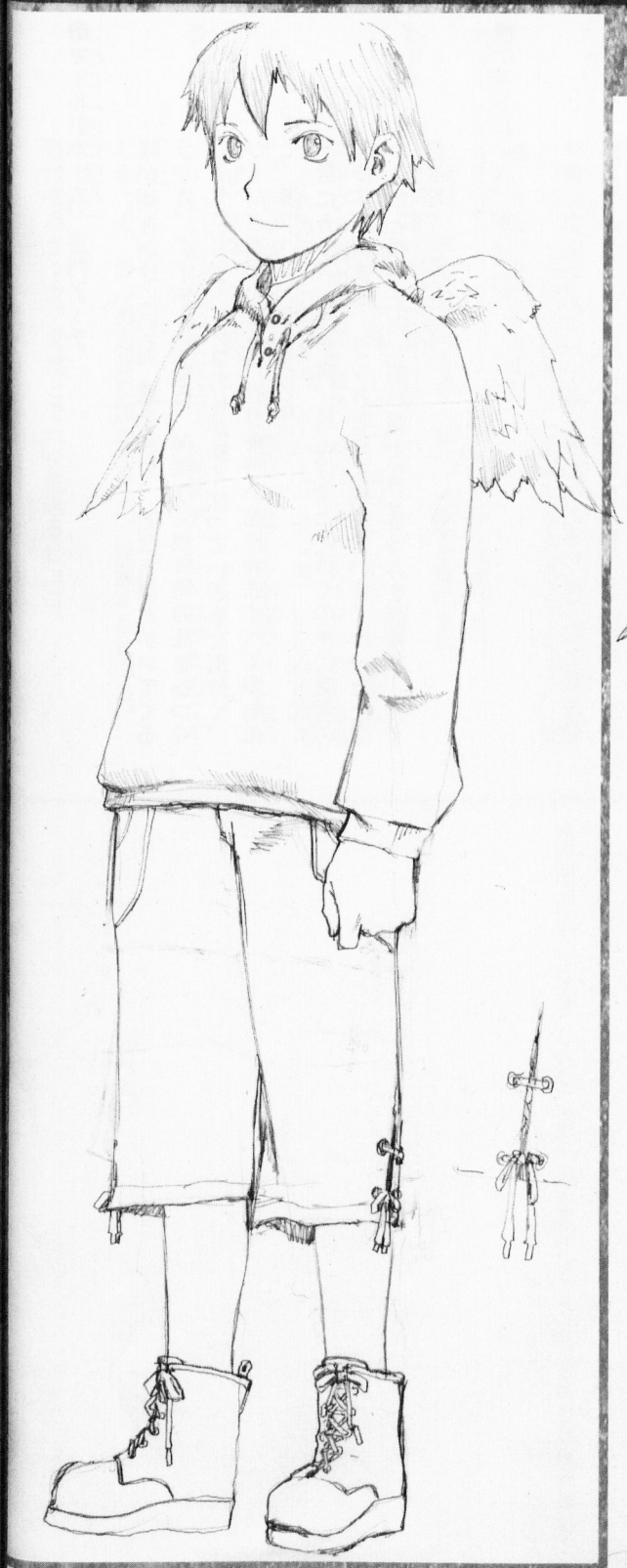
●ゲストルーム。キッチン

夕食の支度をするレキ達。みんなおろしたての冬服を着込んでいる。ラッカとクウがいないので4人だが、キッチンの中は狭いのでそれなりに賑やか。ネム、ティーセットを盆に載せているところ。レキは鍋でミートソースを煮込んでいる。その隣でパスタを茹でているヒカリとカナ。茹で加減を見るため木製の杓子（しゃくし）で麺をすくうが、隣のカナが素早く摘んで食べてしまう。

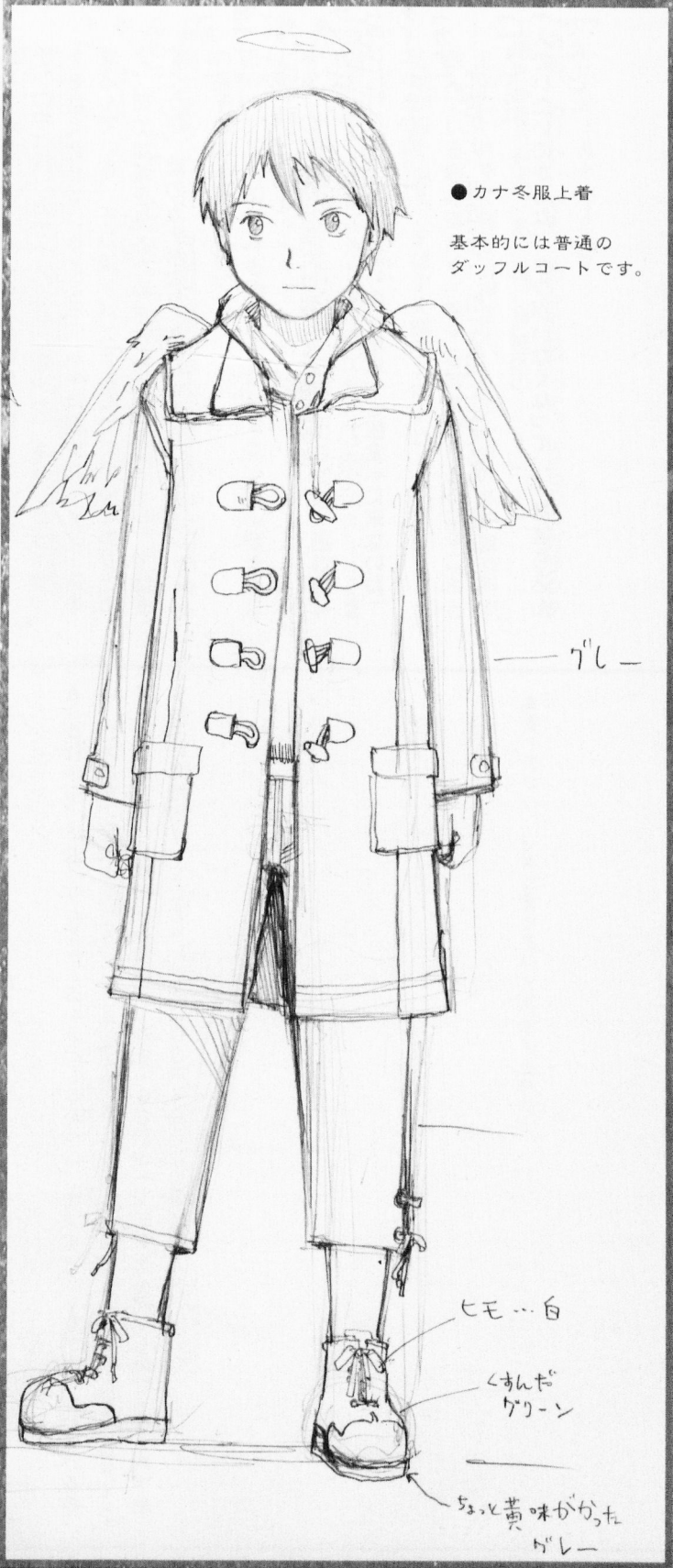
ヒカリ「あー」
カナ「茹ですぎー」
ヒカリ「いいの。もう」
　ネム、のれんから首だけ出して部屋を覗き
ネム「ラッカは？」
ヒカリ「呼びに行ったけど、いないの。最近、ご飯食べに来ないね」
カナ「ダイエットかな？」
ヒカリ「カナ」
カナ「……冗談だよ。最近よく、街に食べに出てるらしいよ」
ヒカリ「一人で？」
カナ「一人でいたいのかもな。クウがいなくなって、一番落ち込んでたし」

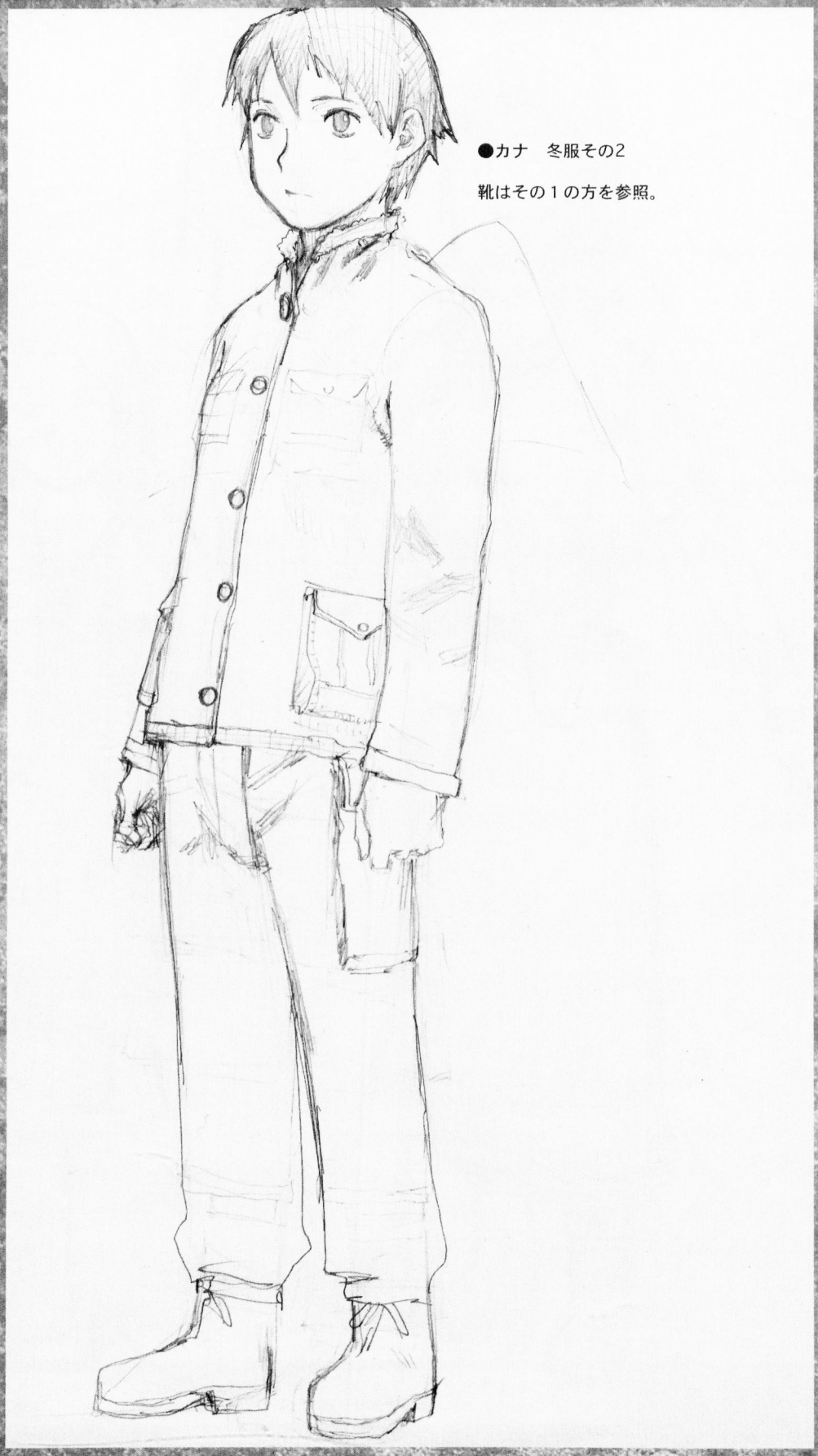
▲冬服のデザインも、ずいぶん迷った。夏服のイメージをあまり崩す事はできないし、似たり寄ったりでもつまらない。レキとヒカリの服はわりと素に入っている。

▲この杓子も、正式になんと呼ぶのか分からなかった。麺すくい？木製、と指定しているのは、たまたまFrancFrancでそういう木製の麺すくいをで見かけていたから。後日、自分でも買って、使っていたりするのだけど、最近１００円均一でほぼ全く同じものが１００円で売られていて愕然としてしまった。２０００円くらいしたのに……。



■カナ、冬服。冬服なのにどうしてズボンの裾丈を短く描いてしまったのか謎。改めて描き直した。カナはちょっと変化が少なかったか。





●カナ　冬服その2

靴はその１の方を参照。

ネム 外着
ケープはもう少し丈があってもいいかも
荒いしゅうみたいな

■レキの冬服、ボツ案。ちょっとレキっぽくないのと、ラッカの冬服と微妙にかぶるため。コートは採用。左は冬服の決定稿。

レキ. 部屋着.
金属?のリング
アクセサリー
部屋はぎ
は夏と同じです.

■レキ、冬服アクセサリ。レキの冬服は、色合いも含めわりと気に入っている。アクセサリは、作画的に面倒かなと思ったが、アクセントが欲しかったので入れさせてもらった。

■ヒカリ、冬服。左のヒカリのコートのデザインは、面白くて好きです。たまたま雑誌で見かけた古いコートが元ネタです。こういう風にスリットがあって手がにゅっと出るデザインは古風ですが、逆に新鮮な気がしました。本編ではあまり着る機会がなかったので、また何かの機会にこういう感じの服を出したいです。

ネム「……知ってる？ラッカがクウの部屋、ずっと掃除してるの」
カナ「ああ……。あれ、ラッカか」
　レキ、鍋の火を止め、静かな口調で
レキ「……カナも、クウの部屋に行ったの？」
カナ「一度だけ。……分かってるよ。クウはもうここにはいない」
ヒカリ「……ラッカは忘れられないのかな……」
ネム「ラッカの気が済むまではそっとしておこうと思ったけど……」
レキ「うん。でも……多分、どこかで区切りをつけなきゃ……」
ヒカリ「何か、力になれたらいいんだけど……」
　ヒカリ、うーん、と考え込む。何かひらめいたらしく、ぱっと明るい顔。
ヒカリ「そうだ、あのね……」

●ラッカの部屋

　2話でレキがくれたお古を着ているラッカ。今まで着ていた、セーラー襟のワンピースは、窓際に干してある。スカートの裾のスープの飛沫の跡は、薄れているが、消えてはいない。生乾きの裾の汚れを指でなぞり、半ベソのラッカ。
ラッカ「どうしよう……」
　ラッカ、洗面台の鏡の前に行く。だぶだぶの服を着た自分を鏡に映してみる。
ラッカ「うーん……」
　ラッカ、再び、羽に黒い染みが浮かんでいるのに気付く。慌てて羽を広げ、良く見ようとするラッカ。斑紋の現れた羽は左右合わせて3個所。不安そうなラッカ。
ラッカ「増えてる……。朝はなかったのに……」
　洗面台の近くの棚に、他の雑貨にまぎれ、無造作に鋏（はさみ）が置いてある。大きくて無骨な鋏。思い詰め

▲こういう洗濯のシーンとかがあると、作中に衣装が一着しかなくて、いつも同じ服を着ている事が気になってしまう。最初は服を何種類か設定してローテーションさせる事も考えたのだけど、キャラクターの見分け、描き分けの上で問題になるし、作画的にも、衣装がころころ変わらない方が絵が安定するようなので、衣装は基本的には変えないようにした。とはいえ、ラッカは何度か着替えているし、全キャラクター夏服、冬服は用意した。また、外靴、部屋靴も履き替えているので、衣装の設定点数は結構多い。

た顔でそれを見つめるラッカ。

●オールドホーム。翌朝

たったったっと上機嫌で階段を上がってくるヒカリ。レキのいる3階より、さらに不要物の多い4階の廊下。ちょっと驚くヒカリ。

ヒカリ「わー」

危なっかしい足取りで床のゴミをよけながら歩く。ラッカの部屋の前。1話で繭の部屋を片づけた際、部屋の不要物を外に出したため、1話の時より散らかっている。コンコンとドアをノック。以下シーン末までドア越しの会話。

ヒカリ「おっはよー。朝だよー。……（ちょっと不安げに）起きてる?」

ラッカ「……うん」

ヒカリ、ほっとする。

ヒカリ「よかった。久しぶりにさ、みんなでご飯食べようと思って」

ラッカ「あ、うん、……でも私……」

ドアの向こうから、なんとなくラッカの狼狽した様子が伝わってくる。がさごそという物音、カタン、と何かを置く音。

ヒカリ「?」

ラッカ「……支度できたら行く。先に行ってて」

ヒカリ、にっこり笑う。ラッカのどことなく不安定な声の調子には気付かず

ヒカリ「じゃ、待ってるから」

嬉しそうに走ってゆくヒカリ。

●ゲストルーム

ベッドの上に積まれた、大きさのまちまちな20枚ほどのフェルトの布。裁縫道具と、巻き尺、定規、チャコールペン、裁縫鋏。いくつかの余り布と大きさの違う羽の

▲ヒカリはひたすら明るいと言うか、物事の明るい面だけを見ている。それはときどき何かを見落としてしまったりもするのだろうけど、良い生き方なんじゃないかと思う。自分は物事の悪い面を見てそれを潰してゆく事で状況を良くしよう考える事が多いけど、それは自分一人の状況では機能するけど、周囲の人間も含めた大きな集団の中では悪い結果を生む事が多いようだ。

▲古布なので大きさがまちまちなのです。

形の型紙。ベッドの端に寝転んでいるカナ。型紙を手に取って眺めながら

カナ「本格的だねぇ」

ヒカリ、もう20枚程のフェルト布をどさっとベッドに置く。

ヒカリ「もう。手伝ってよ」

カナ「裁縫を？アタシが？」

ヒカリ「みんなでやるの！子供たちの分もあるし」

食卓では、レキとネムが食事の支度をしながら苦笑いしている。でも少し楽しそう。

ネム「カナはねえ。手袋編んでて靴下になっちゃうくらい裁縫音痴だから」

カナ「そーいうちまちました作業は嫌いなの！」

レキ「……時計屋の親方が聞いたら泣くな……」

カナ「機械はいいんだよカチッとしてるから。布はさあ……」

ドアの開く音。全員の注意がドアに集まる。ドアを開け、おずおずとラッカが入ってくる。病み上がりのような、少し憔悴している顔。レキのお古にクウの上着を着ている。無理して微笑み

ラッカ「お、おはよう……」

レキ、笑顔になり、立ち上がる。ラッカに軽く眼で挨拶。ネムも安堵した表情。ラッカ、ドアを閉めず、そのまま入ってくる。

ネム「おはよう、ラッカ」

レキ「服、どうしたの？」

ラッカ「あ、汚しちゃって、洗濯中……」

ヒカリ「ねえ見てこれ」

ヒカリ、嬉しそうにチャコールペンで羽の形に型の入ったフェルト布を見せる。

ラッカ「……なに？」

ヒカリ「羽袋。これから寒くなるからさ。みんなでお揃いのつくろうと思って」

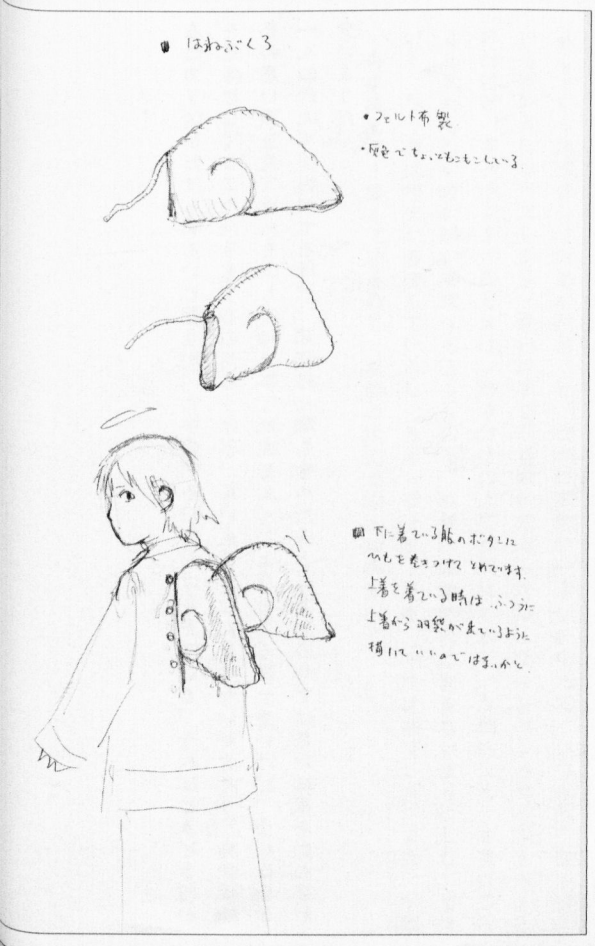
カナ「ラッカ、裁縫、得意？」

ラッカ「え？うーん……あんまり。やった事ないから……」

11

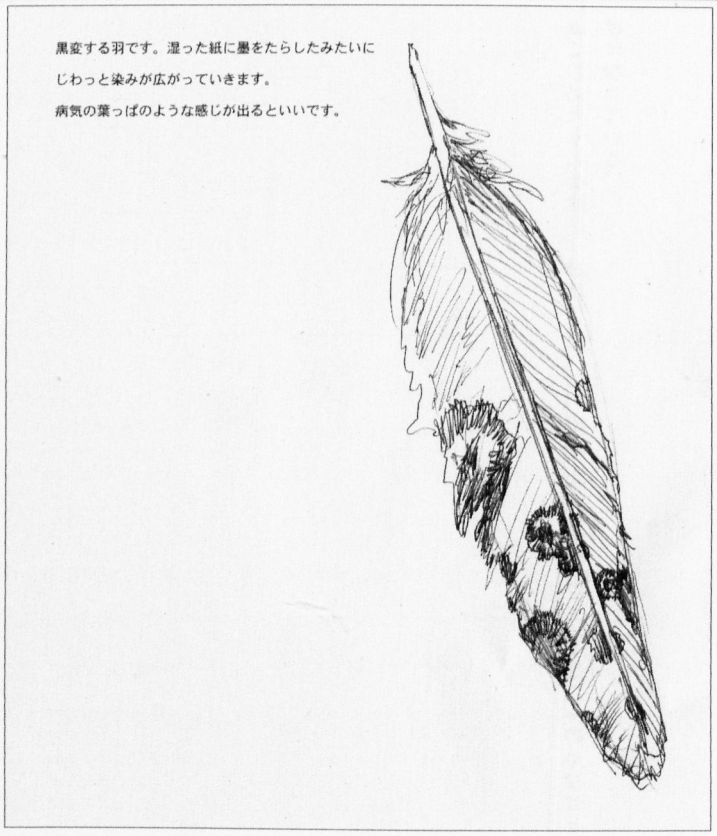
▲ひどい物言いもあったもんだ。

▲この時の、カナの巻き尺？をびよよん、と伸ばす仕草がおかしかった。



■羽袋、設定。この辺は、初期のひとコマ漫画形式の同人誌のネタのなごり。でも適度におかしみと生活感があって気に入っています。

カナ「やった、仲間」
ヒカリ「カナ！もう……。（ラッカの方を向き）いいよ。教えてあげる。簡単だから」
　ヒカリ、巻き尺を手に取り、ひゅるっと伸ばす。
ヒカリ「羽広げて、寸法取っちゃうから」
　ラッカ、とっさに一歩あとずさる。怯えたような表情。
　ヒカリ、首をかしげ、ラッカの傍に行く。ラッカ、羽の話題になった途端、ひどく動揺する。レキ、上機嫌で、人数分の皿を載せた大きめの盆を手にキッチンから出てくるが、ラッカの様子に気付き、すっと表情が硬くなる。
ヒカリ「？……あれ、どうしたの、羽？」
　ラッカ、羽を反らせて背中の影に隠そうとするが、片方の大きな風切羽が、歯が欠けたようになくなっているのが見える。他の羽も、喧嘩に負けた鳩のように羽並が揃わず、ところどころ毟られたような跡がある。
ラッカ「な、なんでも……」
ヒカリ「痛んでるよー。ちゃんと手入れしてる？」
ラッカ「あ……あんまり……」
ヒカリ「でしょー。だめだよー。女の子なんだから」
　ヒカリ、巻き尺で手早く採寸する。ふんふん、と上を見ながら、何やら指折り数えて計算している。レキ、すっとヒカリとラッカの間に入り、ラッカの羽に触れる。指で羽を広げると、なくなった風切羽の根元には、刃物で切った跡がある。その近くの羽先が、微かに黒く変色している。その黒い斑紋は、レキの見ている前で、僅かだがインクが染みるように広がる。
レキ「ラッカ、これ……」
　ラッカ、ぱっと身を引き、弱々しくいい訳するように
ラッカ「あ、あの……ソファが固くて……だから、寝てる時に痛めちゃったのかも……（語尾、弱々しく）」
カナ「あー、まだベッドないのか。引っ越しも大変だよなあ。（座っていたベッドをぽんと叩いて）これ持ってっちゃえば？」
ネム「入るわけないでしょ」
ヒカリ「あ、そうだ、クウの部屋のベッド、使ったらどうかな？」



▲僕も裁縫は全くできない。というか、ちょっと先端恐怖症の気があるので、針が持てない。でも裁縫針より釣り針が怖いです。

ラッカ「えっ？」
カナ「ああ、いいかもね。運ぶなら手伝うよ」
ラッカ「でも、それは……」
　テーブルの方にいたネムも、ラッカの方を見て
ネム「クウなら……きっといいって言うと思うよ」
　ラッカ、俯き
ラッカ「……それは、そうかもしれないけど……けど……！」
　レキ、はっとして、ラッカの羽を見る。黒い斑紋がはっきり分かるほど大きく広がってゆく。
レキ「……ラッカ！」
　ラッカ、羽に触れようとしたレキの手を振り払い、開けたままのドアを抜けて走り去る。
カナ「ラッカ……？」
ヒカリ「どうしよう……私、悪い事言っちゃったみたい」
レキ「いや、ヒカリが悪いんじゃない。私、ちょっと話してくる」
ヒカリ「私も行く！」
レキ「いいんだ、任せて」
ヒカリ「でも……」
レキ「大丈夫だから」
　走り去るレキ。心配そうなヒカリ。

●ラッカの部屋の前

（2〜30分時間が経過したような演出を挟んでもいいかもしれません）
レキ、ドアの前。ノックをしようか一瞬迷い、静かに小さくノック。
レキ「ラッカ」
　返事はない。もう少し大きくノック。間。そっとドアに顔を近づけるレキ。中で、泣きじゃくっているラッカの声が幽かに聞こえる。
レキ「ラッカ……開けるよ」
　ドアノブに手をかけ、さらに少し待つ。返事はない。意を決してドアを開けるレキ。

▲このあたりの会話が、9話でラッカが寝込んでいる時のヒカリとレキのやりとりのきっかけになっている。

●ラッカの部屋

ソファの背もたれに、無造作に上着が脱ぎ捨てられている。洗面台の前、ラッカは座り込み、両手で顔を覆い、うなだれている。足元に鋏が刃を開いて転がっている。その周りには、無数の羽が荒々しく切られ、散乱している。ラッカがしゃくり上げるたびに、羽が震える。羽は、ところどころ、向こうが透けてしまうほど切り裂かれてしまっている。床に散っている羽は、ほとんどが黒い斑紋のあるものだが、そうでないものも混じってしまっている。

レキ「なんてことを……」

ラッカ「来ないで」

レキは足を止めない。ラッカ、のろのろと床の鋏を手に取ろうとするが、レキがその手を押さえる。身を屈め、ラッカを抱きしめるレキ。ラッカは身を固くして震えている。レキの見ている前で、ラッカの羽に黒い斑紋が新たに生まれ、紙が焦がされるようにじりじりと広がってゆく。それが分かるらしく、ラッカは悲鳴を上げる。咽の軋るような、弱々しい悲鳴。レキはゆっくり、ゆっくり、ラッカの手から鋏をもぎ離す。鋏から手が離れると、ラッカはがっくりとレキにもたれる。

レキ「大丈夫だよ……」

ラッカ、いやいやをするように首を振る。

ラッカ「……どんどん……増えてく……怖い……」

レキ「大丈夫だから」

ラッカ「私……病気なの?」

レキ、言葉に詰まる。苦しげに迷い、ゆっくり言葉を選ぶように

レキ「違う……。病気なんかじゃない……。ラッカは、ラッカは何も、悪くないから……」

●レキの部屋

相変わらず画材で散らかった部屋。3話冒頭と比べると、未開封の段ボールが無くなり、その中身が部屋中にばらまかれている分、雑然とした感じが増している。厚みのあるざらざらした、大きさの不揃いの紙が、机の上や床にばらばらと散っている。穴を開け、紐で綴じてクロッキー帳のようにしてあるものもある。絵の具で汚れた、車輪付きのワゴンの上には、瓶に詰まった絵の具がひしめいている。小さな折畳みのイーゼルがあり、カンバスがかけられているが、布がかかっていて何が描いてあるかは見えない。部屋の奥に無造作に積まれた木枠のパネルには事務用品のようなくすんだ色の紙テープで画用紙が水張りされていて、不透明な絵の具とパステルで、意味不明の抽象画が描かれている。

茶色いガラスの薬瓶の口にガーゼのような布をあて、薬瓶を傾けて布に薬液を染み込ませるレキ。布が見る間に赤く染まってゆく。小豆色に近いくすんだ赤。その布でラッカの羽を拭くようにして、薬を羽に染み込ませてゆく。乾きかけの血で汚れたようになる羽。ラッカ、顔をしかめる。

ラッカ「ひりひりする……」

レキ「羽を切ったりするからだよ……。一晩したら冷たい水で洗って。それで、多分目立たなくなるから」

レキ、机に薬瓶をトン、と置く。ラッカ、不安げにその薬瓶を見つめ

ラッカ「それ、薬なんでしょ?やっぱり私、……病気なの?」

レキ「これは、老人の樹の皮から採った染料。お払いに使うんだ。悪いものの眼を眩ませるって言われてる」

ラッカ「老人の樹?」

レキ「雪鱗木(ゆきりんぼく。造語)っていうのかな。壁の近くにだけ生えてる木で、幹がねじくれてるからそう呼ばれてる。その幹に銀の刃で傷をつけるんだ。水平に1本、それと交差するように斜めに3本。そうすると、獣が牙をむくように、樹皮が剥がれる。でもラッカは壁に近づいちゃいけないよ。

▲前にも書きましたが、まだアニメの企画として動いていない、ごく初期の設定では、ビールの缶が転がっていたりした。アニメ用の設定に関しては、このあたりで設定を描き起こすのが間に合わなくなって、棚とか一般性の高いものはイメージに近い写真を探して『こんな感じです』というような指示のものが入り始めた。資料を探すのに手間取って、描いた方が早い事もあったりして、何だか時間に追われていた記憶が濃厚にある。

▲この樹も、イメージがはっきりあって、描きたかったのだけど、入りきらなかった。9話に出てくる壁際の設定画に描かれているのが一応この樹です。

危ないから」

ラッカ「レキ……どうしてそんな特別な薬持ってるの？そんな事、どこで知ったの？」

レキ、ラッカから視線を外し、黙り込む。やがて、静かに口調でぽつぽつと語りだす。ラッカに向けているような、自分自身に言い聞かせているような語り口。

レキ「……この街は、灰羽のためにあるんだ。壁は灰羽を護るためにあり、良い灰羽は、この街で幸せに暮らし、時期がきたら壁を越える。……でも、ときどき、街の祝福を受けられない灰羽が生まれる。その灰羽は、繭の夢を正しく思い出す事もできず、巣立ちの日も訪れない。祝福のない灰羽にとって、壁は逃げ場を奪う檻になる。そういう灰羽を、罪憑きという」

ラッカ「私……」

レキ「ラッカは違う。私がラッカの繭を見つけて、私が羽から血を洗い落とした。ラッカの羽はきれいな灰色だった。ラッカは良い灰羽だよ。私とは違う」

ラッカ「レキ……レキだって何も……」

レキ、疲れたように、目を伏せる。自嘲的な笑い。

レキ「……私の背中を破って生えてきたのは、黒い斑の羽だった。私は最初から罪憑きだったんだ。私は繭の夢をうまく思い出せなかった。黒い羽のせいで、みんな私を怖がった。ネムでさえ、最初は私を避けてた。クラモリがいてくれなかったら、私はずっと独りぼっちだったと思う」

ラッカ「クラモリ……？」

レキ「そこのイーゼル……」

レキ、眼でイーゼルを指す。

ラッカ「見てもいいの？」

レキ、頷く。ラッカ、そっと、イーゼルにかかった布を外す。カンバスに描かれているのは、20歳くらいの、灰羽の女性の肖像。銀色の髪、微笑んでいるが、どこか悲し気な、静かな瞳。

ラッカ「きれいな人……」

レキ「うん……。チビ共の親代わりで、私とネムのいい先生だっ

▲あ、銀色の髪ってなっている。本編では栗色の髪です。肖像画を描いた時、勢いて栗色で描いてしまい、なんかしっくりいったのでそのままになったのだと思う。銀はちょっと特殊な感じが出過ぎてしまうので、これで良かったと思う。

■クラモリは迷わず描けた。この3枚が最初に描いたクラモリの絵で、そのまま決定稿になった。イメージ出しのためのスケッチ等もない。

た。体が弱いのに、私のために森の奥に薬を取りに行ってくれた。ゲストルームだって、私とネムと3人で暮らせるようにって、クラモリが用意してくれた部屋なんだ。クラモリは私を怖がらなかった。いつも傍にいてくれた。同情じゃなくて、ただ、いてくれたんだ」

ラッカ「いい人だったんだね。でも、私、レキもいい灰羽だと思うよ」

レキ「……私は、罪人なんだよ。5年前に、クラモリは行ってしまった。その頃巣立ちの日なんて知らなかったから、私は見捨てられたと思った。ネムは私を心配して、図書館で古い言い伝えを調べて、巣立ちの日の事を教えてくれた。でも私は信じなかった。周りが見えなくなってたんだね。いろんなものを憎んで、ネムにもひどい事を随分言った気がする。私はオールドホームを逃げ出して、逃げた先でも同じ様な間違いを繰り返した。最後には、自警団に捕まって、灰羽連盟からも街からも罪人と呼ばれるようになった」

ラッカ「……」

レキ「私がしてきた事は、みんな間違いだった。でもラッカは、罰を受けるような事は何もしてない。だから、これは何かの間違いで、きっとすぐに良くなるよ」

ラッカ「……レキは、繭の夢を憶えていないの？」

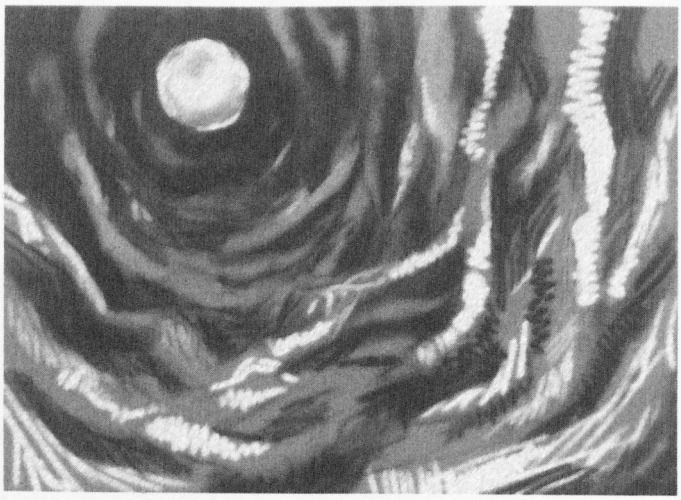
レキ「不完全なんだ。憶えてるのは、石ころだらけの道を歩いているって事だけ。思い出そうとして、ずっと絵に描いてるんだけど……」

レキ、立ち上がり、部屋の奥へ歩く。ラッカも後に続く。床には、手製のクロッキー帳や、パネルが立て掛けてある。ラッカ、何枚か手に取ってみる。良く分からない図形の描かれた抽象画や、木炭のスケッチ。かろうじて、砂利と思われるものや、二本の線で描かれた道らしきもの。水平線と夜の海の様な物などが判別できる。

レキ「この街に来てから、ずっと悪い夢を見るんだ。とても寒い夜で、赤い月が浮かんでいる。私は独りぼっちで、石ころだらけの道を歩いている。そこで、良くない事が起こる。思い出せないけど、とても恐ろしい何か。私は悲鳴を上げて目を覚

17

▲ここは、長セリフではなくて、シーンごと回想に行くか、情報を分散させて、ラッカが能動的な行動によって少しずつレキの過去に関する情報を得てゆくような構成にするべきか迷った。結局、あとの話しかない事や、ここを起点に、物語の主軸がラッカの自立から、ラッカがレキの過去に触れ、レキの救済へ変化する事を考えて、この形に落ち着いた。



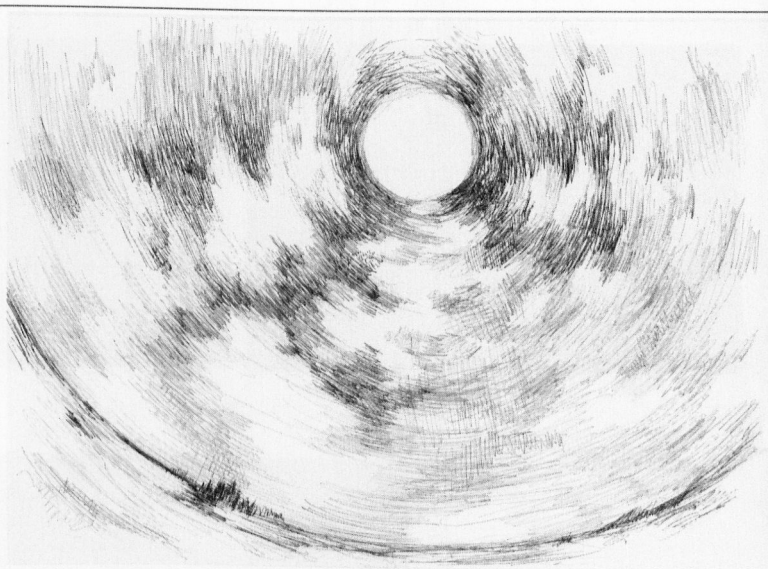
■上はレキの絵01。右が下絵、左が最終型。下絵では道の表現が線路を連想させている。右図は（順番が前後しますが）レキの絵05。月と雲。

ます……ずっとその繰り返し」
真っ黒に塗りつぶされたパネル。淡いグラデーションでかろうじて空と分かる。画面中央からややずれた不安定な位置に、どんよりとした赤い不定形の円。
レキ「私には何も分からない。どうして良い灰羽と呪われた灰羽がいるのか。どうして私が罪憑きとして生まれてきたのか。……繭の夢が思い出せれば、何か分かるのかもしれない」

●ラッカの部屋の前

ドアノブに、羽袋がぶら下げてある。
ラッカ「これ……」
ラッカ、羽袋を手に取る。メモが挟まれている。ただ一言『ごめんね』。
ラッカ、フェルトの暖かそうな羽袋を手に取り、何も言えず立ち尽す。背中の羽は、傷つき、薬で赤く汚れている。
ラッカ（モノローグ）『私はずっと、この街は楽園なのだと信じていた。でも、みんなこんなにも優しく、誰かのために精一杯生きているのに、悲しい事は起こる。呪いを受け、苦しむ者もいる』
ラッカ「灰羽って、何なんだろう――――――」
呟くラッカ。答える者は、もちろん、ない。

原稿用紙200字詰め73枚



■レキの絵04下絵。ペン画のようだが、PhotoShopの1ドット筆で、タブレットで直接描いている。僕にしては珍しい。

■右はレキの絵03。線路らしきものに見える。砂利に見えるのは、家で鍋敷きにしている古いコルクボードをスキャンしたもの。古いので、コルクの粒子が乾燥して隣接する粒子から剥がれ始めていて、砂利のように見える。下は06（このナンバーは、ファイル名なので深い意味はないのですが）。空が禍々しい。01もそうだけど、末期のゴッホの絵を少し意識ていたかもしれない。

■左は02。空と月の絵。Painterで直描き月の色はきれいに出た。下2枚は右が07、左が08。あるいているレキの周囲の風景。暗い。

▲次ページから、第７話の没稿になります。１稿から４稿まで、細部の修正というより、違った筋立ての物語が４バージョンあります。全文収録はさすがに冗長なので、できるだけ差分を拾う形で掲載しました。省略した部分は『▲』マークで注釈を入れています。

灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第07話　鳥

第1稿（2002.07.02）

○登場人物

ラッカ
ネム
レキ
ヒカリ
カナ

●サブタイトル

●ラッカの部屋（旧廃の部屋）

薄暗い部屋。風で窓がかたかたと揺れている。空は灰色で、夜でない事は分かるが、時刻は定かではない。部屋の片隅には、古びたソファがあり、ラッカが毛布にくるまり、身を縮めるようにして眠っている。うっすらと目を開けるラッカ。そのまま起き上がるでもなく、放心している。風は寒々しく窓を揺らし続けている。

●回想

西の森。ステージの上。
残されたクウの光輪を抱きしめるラッカ。

ラッカ「クウ――――」

カナ、呆然と立ちつくし

カナ「……あっけないんだな。別れなんて」

泣き顔を隠すように、フードを目深にかぶる。
泣き崩れるラッカ。その傍らに膝をつき、肩に手を置くヒカリ。

ヒカリ「泣いちゃダメだよ。壁の向こうで、クウがホームシックになっちゃう」

ラッカ「……うん。でも私、何もしてあげられなかった……」

レキ「そんなことない。みんな、できる限りの事はしたよ」

カナ、強がるように

カナ「ま、壁の外でいつか会えるさ。今度はちょっと先輩面されるのが癪だけど」

ヒカリ「壁の向こうにも、街があるのかな？道に迷わないといいんだけど」

ネム「大丈夫だよ。抜けてるようで、案外ちゃっかりした子だから、旅のトーガ達でも捕まえて、荷車の中でぐーぐー寝てるよ」

カナ「案外そのうちトーガに混じって門から帰ってくるかもな」

と、無理に冗談めかすカナ。ラッカも涙を拭いて笑顔をつくる。

ラッカ「クウはチビだから、トーガの服を着てもすぐ分かるね」

レキ「ラッカ、クウの光輪をそこへ」

レキ、ステージの先の一段高くなった所を指す。言われた通り、光輪を置くラッカ。

レキ「あっちに礼拝堂がある。クウが無事に旅できるようにお祈りしよう」

●ラッカの部屋

毛布の中から手を出し、指先を見つめるラッカ。その指先触れ、去っていったクウの姿を回想する。のろのろと身を起こすラッカ。

ラッカ「……いたた」

ソファに座り直し、背中を丸める。ずり落ちる毛布の下から羽が顔を出し、力なくひとつ羽ばたく。抜けた羽がソファに落ちる。

ラッカ「羽が痛むな……ベッド、捜さなきゃ」

立ち上がり、窓辺に行くラッカ。空を見る。重く湿った雲。

ラッカ（モノローグ）『クウが去って、1週間が過ぎた。心にぽっかり穴が開いたようで、頑張らなければという気持ちが、どんどん抜け落ちてゆく――――』

窓の下を見下ろすと、ヒカリとカナが連れだって中庭を横断して西館に歩いてくるところ。。4階の窓からは、話す声は聞こえないが、仕草は明るく楽しげに見える。

南棟から出てきた子供たちを、両手の指で鬼のツノをつくりながら、おどけて追いかけるカナ。きゃっきゃとはしゃいで逃げる子供。ころころと笑うヒカリ。いつもと変わらない、朝の風景。だが、それを見下ろすラッカの表情は悲しげに歪む。涙があふれそうになり、慌てて首を振る。

ラッカ「悲しんじゃ、だめだ……」

●回想、西の森

遠くで鐘の音がなっている。レインコートを羽織った4つの人影が、森を抜けたところ。夜、雨は止んでいる。フードをとり、振り返るカナ。森の入り口で、森を去る事が出来ず、泣きながら立ち尽くしているラッカ。

カナ「……ラッカ」

ネム、ラッカに歩み寄る。

ネム「ラッカ、いつまでも泣いてたら、クウだって安心して旅立てないよ」

ラッカ「……うん。……でも……でも」

ラッカ、必死に涙をぬぐうが、涙を止める事が出来ない。くしゃくしゃに顔を歪めるラッカ。その頬を新しい涙が伝ってゆく。

レキ、ラッカのそばにより、ささやくように

レキ「今はつらいけど、時間が癒してくれる。この街の壁は、悲しい事から灰羽を護るためにあるんだから……」

ラッカ、顔を上げる。ラッカを見下ろすレキの表情は、こか寂しげに見える。レキ、踵を返し

レキ「行こう」

歩き出すレキ。前方にはオールドホームの暗いシルエット。鐘は鳴り続いている。

カナ、空を見上げて

カナ「クウにも届いてるかな……」

ヒカリ「届いてるよ、きっと。クウにもこの鐘が標になってくれますように……」

●ゲストルーム前、廊下

ゲストルームのドアの前。ドアノブに手をかけ逡巡しているラッカ。深呼吸。

ラッカ「クウのためにも、悲しんでちゃ駄目なんだ……」

●ゲストルーム

テーブルの前で、カナ、ネム、ヒカリが楽しげに朝食の支度をしている。みんなおろしたての冬服を着込んでいる。ヒカリ、ドアの音に顔を上げ、にこやかに

ヒカリ「おっはよー、ラッカ。新しい部屋はどう？」

その屈託のなさに押されて、戸口に立ち尽くしてしまうラッカ。

ラッカ「う、うん……」

ネム「どうしたの？そんなところに立ってないで……」

ラッカ、無理に笑顔をつくり

ラッカ「いい匂い。お腹ぺこぺこ」

ネム「よかった。もう少し遅かったらカナに食べられちゃうとこだったわよ」

カナ「人聞きの悪い。アタシは良く働くから良く食うの！時計塔、今日の3時から今度こそ運転開始だかんね」

ネム「夜中の3時なんてオチはやめてよね」

カナ「ちぇ、見てろよー」

レキ、キッチンののれんからひょいと顔を出す。ラッカを見て少し安堵の表情。

ラッカ「おはよう、レキ」

レキ、持っていたフライパンを掲げて

レキ「ん。目玉焼きにベーコン乗せる？」

ラッカ「うん」

レキ、微笑み、キッチンに消える。

ラッカ、席に着く。明るく談笑するネム、カナ、ヒカリ。

ラッカはその輪に入る事が出来ない。

▲以下、しばらく日常会話が続く。ラッカの『ソファが固くて寝不足』という言葉を受けて、ヒカリとカナが、クウのベッドを使う事を提案する。落ち込んでいるラッカには、その屈託のなさが、クウがいなくなった事を軽く考えているように見えてしまい、いたたまれず部屋を飛び出してしまう。あとを追うレキ。

●オールドホーム、正門アーチ

とぼとぼと、アーチを抜けて外へ行こうとするラッカ。
無意識に出欠表に手をやり、かつてクウの札があった空白に気づく。その空白に手を差し伸べるラッカ。もちろん指先に触れるものはない。

レキ「ラッカ」

ラッカを追ってきたレキ。だが、ラッカに駆け寄ることはせず、アーチの手前で立ち止まる。陽射しの下のレキ。陰の中のラッカ。

ラッカ、レキに背を向ける。だが、手の甲で頬をこする仕草で、泣いているのが分かる。

▲レキとラッカの対話。みんなが冷たい、と非難するラッカ。悲しいという気持ちに浸ってしまっていて、周囲が見えていない。さとすレキ。

レキ「言い伝えでは、悲しむ事は、巣立ちとうとする灰羽の影を踏む事だって言われてる。ラッカが悲しむと、クウは彼の向こうで立ち止まってしまうかもしれない――」

ラッカ、両の拳をきゅっと握りしめる。

ラッカ「だからって……悲しい気持ちを消す事なんてできないよ。レキは平気なの？言い伝えがそう言ってるからって、笑えるの？」

レキ「私は……」

レキ「でも、レキ、言葉に詰まる。目を伏せ、苦しそうに

ラッカ「良い灰羽って何？レキはクウの事より……自分がいい子でいる事の方が大事なの！？」

▲レキ、ラッカに『この街では灰羽は、壁の祝福によって悲しみから護られている』と説明する。だからヒカリたちはクウが居なくなった悲しみを忘れてしまっているように見えるのだ、と、ラッカはそれに反発する。

レキ「忘れていいんだ。それは正しい癒しなんだから。灰羽は、幸せに暮らすためにここにいるんだ」

ラッカ「私……私、そんな幸せ、いらない！！」

泣きながら走り去るラッカ。レキ、それを止めることができない。走り去るラッカを呆然と目で追いながら

レキ「ラッカ……。まさか、ラッカも私と同じ……」

▲レキの言葉は、罪悪感の伏線。ここで、レキはラッカも自分と同じ罪悪さてはないかと疑いを持つ。この稿では罪悪さとは、街の祝福を受けられず、悲しみから癒されない灰羽という設定だった。外見上の差がなく、分かりづらい事と、罪悪さてはない灰羽が、感情を操られているように見える事がネックとなった。

●風の丘

昼下がり。晴れ渡った草原、低いうなりをあげ、ゆっくりと回る風車。ぼとぼと歩いているラッカ。風車のふもとに立ち、空を見上げる。威圧感のある大きな羽根は明るい空を背景にして、くっきりと黒い。風が、草原を波打たせながらラッカの元へ打ち寄せ、吹き抜けてゆく。

ラッカ、草原の彼方を見やり

ラッカ（モノローグ）『いつか、草原を歩いているクウを見かけた。あれは寺院に続く道だった。思えばあの日から、クウは帽子で光輪を隠すようになった――』

ラッカ「……どうして、何も言ってくれなかったんだろう……」

ラッカ、はっとレキの言葉を回想する。

レキ（回想セリフ）『巣立ってゆく灰羽は、決してその事を話さない――』

ラッカ、悔しそうに

ラッカ「言い伝えなんか……」

不意に、カラスの鳴き声。はっとするラッカ。風車の支柱の端に、カラスが留まってこちらを見下ろしている。知性があるかのような瞳。さらに1羽のカラスが飛んできて、近くの木立に留まる。戸惑うラッカ。突然、過去に何度かあった、目の前にカラスが現れたシーンがフラッシュバックのように脳裏に甦る。門の前でトーガを見かけた時、カナとごみ捨て場にいた時、時計台のテラスから見た壁を越える鳥。クウの巣立ちを告げた、あの鳥。

ラッカ「……なに？……私を……呼んでる？」

最初のカラスが一声鳴く。それに応じるようにもう1羽が鳴く。合唱するように数度それを繰り返し、突然2羽のカラスは飛び立つ。鳴きながら、ラッカの頭上を数度旋回し、飛び去る。それを目で追うラッカ。カラスは西の森へと消える。

ラッカ「あっちは……西の森……？」

●西の森

森の入り口に立つラッカ。一瞬不安に駆られ躊躇する。薄暗い森の中を窺うようにしていると、不意に、オールドホームの鐘が鳴る。振り返るラッカ。鐘はゆっくりと3回鳴る。

ラッカ、ほっとし、意を決して森に分け入ってゆく。森の中。歩いてゆくラッカ。木漏れ日がすっと弱くなる。陽が陰り、風が梢を揺らす。ときどきとぎれにしか見えない空を不安げに見上げる。

ラッカ「……私、言い伝えなんて、信じない」

そう自分に言い聞かせ、森の奥へと進むラッカ。

●ステージ

森を抜け、ステージのある草原にたどり着いたラッカ。

ラッカ「ここは……あの時の……」

ステージを見つけ、駆け寄るラッカ。置いたはずの光輪は無くなっている。ラッカ、驚き、光輪を置いたはずの台座に触れる。

ラッカ「無くなってる……あの時、確かに……」

呆然とするラッカ。無意識のうちにしゃがみ込んでしまう。ふと、着ている上着がクウのものであったことを思い出す。ぎゅっと両手で自分の体を抱くようにするラッカ。

ラッカ「クウ……。クウは、悲しむ人がいなくなっても、平気……？」

気づくと、先程のカラス達が頭上を舞っている。数も5～6羽に増えている。カラス達は、遺跡の上などに思い思いに留まり、ラッカを見下ろす。先程と同じように、交互に鳴く。ラッカはいつの間にかカラスに包囲されている。

ラッカ「まただ……。ここに何があるの？どうして私を呼んだの？……私に何をしろって言うのよ！！」

ラッカの叫びに驚いたかのように、カラスは一斉に飛び立つ。陽の翳りだした草原にただひとり残されたラッカ。迷い、だが意を決して駆け出す。

●森

再び森の中。不安げに辺りをきょろきょろ窺いながら進むラッカ。鳥の姿は見えず、迷い始めている。遠くで鐘の音。ゆっくりと、4度鳴る。

ラッカ「4時……。大丈夫、鐘の音があれば帰れる」

●井戸

獣道のような細い道を歩くラッカ。前方が少し開けていて、光が差している。

15メートル四方ほど、森が途切れていて、まるで木々が何かを恐れてあとずさったかのよう。傾きかけた陽射しが、森の中のその領域を浮かび上がらせている。中心には、古い井戸がある。井戸の縁やつるべに、カラスが留まり、じっとこっちを見ている。ラッカ、恐る恐る一歩踏み出す。ふ、と吐いた息が、白く染まる。

ラッカ「空気が……違うみたい……」

ラッカが近づくと、カラス達は一定の距離をとって離れた場所に移る。だが、飛び去りはしない。

ラッカ、井戸の中をのぞき込む。かろうじて枯れた井戸の底に、なにか白いものがかすかに見える。

ラッカ「何かある……！」

ラッカ、自分を逸巡きに取り囲んでいるカラス達に

ラッカ「これを見せたかったの？そのために……私を呼んだの？」

カラス達、反応はなく、ただじっとラッカを注視している。

ラッカ、井戸を覗くが、暗くて何も見えない。どうしたものか迷ううちに、井戸の端に取り付けられた、細い金属のハシゴに気づく。恐る恐る井戸の縁に上り、錆びた梯子を伝って、井戸の底に降りていく。

しんとした暗い井戸の底。何かが見える。ぼんやりとした闇の中心に、漂白したような白と、闇よりも暗い黒。

ラッカ「あれは……！」

目を凝らし、身をひねるラッカ。それが黒い鳥の死骸であると、かろうじて判別がついたその刹那、錆びついた梯子の一部が鈍い音を立てて折れる。

ラッカ「――！」

折れた梯子ごと、ラッカの体は暗い井戸の底へ消える。

●夢の両生

暗闇。今よりも少しだけ幼い、ラッカの囁き声。

ラッカ（モノローグ）『……わたしなんて……いなくなっちゃえばいいんだ――』

暗く重い、灰色の空を、ラッカは音もなく落ちてゆく。強い風に揺さぶられ、目を覚ますラッカ。クウのくれた上着を着て、光輪と羽もある。上着も羽も、泥で汚れている。風圧に逆らい、なんとか目を開けるラッカ。目を開けてしまうと、風は強いが苦しくはない。風に服はなびいているが、目を開くことはできる。ラッカ、辺りを見回し

ラッカ「空を……落ちてる……。でも……寒い……」

……。夢？……。いつか……どこかで見た

無意識に風を避けようとかざした手が泥で汚れている。

ラッカ、はっとして、緩く握っていた手を開く。泥に湿じって、黒い鳥の羽がこびりついている。眼を見開くラッカ。第一話冒頭の、空を落ちるラッカと鳥とのやり取り

ラッカ「思い出した……。あの時……。黒い鳥が傍にいて、私を助けようとしてくれた――――」

1話冒頭の、ラッカの袖をつかみ、必死にラッカを引きとどめようとするカラスの姿が蘇る。重みに耐えきれず、脚を離してしまうカラス。見る間にラッカとの距離が離れてゆく。

はっと我に返るラッカ。手のひらの黒い羽が手から剥がれ、空に舞う。ラッカ、虚空に手を差し伸べ、何かを叫ぶが、それは声にならない。雲が途切れ、視界が開ける。だが、見えてきたのは地上ではなく、地平を覆うほど巨大な井戸。ぱっくりと口を開けたその闇の中に、ラッカは吸い込まれるように落ちてゆく。

ラッカ（モノローグ）『あなたは、誰？……どうして私を――――！』

暗転。

12

●井戸の底

ぽた……ぽた……と、どこかで水音がしている。

暗闇の中に、光輪がぼうっと浮かんでいる。

ラッカ「……う……」

光輪がかすかに震える。闇に眼が慣れるように、次第に情景が見えてくる。井戸の底にうつ伏せに横たわるラッカ。折れた梯子の下敷きになっている。折れた梯子は地面に当たってさらに細かく砕け、もはや原形をとどめていない。力なく投げ出されたラッカの腕がぴくりと動く。肘をつき、身を起こそうとするラッカ。頬や髪が泥で汚れている。ぼんやりとかすむ目で手を見ると、その手は無意識のうちに土を掻き、湿った泥の塊を握りしめている。ゆっくりと手を開く。手のひらには黒い鳥の羽が握り込まれていた。

ラッカ「あ……」

眼を見開くラッカ。眼の焦点があう。汚れた手のひらの向こうに、羽を開いた状態で半ば白骨化している鳥の死骸が横たわっている。羽毛は散っているが、風切羽根はきれいに開かれた両の尺骨に、原形をとどめる程度には残っている。羽先の付近の土が、ラッカの手の形に浅く抉られている。数枚の枯れ葉と枯れ枝の中、風雨に洗われた白い頭蓋が闇の中にぼうっと浮き上がって見える。瞳のない眼窩、その二つの闇が、じっと静かにこちらを見つめている。弾かれたように身を起こすラッカ。折り重なっていた梯子の残骸がガラガラと崩れる。ラッカは身を引こうとするが、背後の石壁に背が当たり、あとずさる事はできない。手探りで背後の石壁に手をかけ、立ち上がろうとする。

ラッカ「痛っ……！」

ラッカ、足を押さえてよろめき、肩から壁にもたれる。半身を折り、両手で膝を押さえる。足元に転がる折れた梯子に気づき、頭上を見上げる。足元から2メートル強の所で、梯子は折れてなくなっている。ラッカ、痛む足をかばいながら爪先立ち、手を伸ばすが、梯子に触れる事はできない。

ラッカ「届かない……」

鳥の死骸を前に混乱し、絶望的な表情で立ち尽くすラッカ。だが、井戸の底の静謐な空気に次第に落ち着きを取り戻す。鳥の死骸には苦悶した跡はない。静かな死。遠く頭上からは、白い光が、深海に積もる微生物のように音もなく舞い降り、闇と溶け合い散ってゆく。

ラッカ「どうしてだろう。怖いのに……怖くない」

ラッカ、片足を引きずり、鳥の死骸に歩み寄る。黒い羽が散らばる死骸の傍らに跪く。

ラッカ「……あなたが、私を呼んだの？」

骨は答えない。

ラッカ「……鳥の姿をしているけど、ずっと昔、ここにいないどこかで、私、あなたを知っていた気がする……」

骨は答えない。

13

ラッカ「……その時私は、自分がいなくなっても、誰も悲しんではくれないって、思い込んでた……。私は、自分の事しか見えていなかったから、いつも独りぼっちだった。だから……消えてしまいたいと思った」

骨は答えない。

ラッカ「でも……あなたはずっと傍にいた。鳥になって、壁を越えて、私が独りじゃなかったんだって伝えようとしてくれたんだね。……ありがとう――――」

長い間。

ラッカ、手で井戸の底の土を掘り始める。

ラッカ「ごめんね。こんな事しかしてあげられなくて……」

骨を埋め、落ちていた木の枝を墓標のように挿す（十字はつくらない）。

ラッカ「私、自分の名前も思い出せないの。灰羽はみんなそうなんだって。だから私、あなたが誰なのか、思いだせない……。ただ、大切な誰か、としか……」

ラッカ「名前のないお墓でごめんね」

遠くで鐘が鳴る。はっとするラッカ。よろめきながら立ち上がり、壁に手をついて耳を澄ます。鐘は5回鳴り、それを止むと、辺りは痛いほどの静寂に包まれる。

ラッカ「5時……」

ラッカ、力なくその場に座り込む。膝を抱え、泥だらけの頬を膝に載せる。

ラッカ「みんな……」

14

●井戸の底。1時間経過

闇の中。頭上の丸く切り取られた空は、夕闇の赤に染まり、石壁につるべと滑車の影を黒く浮き上がらせている。

ラッカは先程と同じ姿勢のまま、膝を抱いて俯（うつむ）いている。

過去の色々な場面を回想するラッカ。

クウ（3話回想セリフ）『カラスと話ができたらいいのにね』

ラッカ（モノローグ）『うん……。そうだね……』

カナ（4話回想セリフ）『鳥はさ、忘れ物を運ぶんだって』

ラッカ（モノローグ）『私が忘れてしまったもの……。忘れてしまった世界……。私はそこで、誰かを傷つけてしまったのかもしれない……』

スミカ（5話回想セリフ）『ね、生まれてくる時って、どんなだった』

ラッカ（5話回想セリフ）『……夢の中で、誰かが守ってくれた気がして……』

スミカ（5話回想セリフ）『いいこと聞いちゃった』

ラッカ（5話回想セリフ）『え？』

スミカ（5話回想セリフ）『親の気構えってやつをね』

ラッカ、膝にうずめていた顔を上げる。鳥の墓を見下ろす。

ラッカ「私を守ってくれた誰か……」

恐る恐る、声をかけるラッカ。

ラッカ「……おとうさん……おかあさん……？」

答える者はない。ラッカ、再び膝に顔を押し当てる。

ラッカ「分からないよ……」

再び鐘の音が鳴る。

ラッカ「6時……。もう陽が暮れる……。みんな、心配してるかな……？」

15

▲5話のスミカのセリフが伏線として生きたので、物語の展開が変わってもこのシーンはできたら入れたいと思った。しかし流れを考えると、やはりカットせざるを得なかった。

ここではラッカが、もし自分が死んだら自分も忘れられてしまうのだろうかと考え、パニックを起こす。

ラッカ「誰か――！」

叫び声は、軋るような残響を残して消える。消えた後にはよりいっそう深い静寂が訪れる。両手を壁につき、呆然と空を見上げるラッカ。遥か頭上の小さな円の向こうでは、先程までの夕闇の赤と、夜の闇が交じり合い、不安定なグラデーションをつくっている。

ラッカ「う……」

石壁に爪を立て、登ろうとするラッカ。何度も試みるうち、かろうじて1段登りかけるが、すぐにがりっと嫌な音を立てて滑り落ちる。

ラッカ「あっっ……！」

言葉にならない悲鳴。痛めた足は体を支える事ができず、ラッカは不自然な姿勢で頽（くずお）れる。指先を見ると、爪が割れ、血が滲んでいる。絶望的な表情で、もう一度空を見上げる。救いは現れない。

●井戸の底。さらに時間経過

夕闇の色は後退し、空は完全に夜の色。うずくまっているラッカ。

ラッカ（モノローグ）『私が自分の事しか考えない我が儘な子だから、罰が与えられたんだ……』

レキ（7話回想セリフ）『――――悲しむ事は、巣立とうとする灰羽の影を踏む事だって言われてる……』

ラッカ（7話回想セリフ）『私、そんな幸せ、いらない！』

ラッカ（モノローグ）『私、いつだって自分の事しか考えずに……。でも、クウの事、忘れるなんて……』

ラッカ、はっとする。

レキ（7話回想セリフ）『――――もう少し羽が体に馴染んだら、悲しい事も、私が今話した事も、忘れる事ができる……』

ラッカ（じゃあどうして、レキは忘れていないの？）

レキ（回想セリフ）『巣立ちの日は、誰にいつ訪れるか分からないんだ。……ただ、ある日ふっと居なくなってしまう……』

レキ（回想セリフ）『みんな、私を置いていっちゃうんだな……』

ラッカ「レキは忘れてないんだ……。クウの前にも、巣立ちの日があったってレキは言ってた……。私とおんなじ悲しみを、レキはずっと忘れないまま……」

ラッカ（7話回想セリフ）『レキは平気なの？言い伝えがそう言ってるからって、笑えるの？』

レキ（7話回想セリフ）『私は……』

ラッカ（7話回想セリフ）『レキはクウの事より……自分がいい子でいる事の方が大事なの！？』

ラッカ「私、ひどい事いっちゃった……」

顔を伏せ、身を縮めるラッカ。

ラッカ「謝りたい……」

17

●ゲストルーム。日没直前

ドアを開け、レキが駆け込んでくる。

レキ「ラッカは？戻った？」

ベッドの端に、所在なげに座っていたカナ、レキを見返し、首を横に振る。

カナ「そっちは？」

レキ「街には行ってない。目ぼしい場所は回ってみたけど……」

カナ「なあ、やっぱりこれは……」

レキ、カナの言葉を遮り

レキ「クウの時とは違う。ラッカはまだ灰羽として定まってもいなかったんだし」

ヒカリ「もうすぐ、陽が落ちちゃう」

ネム「最後に会ったのはレキ？」

レキ、頷く。

レキ「……すまない。あの時、ラッカを呼び止めに行って口論に」

ヒカリ「ごめんなさい。私が変なこと言ったから……」

カナ「ああ、もう！こんなとこで責任のかぶりっこしてもしょうがないだろ！探しに行くぞ待つ？どっちっ？」

ネム、ベランダから外を見て

ネム「まだ、外出してもおかしくない時間だけどね……。でも、夜になって慌てるくらいなら、今行きましょ。取り越し苦労でもいいじゃない」

カナ「ケンカして帰って来づらいだけなら、どっかその辺にいるんじゃないかな」

ヒカリ「じゃ、中を一回りして、それから外に行こう」

ばたばたと部屋から出てゆくヒカリとカナ。ネム、後に続こうとして、ふと後ろを振り返る。俯き、立ち尽くしているレキ。

ネム「まさか……ラッカがこのまま家出しちゃうなんて考えてないわよね？」

レキ、苦い顔で微かに笑い

レキ「ラッカは私ほど馬鹿じゃないさ……。でも、似てるんだ」

ネム「……5年前の、あの時と？」

レキ、顔を歪める。

ネム「……ごめん」

レキ「いいよ。……行こう」

●井戸の底。夜

頭上の円からは、遠く星が見える。

ラッカ「寒い……」

井戸の片隅で、体を縮め、震えているラッカ。上着についているフードをかぶっている。

ラッカ（モノローグ）『誰かを失う痛み……こんな痛みが、和らぐ事なくずっと続くのだとしたら、生きていく事は、きっと、堪え難いほど辛いに違いない。同じ季節が巡ってくる度に、同じ場所に立つ度に、誰かのほんの些細な言葉のせいで、この刺すような痛みが甦るのだとしたら……』

のろのろとした動作で両手を見るラッカ。爪が割れ、血と泥で汚れた手。出血は止まっている。

ラッカ（モノローグ）『体の怪我が治るように、心の痛みも時間が経てばいつかは消えるのだろうか……。この街が、それを手助けしてくれるなら、それは間違ったことではないかもしれない。みんなに悲しみを残すと知っていたら、誰も巣立ってゆく事なんてできはしないだろうから』

ラッカ「クウ……ごめんね……わたし……もう……泣かないから……」

疲労と寒さで次第に意識が遠のいてゆく。

ラッカ（モノローグ）『だから……誰かに悲しみを残すのならば……消えてしまいたいなんて、思ってはいけなかったんだ……』

ラッカ、次第に霞んでゆく瞳で、鳥の墓を見る。

ラッカ「あなたは……それを……伝えたかったんだね……」

……」

ラッカ、目を閉じる。すべてが闇に包まれる。

▲読み返してみると、確かにラッカの心が不安定過ぎて、感情移入しづらいかもしれない。そして、例え祝福という言葉を使っても、目に見えない外的な力で心のありようが変わってしまうという設定は、少なくともこの作品では上策ではなかった。ラッカがそう感じたように、観る側にとっても、罪悪感ではないヒカリ、カナ、ネムとの間に急に距離ができてしまい、オールドホームの雰囲気が壊れてしまう危険性もあった。何より、わかりづらい。

そういった指摘を受けて、2稿の作業にかかった。

2稿では、ツミというキャラクターがあらわれる。ラッカの心の揺れや、この世界に対する認識の変化を何とか視覚的に表現しようとした。

灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第07話　鳥

第2稿（2002.07.08）

○登場人物

ラッカ
ネム
レキ
ヒカリ
カナ
ツミ

●サブタイトル

●間

暗闇。何もない空間に、ラッカがぽつねんと立っている。不安げな表情。（ここまで4話と同じ）辺りをきょろきょろと見回すが、何も見えない。不意に、白っぽい手が暗闇の中からするとり現れ、ラッカの肩の上に置かれる。骨がないようなぬるりとした動き。驚き、振り返るラッカ。

白い、幽霊のようなラッカが、ぼんやりと闇の中に立っている。正確にはラッカの姿を模した何か。羽と光輪はない。眼を半眼に開き、暗い目でラッカを見ている。

ラッカ「私がいる……？どうして？」

ラッカ（白）「私はツミだよ」（以下『ツミ』と表記）

ラッカ「つみ？私、なにか悪い事をしたの？」

ツミ「したよ。とても良くない事だよ。だから、来たんだ。……憶えてないの？」

ラッカ「……おずおずと頷く。

ツミ「それはよくないよ。自分がやった事だもの。思い出しなよ」

ラッカ「……」

ツミ「あんたが、自分の事しか考えないからこんな事になったんだ。今さら知らん顔はないよ」

ツミ、ラッカの光輪を指でつつく。

ツミ「こんなもので身を隠しても無駄だよ。この街は罪憑きの灰羽を識ってはくれないんだから」

ラッカ、一歩退く。ツミ、すぐに間を詰める。

ツミ「今までは仲間がいっぱいいてなかなか近寄れなかったけど、あんたが心を閉ざしてくれたおかげでやっと捕まえられた。もう離さないよ」

ツミ、ラッカの腕をつかむ。

ラッカ「冷たい……」

ツミ「大丈夫、すぐくっつくから。ほら、ほら」

ラッカの腕をつかんだツミの手と、ラッカの腕の接点の輪郭が、じわりと滲む。

ラッカ「あ、あ……」

ツミ「今は夢の中だけだけど、そのうち太陽の下でもくっついていられるようになるよ。そうしたらあんたの心から、悲しみは二度と消えない。あんたを悲しみで押しつぶして、本当の罪憑きにしてやる……」

突然、すぐ近くで羽音。はっとして振り向くツミ。黄色い眼と嘴がすぐ眼前に迫っている。4話の夢ではただラッカを見ているだけだった黒い鳥が、ツミに襲いかかる。思わずラッカから手を放し、身をかばうツミ。

ツミ「わっ！まだこんな奴が……」

ラッカ、つかまれていた手を押さえ、あとずさる。激しい羽音。恐怖に負け、悲鳴を上げようとするラッカ。

●ラッカの部屋（旧鶴の部屋）

ラッカ「――――――！」

甲高くかすれた、軋るような悲鳴。がたっという音。薄暗い部屋。風で窓がかたかたと揺れている。空は灰色で、夜でない事は分かるが、時刻は定かではない。

部屋の片隅には、古びたソファがあり、そのすぐ下の床で、ラッカは毛布にくるまったまま、身を固くして震えている。細かい汗をびっしりとかいている。

ラッカ「……夢……？ああ……どんな夢だったろう……」

ラッカ、床の上に座り直し、両手を広げてみる。左腕に、煤で汚れた手で握られたような跡が残っている。

ラッカ「憶えてない……でも……怖かった……」

窓の外で、澱（よど）んだ空気を振り払うように時計塔の鐘が鳴る。ゆっくりと我にかえり、気怠そうにのろのろと身を起こすラッカ。

ラッカ「……いたた」

床の上で、背中を丸める。ずり落ちる毛布の下から羽が顔を出し、力なくひとつ羽ばたく。抜けた羽が床に落ちる。それを拾い上げ

ラッカ「……ベッド、捜さなきゃ」

立ち上がり、窓辺に行くラッカ。空を見る。重く湿った雲を割って、帯のような光がちらほらと差し始めている。窓を少しだけ開き、息を吸うラッカ。肺を刺す冷気に、眼を細める。

ラッカ「冬がきたよ、クウ――――」

ラッカ（モノローグ）『クウが去って、ひと月が過ぎた。オールドホームにも少しずつ、以前の活気が戻り、季節は移り変わってゆく。……私を置き去りにして――――』

▲以下、活気を取り戻したオールドホームの描写と6話の回想。内容は1稿とほぼ同じ。ラッカのモノローグは、上田さんから「歌謡曲みたいで恥ずかしいぞ」と言われ、変更。言われてみると、確かに。

1稿の構成と比較して、みんなが部屋までラッカを呼びに来るシーンを追加したのは、1稿で問題になった、クウの果立ちのショックを乗り越えてゆく仲間たちが、ラッカの視点から見て、遠い存在になり過ぎないため。

●ラッカの部屋

ドアをノックする音。はっとするラッカ。

レキ「ラッカ、起きてる？」

返事をする事ができず、すくんだように立ち尽くしてしまうラッカ。鐘は鳴り止んでいる。

ドアの向こう、一拍の間。小声の会話。

ヒカリ「あれぇ？まだ寝てるのかな？」

カナ「おっかしいなあ。」

ヒカリ、少し大きな声で

ヒカリ「ご飯だよ、ラッカ。最近朝食の時間に降りてこないから。朝はちゃんと食べなきゃダメだよ」

カナ「待ってるからさ」

ドアの向こうから人の気配がきえる。気づかぬうちにこわばっていた肩から、ふっと息をつきながら力を抜き、窓にもたれる。しばし間。

▲以下は、1稿の朝食のシーンと同じ。他愛のないやりとり、ラッカにクウのベッドを使う事をすすめるヒカリ達、ショックを受け、駆け出してしまうラッカ。あとを追うレキ。ただし、ラッカの駆け出した先が、正門前からクウの部屋に変更になっている。この稿では、ラッカは扉囲が見えておらず、他の仲間たちがクウの部屋の掃除をしていた事になっている。

●オールドホーム西館1階。クウの部屋

ドアを慌ただしく開き、ラッカが部屋に入ってくる。後ろ手にドアを閉め、そのままドアにもたれる。俯くと、涙が粒になってぽろぽろとこぼれる。それを拭いながら、クウの部屋を見回すラッカ。きれいに整えられている。古びて縫い目のほつれかかったネコのぬいぐるみの載った小さなベッド。小さな机。棚や床にはどこからか拾ってきたガラクタが積み上がっている。プリキのじょうろ、その隣にはいくつかの緑色のきれいなガラス瓶が、背の高い順に並んでいる。窓際にはクレヨンと小石で描かれた池があり、陶器でできた蛙の人形が窓縁のまわりで団欒（だんらん）している。部屋の隅には、同じくクレヨンでウィンクした顔に書き換えられている石膏の首像に、クウがいつもつけていた帽子がかぶせられている。

レキ「ラッカ」

近づいてくる足音。ラッカ、はっとして、ドアに鍵をかける。がちっという音。

レキ「ラッカー？」

その音に気づいて駆け寄るレキ。ガチャガチャと音をたててドアノブを捻る。

レキ「ラッカ、開けて」

ラッカ「嫌！クウの部屋をなくさないで！」

レキ「ラッカ、みんなラッカを元気づけようとして……」

ラッカ「そんな事、してほしくない！」

ラッカ、ドアにもたれたまま顔を覆い

ラッカ「クウは行っちゃったのに……もう会えないのに……みんな、平気な顔で……。信じられない……」

レキ「みんなだって、悲しくないわけない。でも、どこかで区切りをつけなきゃ」

ラッカ「だから、クウの部屋を消してしまうの？そんなの間違ってる！」

レキ「ラッカ……」

ラッカ、ずるずるとしゃがみ込む。膝を抱え

ラッカ「私の中には、まだクウがいるの。……なのに、みんなクウの事、どんどん思い出にしてしまう。このままクウの部屋がなくなったら、きっと……」

レキ「……ラッカは、クウの事、忘れたくないんだね」

ラッカ、顔を上げる。悲しいような、怒っているような表情。

ラッカ「……それがいけない事？」

レキ「言い伝えでは、悲しむ事は、巣立とうとする灰羽の影を踏む事だって言われてる。だから、悲しんでちゃ、いけない……」

言い伝えを盾に正論を口にするレキの言葉は、どこか固く、空々しい。ラッカ、両の拳をぎゅっと握りしめる。

ラッカ「レキは平気なの？言い伝えがそう言ってるからって、クウの事忘れて笑えるの？」

レキ「私は……」

苦しげに、目を伏せるレキ

レキ「でも、良い灰羽は、そうあるべきなんだ」

ラッカ、身を震わせ言葉を吐き出すように

ラッカ「レキもみんなと同じだ！クウがいなくなっても平気なんだ」

ラッカ「どうして壁があるの？壁がなければ離れ離れにならなくて済むのに……」

レキ「この街の壁は、灰羽を悪い事から護るためにあるって、言われてる……」

ラッカ「うそだ……。だって、壁のせいでこんなに悲しいんじゃない……」

レキ「……」

ラッカ「私、そんな言い伝え信じない！壁なんていらない。クウに会えないなら、こんな羽もいらない！」

レキ「……ラッカ、私はどうしたら悲しみが消えるのか知らない。5年前にも、私は大切な友達を失った。その痛みは今も消えない。だから、傷そうな顔でラッカに強く生きろなんて言えないし、泣きたければ泣けばいいと思う。でも、目を開けて、良く見てごらん」

ラッカ、顔を上げ、部屋を見る。

レキ「どうしてその部屋に埃ひとつないのか、分かる？」

ラッカ、はっとする。

レキ「毎日みんなで掃除してたんだよ。ラッカが自分の部屋に閉じこもってた間も、みんな、悲しみを乗り越えようって頑張ってたんだ。でも、住む人がいない部屋は、いくら掃除しても何かが失われていくから……。だから、クウの部屋が廃虚に遭う前に、形見分けをしようって」

ラッカ「……」

ラッカ、立ち上がる。

レキ「みんな、クウの事忘れたりしないよ。私達は仲間だから。……その事だけは信じて」

ラッカ「……」

●クウの部屋の前の廊下

ドアの前から離れ、歩み去るレキ。途中で心配そうに振り返るが、ドアの中からは何の物音もしない。目を伏せ、立ち去るレキ。

●クウの部屋

いつの間にか雲は去り、光の燦々と差す窓辺。薄暗い部屋のドアの方から、ラッカが歩いてくる。足元から光が這い上がり、眩しそうに窓辺に立つラッカ。窓縁の蛙の人形を見る。親指大だが精巧な造り。

シルクハットに髭のある父親蛙が池の縁で得意げに2本足でふんぞりかえっている。よく見ると、背中に『レキ』と描かれている。近くにマッチ箱と小石でできた家があり、エプロンを付けた母親蛙が立っている。エプロンに『ネム』と描かれている。眼鏡をかけて学者の帽子をかぶったヒカリ、水仙の葉の上で居眠りをしているカナ。そして、池のほとりの小石に寄り添って座っている2匹の小さな蛙。背中には『クウ』と『ラッカ』。

ラッカ、自分の名前の描かれた蛙を指でつつく。ことん、と倒れる人形。ラッカ、静かに手で顔を覆う。暖かな昼の陽射しの中で、その姿は祈りのように見える。

●風の丘

昼下がり。晴れ渡った草原。低いうなりをあげ、ゆっくりと回る風車。とぼとぼと歩いているラッカ。風車のふもとに立ち、空を見上げる。威圧感のある大きな羽根は明るい空を背景にして、くっきりと黒い。風が、草原を波打たせながらラッカの元へ打ち寄せ、吹き抜けてゆく。

ラッカ、風車の支柱にもたれ、拗ねたように、足元をそよぐ草を爪先でつつく。

ラッカ（モノローグ）『レキとみんなに謝らなきゃ……。でも……』

俯くラッカの横顔。

ラッカ（モノローグ）『クウ……私――――』

ひときわ大きな風が、草原とラッカの上着をはためかせ、過ぎ去ってゆく。ラッカ、草原の彼方を見やり

ラッカ（モノローグ）『いつか、草原を歩いているクウを見かけた。あの日から、クウは帽子で光輪を隠すようになった――――』

▲以下、1稿と同じ。鳥に促され、森に入るラッカ。ステージで光輪がなくなっている事に驚く。鳥は数を増し、ラッカを井戸に導く。井戸を覗き込み、何かを見つけ、ハシゴをつたって井戸を降りるラッカ。ハシゴが折れ、ラッカは闇の中へ。夢の再生。井戸の底で、ラッカは目を覚ます。

ラッカ「……う……」

光輪がかすかに震える。闇に眼が慣れるように、次第に情景が見えてくる。井戸の底にうつ伏せに横たわるラッカ。折れた梯子の断片がいくつか散らばっている。力なく投げ出された腕がぴくりと動く。肘をつき、身を起こそうとするラッカ。頬や髪が泥で汚れている。ぼんやりと霞む目で手を見ると、その手は無意識のうちに土を掻き、湿った泥の塊を握りしめている。ゆっくりと手を開く。

――――手のひらには黒い鳥の羽が握り込まれていた。

ラッカ「あ……」

眼を見開くラッカ。眼の焦点があう。汚れた手のひらの向こうに、羽を開いた状態で半ば白骨化している鳥の死骸が横たわっている。羽毛は散っているが、風切羽根は、辛にされたかのように開かれた両の尺骨に、原形をとどめる程度には残っている。羽先の付近の土が、ラッカの手の形に洗われた白い頭蓋が闇の中にぼうっと浮き上がって見える。瞳のない眼窩、その二つの闇が、じっと静かにこちらを見つめている。弾かれたように身を起こすラッカ。だが、背後の石壁に背が当たり、あとずさる事はできない。手探りで背後の石壁に手をかけ、立ち上がろうとする。

ラッカ「痛っ……！」

ラッカ、足を押さえてよろめき、肩から壁にもたれる。半身を折り、両手で脛を押さえる。足元に転がる折れた梯子に気づき、頭上を見上げる。足元から2メートル強の所から、石壁の色が明らかに変わっている。そこから下の梯子は、赤く錆びており、大半が折れてなくなっている。一番下の梯子は、ラッカの肩の辺り。そこより下は、壁の石組みが曖昧になっている。ラッカ、痛む足をかばいながらその梯子に手を伸ばす。梯子は、ラッカの指が触れた瞬間、ぽろりと崩れ落ちる。もう一度上を見

ラッカ 上げるラッカ。
ラッカ「ここ、ずっと水の下だったんだ……」
絶望的な表情で立ち尽くすラッカ。だが、井戸の底の静謐な空気に、次第に落ち着きを取り戻す。ゆっくりと視線を落とす。鳥の死骸には苦悶した跡はない。静かな死。遠く頭上からは、白い光が、深海に積もる微生物のように音もなく舞い降り、闇と溶け合い敷ってゆく。
ラッカ「どうしてだろう。怖いはずなのに……」
ラッカ、片足を引きずり、鳥の死骸に歩み寄る。黒い羽が散らばる死骸の傍らに跪く。
ラッカ「……あなたが、私を呼んだの？」
骨は答えない。
ラッカ「……鳥の姿をしているけど、ずっと昔、ここじゃないどこかで、私、あなたを知っていた気がする……」
骨は答えない。
ラッカ「……その時私は、自分がいなくなっても、誰も悲しんではくれないって、思い込んでた……。私は、自分の事しか見えていなかったから、いつも独りぼっちだった。だから……消えてしまいたいと思った」
骨は答えない。
ラッカ「でも……あなたはずっと傍にいた。鳥になって、壁を越えて、私が独りじゃなかったんだって伝えようとしてくれたんだね。……ありがとう――――――」
長い間。
ラッカ、手で井戸の底の土を掘り始める。
ラッカ「ごめんね。こんな事しかしてあげられなくて……」
骨を埋め、落ちていた木の枝を墓標のように挿す（十字はつくらない）。
ラッカ「私、自分の名前も思い出せないの。灰羽はみんなそうなんだって。だから私、あなたが誰なのか、思いだせない……。ただ、大切な誰か、としか」
ラッカ「名前のないお墓でごめんね」

遠くで鐘が鳴る。はっとするラッカ。よろめきながら立ち上がり、壁に手をついて耳を澄ます。鐘はゆっくりと鳴り続ける。壁に倒れ掛かるように、額を壁に押し当て祈るラッカ。
ラッカ「みんな……」

●井戸の底。1時間経過

闇の中、頭上の丸く切り取られた空は、夕闇の赤に染まり、石壁につるべと滑車の影を黒く浮き上がらせている。ラッカは壁際で膝を抱いて俯（うつむ）いている。
過去の色々な場面を回想するラッカ。
クウ（3話回想セリフ）『カラスと話ができたらいいのにね』
ラッカ（モノローグ）『うん……。そうだね……』
カナ（4話回想セリフ）『鳥はさ、忘れ物を運ぶんだって』
ラッカ（モノローグ）『私が忘れてしまったもの……。忘れてしまった世界……。私はそこで、誰かを傷つけてしまったのかもしれない……。』
スミカ（5話回想セリフ）『ね、生まれてくる時って、どんだった』
ラッカ（5話回想セリフ）『……夢の中で、誰かが守ってくれた気がして……』
スミカ（5話回想セリフ）『いいこと聞いちゃった』
ラッカ（5話回想セリフ）『え？』
スミカ（5話回想セリフ）『親の気構えってやつをね』
ラッカ、膝にうずめていた顔を上げる。鳥の墓を見下ろす。
ラッカ「私を守ってくれた誰か……」
恐る恐る、声をかけるラッカ。
ラッカ「……おとうさん……おかあさん……？」
答える者はない。ラッカ、再び膝に額を押し当てる。
ラッカ「分からないよ……」
再び鐘の音が鳴る。
ラッカ「もう陽が暮れる……。みんな、心配してるかな……？」

ツミ（7話回想セリフ）『……したよ、とても良くない事だよ』
突然甦る夢の記憶。ラッカ、はっとする。頭上で月が雲に隠れ、深い闇が降りてくる。その闇の底に、血にまみれた白い不定形の塊がぼんやりと姿を現す。かつてツミであった何か。とっさに怯え、身構えるラッカ。だが、ツミは壁にもたれてしゃがみこみ、痙（おこり）のように震えている。あらぬ方角を向き、うわ言のようにつぶやく。
ツミ「思い出せよ……思い出さなきゃ駄目だよ……」
ラッカ（モノローグ）『私の罪……。そうだ。私は……消えていまいたいと思って……どこか遠い場所で……命を捨ててしまったんだ――――――』
ツミ、震えながら二ッと笑う。赤い牙が覗ける。だが、ツミはラッカの姿を模してはいるものの既に力を失い、その姿を維持する事が出来ない。鱗のある肢体。手足は痩せ細り、眼球は爬虫類のようなアーモンド型の瞳。服と皮膚が融合してしまっている。額から夥しい量の血を流している。浅く速い呼吸。時折歯を剥き、シャッ、という威嚇音。
ラッカ「ツミ……」
ツミの体は少しずつ縮み、本来の姿に戻りつつある。小さな手足の生えた白い蛇のような姿。それとラッカの姿が綯（な）い交ぜになって、異形の獣のような姿になっている。ラッカの髪であったものが鬣（たてがみ）のように見える。苦悶し、あらぬ方角に威嚇音を発するツミ。
ラッカ「もう……何も見えてないんだ……」
ツミの瞳は、今やラッカの手首よりも細い。ラッカ、そっと傍により、ツミに話しかける。
ラッカ「私は私の罪を思い出したよ……。私、絶対に逃げないから……」
ラッカ、血で汚れた手を伸ばし、ツミの背を撫でる。反射的に牙をむくツミ。だが、ラッカの手に敵意のない事を悟り、すこし迷った後、額をこつ、とラッカの手に押し当てる。

ヒカリ（7話回想セリフ）『ご飯だよ、ラッカ。最近朝霞の時間に降りてこないから――――――』
カナ（7話回想セリフ）『待ってるからさ』
ラッカ（7話回想セリフ）『そんな事、してほしくない！』
ラッカ（7話回想セリフ）『だから、クウの部屋を消してしまうの？そんなの間違ってる！』
レキ（7話回想セリフ）『毎日みんなで掃除したんだよ。ラッカが自分の部屋に閉じこもってた間も、みんな、悲しみを乗り越えようって頑張ってたんだ――――――』
ラッカ「みんなに、謝らなきゃ――――――」
よろめきながら立ち上がるラッカ。
ラッカ「う……」
石壁に爪を立て、登ろうとするラッカ。何度も試みるうち、かろうじて一段登りかけるが、すぐにがりっと嫌な音を立てて滑り落ちる。
ラッカ「あっう……！！」
言葉にならない悲鳴。痛めた足は体を支える事ができず、ラッカは不自然な姿勢で顛（ぐずお）れる。指先を見ると、爪が割れ、血が滲んでいる。絶望的な表情で、もう一度空を見上げる。救いは現れない。

●井戸の底。さらに時間経過

夕闇の色は後退し、空は完全に夜の色。うずくまっているラッカ。憔悴した顔
ラッカ（モノローグ）『私が自分の事しか考えない我が儘な子だから、罰が与えられたんだ……』
レキ（7話回想セリフ）『――――――悲しむ事は、巣立とうとする灰羽の影を踏む事だって言われてる……』
ラッカ（7話回想セリフ）『レキもみんなと同じだ！クウがいなくなっても平気なんだ』
ラッカ（モノローグ）『私、いつだって自分の事しか考えずに……』
ラッカ（7話回想セリフ）『つみ？私、なにか悪い事をしたの？』

ラッカ「もう冷たくない……」
ツミ、一瞬体が半透明に透けたかと思うと、ラッカの手の中に染み込むように消える。
再び、静寂が訪れる。

●ゲストルーム。日没直前

ドアを開け、レキが駆け込んでくる。
レキ「ラッカは？戻った？」
ベッドの端に、所在なげに座っていたカナ、レキを見返し、首を横に振る。
カナ「そっちは？」
レキ「街には行ってない。目ぼしい場所は回ってみたけど……」
カナ「なあ、もしかしてこれって……」
レキ、カナの言葉を遮り
レキ「クウの時とは違う。ラッカはまだ灰羽として定まってもいなかったんだし」
ヒカリ「もうすぐ、陽が落ちちゃう」
ネム「最後に会ったのはレキ？」
レキ「……すまない。あの時、ラッカと口論になって、それで……」
ヒカリ「ごめんなさい。私が変なこと言ったから……」
カナ「ああ、もう！こんなとこで責任のかぶりっこしてもしょうがないだろ！探しに行く？待つ？どっち？」
ネム、ベランダから外を見て
ネム「まだ、外出してても おかしくない時間だけどね……。でも、夜になって慌てるくらいなら、今行きましょ。取り越し苦労でもいいじゃない」
カナ「ケンカして帰って来づらいだけなら、どっかその辺にいるんじゃないかな」
ヒカリ「じゃ、中を一回りして、それから外に行こう」
ばたばたと部屋から出てゆくヒカリとカナ。ネム、後に続こうとして、ふと後ろを振り返る。俯き、立ち尽くし

ているレキ。
ネム「まさか……ラッカがこのまま家出しちゃうなんて考えてないわよね？」
レキ、苦い顔で微かに笑い
レキ「ラッカは私ほど馬鹿じゃないさ……。でも、似てるんだ」
ネム「……レキ、顔を歪める。あの時と？」
レキ「いいよ。……行こう」

●井戸の底。夜

頭上の円からは、遠く星が見える。
ラッカ「寒い……」
井戸の片隅で、体を縮め、震えているラッカ。上着についているフードをかぶっている。
ラッカ（モノローグ）『――――――5年前にも、私は大切な友達を失った。その時の痛みは今も消えない……』
ラッカ（モノローグ）『誰かを失う痛み……こんな痛みが、和らぐ事なくずっと続くのだとしたら、生きていく事は、きっと、堪え難いほど辛いに違いない。同じ季節が巡ってくる度に、同じ場所に立つ度に、誰かのほんの些細な言葉のせいで、この痛みが甦るのだとしたら……』
のろのろとした動作で両手を見るラッカ。爪が割れ、血と泥で汚れた手。出血は止まっている。
ラッカ（モノローグ）『体の怪我が治るように、心の痛みも時間が経てばいつかは消えるのだろうか……。この街が、悲しみから灰羽を護り、手助けをしてくれるなら、それは間違ったことではないかもしれない。みんなに悲しみを残すと知っていたら、誰も巣立ってゆく事なんてできはしないだろうから』
ラッカ「クウ……ごめんね……わたし……もう……泣かないから……ごめんね……」
疲労と寒さで次第に意識が遠のいてゆく。

ラッカ（モノローグ）『だから……誰かに悲しみを残すのならば……消えてしまいたいなんて思ってはいけなかったんだ……』

ラッカ、次第に霞んでゆく瞳で、鳥の墓を見る。

ラッカ「あなたは……それを……伝えたかったんだね…………」

ラッカ、目を閉じる。すべてが闇に包まれる。

原稿用紙２００字詰め８枚

▲これが２稿。今読み返すと、やはりラッカが不安定過ぎて、ここまでの話数の雰囲気と落差が大き過ぎるかもしれない。あと、ツミの描写が少なくて、井戸の中でツミが本来の姿でラッカの前に現れ、消失するシーンの意味が伝わりづらいかもしれない。ツミの死を見届ける事と、鳥に墓をつくる事がかぶってしまう事や、ツミと言うキャラクターがいる事で、ラッカが不安定になってゆく原因がクウの消失ではなく、ツミにあるような印象になってしまう事もマイナス要因となった。

第３稿は第２稿を調整したもの。物語の展開は大きな違いはないが、井戸の底でのラッカとのやりとりを膨らませている。全体的な構成は変わらないため、割愛。

第４稿は、ツミというキャラクターをラッカの幻像ではなく、独立したキャラクターとして残い、罪悪きという概念をなんとか分かりやすく伝えようとしている。しかし、結果としてファンタジーの世界観からさらに非現実の世界へと物語のトーンが変化してしまい、また、ツミの言動にラッカが振り回され過ぎていて、本来描きたかったラッカの内面とは違うものになってしまっている。

他の話数のボツ原稿は、長さの関係で割愛した部分などの再録で、映画のDVDなどのおまけディスクのような感覚で楽しんでもらえるかなと思うのだけど、今回は純粋に簡的な問題でボツになったものなので、掲載するのは気が引ける……というか恥をさらすようでどうにも居心地が悪いのだけど、まあ、こういう紆余曲折を経ていたのだという記録の意味で掲載します。お目汚し申し訳ないです。

灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第07話　罪の在処（仮）

第４稿（2002.07.18）

○登場人物

ラッカ
ネム
レキ
ヒカリ
カナ
ツミ

●サブタイトル

●闇

暗闇。何もない空間に、ラッカがぽつねんと立っている。不安げな表情。（ここまで4話と同じ）辺りをきょろきょろと見回すが、何も見えない。ふと前を見ると、いつの間にか、すぐ目の前に小柄な少女が立っている。少女は静かに手を差し伸べ、ラッカの手首を握る。怯え、顔を歪めるラッカ。少女は構わずラッカの手を引いて歩き出す。白い服、白い肌、白い髪の少女は、闇の中で幽鬼のように見える。手を引かれうなだれたラッカは、刑吏に引かれる罪人のよう。

ラッカ「……どこへ行くの？」

少女（以下ツミと表記）「誰もいない所へ。ラッカは仲間達と一緒にいてはいけないの」

ラッカ「どうして？」

ツミ「ラッカは罪悪きだから」

ラッカ「つみ……つき？」

ツミ「あなたは灰羽になる資格がないの。みんな祝福を受けてここにいるのに、あなたは罪を負ってここに来たのだから」

ラッカ「罪……？」

ツミ「そう。だから、あなたには何の力も無い。誰かを幸福にする事も出来ないし、あなたには巣立ちの日も訪れない。巣立ってゆく仲間を、ただ見送るだけ」

ラッカ「そんな……」

二人は暗闇の中を歩いてゆく。かさ、かさ、と枯れ葉を踏むような足音。

ツミ「クウがいなくなって悲しい？」

こくんと頷くラッカ。

ツミ「悲しみは病のようなものだから、街に護られた灰羽はいつか癒される。でもあなたの悲しみは永遠に消えない。死に至る病のように」

ツミ、足を止める。

ラッカ「罪……。私、何をしたの？……？」

ツミ「憶えていないの？……あなたの心は損なわれているのね」

ツミ、ラッカから手を放し、少し離れた足元を指さす。暗闇の中を、数歩歩くラッカ、ほんの僅かな闇の濃淡で、目の前に、闇よりさらに暗い、丸い穴がぽっかりと開いているのが分かる。からっ、と小石の崩れる音。一拍の間をおいて、闇の底から、かつん、と小石が地に当たる音。

ラッカ「……ここは？」

遠くでかすかに鐘の音が聞こえる。振り返るラッカ。ツミ、一歩退き

ツミ「……この場所を思い出せなければ、あなたは永遠に救われない……」

闇に溶けるように、ツミは姿を消す。

●ラッカの部屋（旧鵬の部屋）

薄暗い部屋。風で窓がかたかた揺れている。灰色の空。時計塔の鐘が鳴る。

部屋の片隅には、古びたソファがあり、ラッカが毛にくるまり、身を縮めるようにして眠っている。うっすらと目を開けるラッカ。そのまま起き上がるでもなく、放心している。風は寒々しく窓を揺らし続けている。

ラッカ「また……同じ夢……」

再び、窓の外で、澱（よど）んだ空気を振り払うように時計塔の鐘が鳴る。ゆっくりと我にかえり、気怠そうにのろのろと身を起こすラッカ。

ラッカ「……いたた」

ソファの上で、背中を丸める。ずり落ちる毛布の下から羽が顔を出し、力なくひとつ羽ばたく。抜けた羽が床に落ちる。それを拾い上げ

ネム「灰羽はね、自分が居ていい場所っていうのが分かるものなの。自分を必要としてくれる場所っていうのかな」

ラッカ「私……そんな事、一度も……」

レキ「そのうち見つかるよ。それまではチビ共の世話を手伝ってくれてもいいし」

ラッカ「うん……」

●オールドホーム、正門アーチ

とぼとぼと歩いてくるラッカ。何気なく出欠表の札をひっくり返そうとして、クウの札が無くなっている事に気付く。

ラッカ（モノローグ）『こんな風に、ひとり、またひとりと、誰かが消えていってしまうのだろうか。最後に私一人が残されて……』

ツミ「そうだよ。ラッカは独りぼっちになるんだ」

はっとして振り返るラッカ。すぐ脇にツミが立ち、ラッカを見上げている。ツミ、くすっと笑い、ラッカを追い越してアーチの外に駆け去る。陽射しの中に出た瞬間、ツミの体は透き通って消える。

●街

街の中を歩くラッカ。自分の場所を捜すが見つからない。疲れてカフェに入る。

ラッカ「豆のスープを」

マスター「ああ、最近よく来るね。注文、それだけでいいの？」

ラッカ、こくんと頷く。

マスター「そうだ、最近坊主をみないなあ。知らない？君よりかチョイ背の低い元気な坊主」

ラッカ「……クウ」

マスター「ああ、そうそうそんな名前。あ、女の子か！坊主坊主言って悪かったなあ。ははは、謝っといてよ」

ラッカ「クウは……もう、行ってしまったんです」

マスター「え……？じゃあ、もういないの？」

「こくんと頷くラッカ。

マスター「へえ……。ああ、灰羽ってのは、そういうもんらしいね……。そうかあ……。あ、テイクアウトだよね」

マスター、小さな紙のカップに詰めたスープを渡す。ラッカ、俯き、もぞもぞと手帳を取り出す。最後の1枚。マスター、それに気付き

マスター「あ、いいよ、奢り奢り。そいつは今度ばぁっとフルコースでも食べに来た時にね」

ラッカ「でも……」

マスター、笑顔で軽く手を振りながら、他の接客に行ってしまう。もじもじと迷い、結局慌ただしくお辞儀をして走り去るラッカ。

●街角

並木の下、木蔭の柵に座ってスープのカップをじっと見下ろすラッカ。いつの間にか、ツミが隣に座っている。

しょんぼりとしている二人。

ツミ「親切にされたのが後ろめたい？そうだよね、だって親切にしてもらう価値なんて、ラッカにはないもの」

嫌みではなく、心底同情している口調のツミ。

ツミ「この街にいる限り、灰羽はどこに行ったってチヤホヤされる運命なんだよ。灰羽は幸せの象徴なんだから」

ラッカ「私――――」

ツミ「うん……。ラッカは罪悪きだから、周りを幸せになんか出来っこないよ。かわいそうだね、あのおじさん。ラッカが役立たずとも知らないで」

ラッカ「……」

ツミ「クウがいてくれたらよかったのにね」

ラッカ「やめて！」

ツミ「まだ悲しいの？あのおじさんだって、みんなだって、もう平

ネム「ラッカは？」

ヒカリ、首を振り

ヒカリ「最近、朝ご飯食べに来ないね」

カナ「誰かさんの寝坊癖がうつったんじゃねえの？」

ネム「む」

ヒカリ「カナ」

カナ、椅子の背もたれに寄りかかって万歳のポーズ。

カナ「相談だよ、最近よく、街に食べに出てるらしいよ」

ヒカリ「一人で？」

カナ「一人でいたいのかもな。クウがいなくなって、一番落ち込んでたし」

ネム「そっとしてあげた方がいいのかしら」

レキ、フライパンを持ってキッチンから首だけ出して。

レキ「相談するのはいいけどさ、ラッカに会った時ぎくしゃくしないでよ。そう言うのが一番……」

がちゃっとドアが開く。ラッカ、戸口に立ち、カナ達を窺う。一瞬固まってしまうカナ達。

レキ「おはよう。ちょうどトーストが焼けるとこだよ」

さらりと言い、フライパンを置き、席に着くレキ。ネム も落ち着きを取り戻し

ネム「どうしたの？そんなとこに立ってないで」

ラッカ、のろのろと食卓に着く。トースターのチン、と言う音。ちょっとぎこちない間。

俯き、目の前のティーカップを両手で包むようにするラッカ。

ヒカリ「そ、そうだ、最近、街に行ってるんだって？仕事、見つかった？」

ラッカ「……ううん、まだ……」

ネム「ラッカがここに来て、もうすぐ三月……。そろそろ決めないとねぇ」

ヒカリ「何か、自分とつながりを感じるような場所はなかった？」

ラッカ「つながり……？」

カナ「なんかさ、ピンとくるんだよ、ここだ、って。……分かんないってことは、まだなのかなあ」

ラッカ「……。」
ツミ「冷めるよ」
ラッカ「……。食べられないよ」
ツミ「じゃ、捨てる？親切でもらったものを？それもひどいよね」
ラッカ「あなたにあげる」
ラッカ、ツミにカップを差し出す。微かに冷笑的な笑み
を浮かべるツミ。次第に馴れ馴れしい態度を取り始める。
ツミ「ラッカ、私はラッカにしか見えてないんだっては、恥ずかしいマネやめてよね。……泣かないでよ、変な事言ってゴメン。……食べなよ。おなか減って倒れたら、またみんなに迷惑かけるよ」
ラッカ「うん……」
ラッカ、のろのろとスープを口に運ぶ。ツミ、街をゆく人をつまらなそうに眺めながら
ツミ「よく噛みしめなよ、自分の罪をさ」

●古着屋

古着屋の前。逡巡するラッカ。
ツミ「入りなよ。これからどんどん寒くなるんだから」
ラッカ「でも……」
ツミ「一人で寒そうにしてたら、みんな余計心配するよ」
ラッカ「……」
落ち込んだ顔で、ドアを開けるラッカ。相変わらずヘッドフォンをかけてカウンターテーブルに顎を付けて寝そべっている店員。店内には二十歳前後の若いカップルが買い物をしている。女の方がラッカに気づき
女「わー、駆け寄ってくる女。びくっと身を引くラッカ。女、そんなラッカの様子に気付きもせずはしゃいでいる。
女「羽さわっていい？わー、本物だー。ふかふか」
男、手に取っていた服を棚に戻し、歩いてくる。
男「ほらあ、やめろよ。迷惑がってんじゃん」

女「えーそんなことないよねー」
ラッカに同意を求める女。どうしていいか分からず立ち
竦んでしまうラッカ。男、女の頭をこつんと小突き
男「いくよ。（ラッカに向かって）ごめんな」
出て行くカップル。ドアの向こうから女の声
女「うわー羽羽見ちゃった。ラッキー。今日絶対いい事あるよ」
男「何言ってんだか……」
呆然としているラッカ。店員、ようやく目を覚まし、うーん、と伸びをしてヘッドフォンを外す。ラッカに気付き
店員「あ、いつだったかの新人さん。いらっしゃい」
ラッカ、ちょこっと頭を下げる。
店員「街には慣れた？こっちの冬、早いんでびっくりしただろ」
ラッカ、また曖昧にこくんと頷く。店員、ラッカの元気のなさに少し躊躇をひそめる。
暗い表情のまま、黙々と服を選ぶラッカ。店員、肘をついて少し怪訝そうにラッカを眺めている。ラッカ、長袖のワンピースを手に取り
ラッカ「……これ」
店員「あいよ」
店員、受け取った服をラッカの前にかざして、明るい調子で
店員「靴も合わせようか」
ラッカ「え？でも……」
店員「サンダル履きじゃ寒いだろ。もうじき雪が降るし」
ラッカ、恥ずかしそうに半歩あとずさる。季節外れでいかにも寒そうな爪先。
店員「これなんかどう？」
ラッカ「あの、でも……」
店員「……買い物、嫌い？」
ラッカ「え？」
店員「いや、なんかつまんなそーにしてるからさ。気に入らなかった？
ラッカ、ちょっとすまなそうに

ラッカ「そんなこと……。すいません」
店員「いや、謝る事じゃないけどさ。……何があったか知らないけど、買い物の時くらい、気分転換しなきゃ、な」
ラッカ、力なく微笑み、頷く。
店員「じゃ、これ。羽が通るようにしようか？」
ラッカ「いえ……じ、自分でやります」
店員「じゃ、ブーツとまとめて袋に入れとくよ」
ラッカ「でも、私、手帳、あと1枚しか……」
店員「いいよ1枚で。新しい手帳、すぐもらえるんでしょ？」
店員、ラッカから手帳の最後の1枚を受け取り、手早くサインをする。
ラッカ「私、まだ、仕事見つけてないんです。だから……」
店員、ちょっと心配そうに
店員「ああ、そうかあ……。いろいろ大変だと思うけどさ、頑張りな。仕事なんてすぐ見つかるって。連盟の許可があったらうちに来て欲しいくらいだ」
ラッカ、店員から荷物を受け取る。俯くラッカ。
ラッカ「でも……私、役立たずの灰羽だから……」
ぽろぽろと涙がこぼれる。慌てる店員。踵を返し、店から飛びだすラッカ。
店員「あっ、おい！」
あっけにとられて立ち尽くす店員。

●風の丘

日が暮れかかっている。緑の縞せた草原。前方にオールドホームが見える。
アーチ子の手前の橋を渡った辺りに、人影が見える。寮母、子供たち、レキ達。にぎやかに笑いあいながら、歩いてくる。とっさに、風車の影に隠れるラッカ。
風車のつくる長い影の中に、ツミが立っている。
ツミ「みんなきっと街で夕食をとるんだね。行かないの？」
ラッカ「……だって、私……みんなとは……違うもの」

ツミ、ラッカの手を握り、慰めるように
ツミ「苦しい？ラッカ。私さ、ラッカが悲しんでるの見るの辛いから教えちゃうけどさ、楽になる方法もあるんだよ。自分は罪悪きだって言って回るの。みんな優しいから、誰もラッカを責めないよ。オールドホームのみんななんか、きっとすごく同情して、いたわってくれるよ。かわいそうなラッカちゃん、て。……そうする？」
首を横に振るラッカ。
ツミ「そうだよね。ラッカはいい子だから、そんな風に開き直って生きてく事なんてできないもんね」
ラッカ「私……私……」
ラッカ、オールドホーム裏手に向かって逃げるように走る。それを目で追うツミ。にっと笑う。

●ゲストルーム

ドアをぎっと開けて、ラッカが入ってくる。薄暗い部屋。
食卓に、メモが置いてある。
『ラッカへ。みんなで街に夕ごはんを食べに行きます。
これ見たら来てね。みんなより』
下に店の地図。ラッカ、紙を戻し、静かに泣き始める。
暗転。

●闇

暗闇。何もない空間に、ラッカがぽつねんと立っている。
不安げな表情。辺りをきょろきょろと見回すが、何も見えない。手を伸ばすと、何かに触れる。パントマイムのように、真っ黒な何かを手探りするラッカ。
ラッカ「石の……壁だ」
反対側に手を伸ばし、数歩歩くとまた壁。狭い、丸い部屋のような空間だと分かる。ふと傍らに、さらに深い闇があり、何かが居る。じっと目を凝らすラッカ。

それは、泥にまみれ、うずくまった人影。長い茶色の髪と痩せた肩の線。背を向けているため誰だかは分からない。足音を立てないように近づくラッカ。よく見ると、背中から、醜く折れ曲がった骸骨の腕のように、羽毛を失った羽が生えている。いや、かつて羽だったもの。光輪はない。両手で顔を覆い、声を殺して泣いている。年は分からない。若い女ののようにも老婆のようにも見える。
ラッカ「あの……。どうして泣いてるんですか？」
女「……私に近寄ってはいけません。私は呪われているのです」
ラッカ「呪い……？」
女「……私はかつて、光の当たる場所で、たくさんの灰羽と暮らしていました。でも、皆祝福を受けて巣立っていくのに、私だけは祝福を受けられず、取り残され、独りぼっち……。だから、誰の目にも触れないこの場所にいるのです」
ラッカ「あなたは……？」
女「私の名前を呼ぶものはもうありません。みんな行ってしまった。……遠い昔、仲間達は私をラッカと呼んでいましたが……」
眼を見開くラッカ。
ラッカ「そんな――――」

●ラッカの部屋（旧寮の部屋）

ツミ「――――ッカ―ラッカ―！ねえ」
ラッカ、揺り起こされる。
ラッカ「う……」
ラッカ、ソファに横たわり、毛布にくるまったまま、身を固くして震えている。
ツミ「怖い夢を見たんでしょ。すごいうなされてたよ」
ラッカ「ツミ……あなた……」
憔悴し、身を起こす事も出来ないラッカ。その前に佇むツミは、昨日より成長している。ツミ、窓辺に行き
ツミ「窓開けるね」

ラッカ、やっとの事で起き上がり
ラッカ「今の夢……あなたが……」
窓辺からラッカを振り返るツミ。悠然と微笑む。ラッカと同じくらいの背丈。
ツミ「もうすぐ夢じゃなくなるよ。最初はクウ。次は誰だろうね」
ラッカ「やめて……」
ソファの上で体を折るようにして顔を伏せるラッカ。
ツミ「みんな、巣立っていく仲間を祝福してるよ。悲しくたって、灰羽は乗り越えられる。泣いてるのはラッカだけ」
ラッカ、いやいやをするように首を振る。
ラッカ「あなたのいってる事はみんな嘘よ……」
ツミ「……じゃ、自分で確かめたら？みんながクウの事どう思ってるのか」
ツミ、窓を開ける。カーテンがふわっとなびき、光が差し込む。ツミは消えている。
ラッカ「……」

●ゲストルーム

音を立てないようにドアを開け、おずおずと入ってくるラッカ。テーブルの前で、カナ、ネム、ヒカリが楽しげに朝食の支度をしている。ラッカ、その明るい空気に気圧されて、戸口に立ち尽くしてしまう。ヒカリ、ふとラッカに気づき、一瞬表情を固くする。一同、ヒカリにつられるようにして戸口を見る。一瞬の間。ラッカ、無理に笑顔をつくり
ラッカ「お……おはよう」
ヒカリ、ぱっと明るくなる。傍にいたレキも安堵の表情。
ヒカリ「おはよう！」
ネム「よかった。もう少し遅かったらカナに食べられちゃうとこだったわよ」
カナ「人間食の悪い、アタシは良く働くから良く食うの！アタシの時計塔のおかげで、寝坊しないで済んでるくせに」
ネム「あら、今日は8時の鐘の30分も前に起きたんですけど」

カナ「ちぇ、ひねくれもん！」
レキ、みんなの皿に目玉焼きを載せている。空になったフライパンを持ち上げて見せ、
レキ「目玉焼きにベーコン乗せる？」
ラッカ「う、うん」
レキ、微笑み、キッチンに消える。
ヒカリ「そうだ、新しい部屋はどう？慣れた？」
ラッカ「う、うん。でも、まだなんにもないから……」
カナ「ああ、そうだよな－。アタシも引っ越しの時、その辺の空き部屋からいろいろかき集めてきたっけ」
ネム「ガラクタばっかりね。底の抜けたタンスを拾ってきて、アレが無くなったコレが無くなったって大騒ぎしたり」
カナ「なんでそんな事ばっか憶えてるかな」
無邪気に笑うヒカリ。ふてくされて見せつつ上機嫌のカナ。つられて笑うラッカ。ふと、座るものの無くなったクウの席に目が行く。ぼんやりと見つめてしまう。周囲の談笑する声が遠のく。
ネム「どうしたの？ぼーっとして」
ラッカ「え？あ……」
ヒカリ「寝不足？」
ラッカ、無理に笑顔をつくり
ラッカ「……う、うん。ちょっと。……ソファのクッションが固くて」
ヒカリ、少し改まって
ヒカリ「あ、まだベッドないのか。寒くなる前に何とかしないと」
ラッカ「あ、ま、まだ大丈夫だ」
ヒカリ、ラッカの顔を覗き込む。
ヒカリ「あのさ、この前みんなで話して、そろそろ、クウの部屋を片づけてあげようって決めたの。だから、クウのベッド使ったらどうかな？」
ラッカ「ええっ？」
カナ「ああ、いいんじゃないかな。運ぶなら手伝うよ」
ラッカ「でも……それは――――」
ネム「クウならいいって言うと思うよ」
ラッカ「そんな……それは、そうかもしれないけど……けど……」
レキ、キッチンから出てくる。
レキ「わりい、焦げた……。ラッカ？－」
ラッカ、椅子を倒し、走り去るところ。ぽかんとする三人。
レキ「何？」
カナ「いや、ラッカがソファで寝てるって言うからクウのベッド使えばって……。そしたら急に……」
ヒカリ「……レキ、表情を固くする。ヒカリ、おろおろしながら
レキ「……私、悪い事言っちゃったみたい」
レキ「持ってて」
カナ「ああ？」
レキ、戸口に走る。
ヒカリ「私も行く！」
レキ、ドアノブをつかんだまま振り向き
レキ「いいんだ、任せて」
ヒカリ「でも……」
レキ「大丈夫だから」
走り去るレキ。心配そうなヒカリ。

●オールドホーム西館1階、クウの部屋

ドアを慌ただしく開き、ラッカが部屋に入ってくる。後ろ手にドアを閉め、そのままドアにもたれる。俯くと、涙が粒になってぽろぽろとこぼれる。それを拭いながら、クウの部屋を見回すラッカ。きれいに整えられている。古びて縫い目のほつれかかったネコのぬいぐるみの載った小さなベッド。小さな机。棚や床にはどこからか拾ってきたガラクタが積み上がっている。プリキのじょうろ、その隣にはいくつかの緑色のきれいなガラス瓶が、背の高い順に並んでいる。窓際にはクレヨンと小石で描かれた池があり、陶器でできた蛙の人形が窓縁の上まわりで団欒（だんらん）している。部屋の隅には、同じくクレヨンでウィンクした顔に書き換えられている石膏の首像に、クウがいつもつけていた帽子がかぶせられている。
レキ「ラッカ」
近づいてくる足音。ラッカ、はっとして、ドアに鍵をかける。がちっという音。
レキ「ラッカ？」
その音に気づいて駆け寄るレキ。ガチャガチャと音をたててドアノブを捻る（以下シーン末までドア越しの会話）。
レキ「ラッカ、開けて」
ラッカ「嫌－クウの部屋をなくさないで－」
レキ「ラッカ、みんなラッカを元気づけようとして……」
ラッカ「そんな事、してほしくない！」
ラッカ、ドアにもたれたまま顔を覆い
ラッカ「クウは行っちゃったのに……もう会えないのに……みんなは平気なんだ……」
レキ「みんなだって、悲しくないわけない。でも、どこかで区切りをつけなきゃ」
ラッカ、ずるずるとしゃがみ込む、膝を抱え
ラッカ「私の中には、まだクウがいるの。……なのに、みんなクウの事、どんどん思い出にしてしまう。私を置いていかないで。クウの事、忘れないで……」
レキ「ラッカ……。言い伝えでは、悲しむ事は、巣立とうとする灰羽の影を踏む事だって言われてる。だからいつまでも悲しんでちゃいけない……」
言い伝えを盾に正論を口にするレキの言葉は、どこか固く、空々しい。ラッカ、両の拳をぎゅっと握りしめる。
ラッカ「レキは平気なの？言い伝えがそう言ってるからって、クウの事忘れて笑えるの？」
レキ「私は……」
苦しげに、目を伏せるレキ
レキ「でも、良い灰羽は、そうあるべきなんだ」
ラッカ、身を震わせ言葉を吐き出すように
ラッカ「レキもみんなと同じだ－クウがいなくなっても平気なんだ」
泣き崩れるラッカ。

レキ「……ラッカ、私はどうしたら悲しみが消えるのか知らない。5年前にも、私は大切な友達を失った。その痛みは今も消えない。だから、傷そうな顔でラッカに強く生きろなんて言えないし、泣きたければ泣けばいいと思う。でも、目を開けて、良く見てごらん」
ラッカ、顔を上げ、部屋を見る。
レキ「どうしてその部屋に埃ひとつないのか、分かる？」
ラッカ、はっとする。
レキ「毎日みんなで掃除してたんだよ。ラッカが自分の部屋に閉じこもってた間も、みんな、悲しみを乗り越えようって頑張ってたんだ。でも、住む人がいない部屋は、いくら掃除しても何かが失われていくから……。だから、クウの部屋が廃虚に遷る前に、形見分けをしようって」
ラッカ「……」
ラッカ、立ち上がる。
レキ「みんな、クウの事忘れたりしないよ。私達は仲間だから。……その事だけは信じて」
ラッカ「……」

●クウの部屋の前の廊下

ドアの前から離れ、歩み去るレキ。途中で心配そうに振り返るが、ドアの中からは何の物音もしない。目を伏せ、立ち去るレキ。

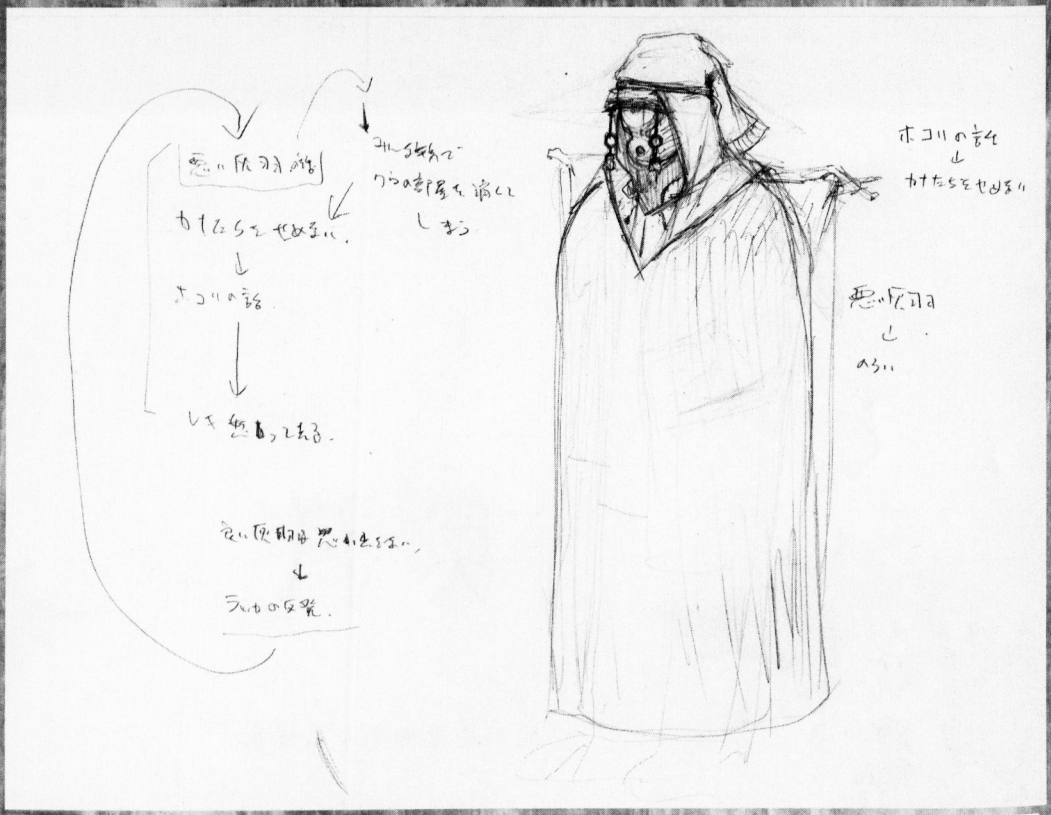
●クウの部屋

いつの間にか雲は去り、光の燦々と差す窓辺。薄暗い部屋のドアの方から、ラッカが歩いてくる。足元から光が遠い上がり、眩しそうに窓辺に立つラッカ。窓縁の蛙の人形を見る。親指大だが精巧な造り。
シルクハットに髭のある父親蛙が池の縁で得意げに2本足でふんぞりかえっている。よく見ると、背中に『レキ』と描かれている。近くにマッチ箱と小石でできた家があり、エプロンを付けた母親蛙が立っている。エプロンに『ネム』と描かれている。眼鏡をかけて学者の帽子をかぶったヒカリ、水仙の葉の上で居眠りをしているカナ。そして、池のほとりの小石に寄り添って座っている2匹の小さな蛙。背中には『クウ』と『ラッカ』。
ラッカ、自分の名前の描かれた蛙を指でつつく。ことん、と倒れる人形。ラッカ、静かに手で顔を覆う。暖かな昼の陽射しの中で、その姿は祈りのようにも見える。

▲このバージョンでは、7話にはここまでしか入らず、井戸のエピソードはかなりあとの話数に持ち越される予定だった。このバージョンでは、クラモリは存在せず、ラッカを救おうとするレキの物語を主軸に、それが次第にレキを救おうとするラッカの物語となってゆく、という可能性もあった。
しかし、8話で多少フォローするつもりだったが、この時点ではラッカがへこみ過ぎていて、ちょっと観る側が置いてきぼりになってしまうという意見が多く、僕自身も読み返して、クウの果たちから井戸のエピソードまでの、ラッカの感情が正しく追えていない事に気づき、このバージョンもボツになった。
クウがいなくなった事の悲しみがこの世界に対する疑念を呼び、それが罪悪感という異変を呼び、それがレキとラッカの軋みがりを生みだすきっかけとなり、最終的に井戸のエピソードへと繋がってゆく……。書き飽ぐと脚本をすり替えてゆくような印象になるし、ラッカに負荷をあたえるツミという導き手を設定すると、どうしてもラッカの心の変化を自然な形で追えなくなってしまう。
代案として、罪悪感は卵が変化するという設定を思いついたのだが、その瞬間、レキの生まれたシーンや子供時代、クラモリの存在などが次々と生まれ、ほぼ現在の形の構成ができた上がった。その構成に関しては、かなり手応えを感じていたものの、ツミというキャラクターに思い入れがあった事や、井戸のエピソードが一話寝ろにずれ込んだ上、過去の回想やクラモリというキャラクターを追加して1－3話に収まるのかという不安や、今まで以上にアドリブで物語を組み立ててゆく事になるというプレッシャーからクラモリの存在するバージョンへの移行を決断できずにいた。そこで上田さんから、卵が黒くなる設定はどうかという提案があり、それが後押しになって
、ツミと言うキャラクターは捨てて、井戸のエピソードを8話に持ち越し、全体を整理し直した。
第5稿はほぼ完成形になり、7稿までかけて細部を調整して、決定稿となった。難産でした。
でも、物置で誰にも見つけられず独りで生まれたレキの姿が脳裏に浮かんだ瞬間、まるで堰を切ったようにレキとネムの子供時代の事、クラモリの事、廃工場のヒョコとヒドリの事などが見る見るうちに物語の形になってくれて、その時の嬉しさ、というか推理小説の謎解きのような感動は今でも忘れられません。こういう経験があるから作家を続けられるのだと思います。

原稿用紙200字詰め72枚

■DVDのおまけシールの下絵。このクウは、上田さんから大人び過ぎている、といわれて、シールになったものは微妙に目鼻のバランスを修正しています。いわれると、ちょっと面長かな？という気はしなくもないですが、そんなに変ではないと思うけどなあ……。



■上は、7話改稿中のものと思われるメモ。よく分からないけど悩んでますね。話師のデザインラフと一緒に発掘。右は、うろ覚えですがツミ。設定画は探し出すのが大変だったので記憶を頼りに描いてみました。

奥付

灰羽連盟脚本集第伍巻

発行責任者　ＡＢ／安倍吉俊

発行元　むてけいロマンス

発行年月日　２００５年１１月２１日

連絡先　abetc@mac.com

無断転用を禁じます